
光翼のリベンジャー『だけど俺は戦闘狂だった』

蒼鳥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

光翼のリベンジャー 『だけど俺は戦闘狂だった』

【Nコード】

N1722T

【作者名】

蒼鳥

【あらすじ】

それは始業式の次の日のこと。 , ,

悪の組織(?)に誘拐されたクラスメイトを救出するために日向たちは奇襲作戦をすることになった。 , ,

そこで発覚した日向の驚愕の秘密とは—— ! , ,

「俺……実は、戦闘狂だったんだ」

「……は？」

養成学園に通う主人公、成宮日向は一見普通の鈍感主人公に見えて
実は戦闘狂だった！？

……ラノベとしてありなのかどうかは置いておいて皆さんのおかげ
で5万5千PV、ユニーク1万突破！！

意思によって形状が変化する武器での変幻自在バトルと、個性豊かな
キャラたちによる学園ラブコメが織り成す主人公戦闘狂系ノベル
！！

ラノベ好きの方や、主人公最強ものが好きな方はぜひ読んでくだ
さい！！
このあらすじは多少本文とズレがございます。ご
了承ください。 11月14日追記：今週テストがありますので次
話の更新は遅れます

イラストコーナー 11/5更新

はい、ということでここでは「光翼」関連でいただいた絵を紹介していかうと考えてます^^

第一回目は→プー太LOW←さんに依頼していた絵を例にしながら紹介していきます^^

「絵」

>i34254—4234<

「今回の絵師さん」

ユーザー名；→プー太LOW←

「絵師さんの小説紹介」

小説名；執事一揆

あらすじ&URL;http://ncode.syosetu.com/n5687o/

「大国アトランティヌスの王についてまだ日の浅いアラン・ルーラーのもとに先代の専属執事セバスチャンに雇われたロール・クライシスは昔、ホームレス状態だったがその卓越した知識や技術、身体

能力を買われて専属執事として働くが王のそばを歩けるのは王妃が側室だけという絶対的な世界で女ということを隠して先代の専属執事との約束である王を立派にするため一生懸命努力するが側近にばれて何故か見初められるわ、王様に男でもかまわないとせがまれるわでてんてこ舞い！

そんなユルダラ少女の奮闘の生活を書いたラブコメです」

「絵の説明&感想」

→プー太LOW←さんに依頼していた絵です^^

左から順に「日向」「香奈」「凜華」です

『三話くらいまで読んだイメージでお願いします』とか今思えばなんとも描きにくい依頼だっただろうに（特に制服とか）ホントすごいです！

それにこんなにカラフルにしていただけなんて思ってもなかったんでとても嬉しいです！><ありがとうございました！！

と言った感じでこれから紹介していきます♪

ですので宣伝目的を兼ねていても構いません（ここに載せて効果があるかは保障できませんが…）

上手い下手などは関係ありません！

キャラや人数なども指定はありません！

似顔絵であったり日常風景であったり戦闘シーンであったりなども指定はありません！

どうぞ気軽に描いてみてください！

みなさまの絵を心よりお待ちしております^^

質問等ありましたら蒼鳥までメッセージなり活動報告のコメントなりでお聞きください。

プロローグ（前書き）

初投稿ですのでまだまだ未熟者です（^^;）感想や評価なども待っています。悪いところの指摘だけでもありがたいです。

ちなみにお気に入り登録が増えるたびに作者は部屋で踊ります（笑）次話からついている「第〇話」「」の「」はその話の中ででてくるセリフの一つです。

プロローグを見る限りでは「これ学園？」と思うかもしれませんが、次話からほとんどが学園生活等がメインですのでご安心を

ブローグ

それは進んだ科学によって人の生活がより便利になっていたある日のこと。

戦争のない国も少しずつ増え、きつといつまでもこんな平和な日常が続くのだろうとほとんどの人々が心のどこかで感じていた。

それに人々は科学が進歩したこの時代では全てが科学でどうにかなると思っていたので人類が絶滅する、という危機感は無かった。

現にかなり問題になっていた地球温暖化も今ではもう大丈夫だ。

そう、人類が絶滅するなど物語の中だけだと思っていた。

しかしいつもと同じ日常が続いていたこの日、状況は一転する。

謎の地球外生命体の襲来。

どこか爬虫類を思わせるようなその巨体は小さいものでも3mはあるだろう。

そして生命体たちの容姿は同じだったり違ったりと様々だったが、やつらは人間をみつけるなり何のためらいもなく襲い掛かった。

なぜ襲うのかはわからない。が、人類に敵意をもっていることは明らかだった。

これは今まで好き勝手自由によつてきた人類に対する世界の、神々の答えなのだろうか。

人々は絶望した。

自分達はこの化け物たちに勝てるのだろうか。

最初の襲来は最新の兵器や軍の投入で辛うじて撃退できた。しかし、2回目以降は生命体の数も増え、敗戦することが多くなった。

そこでこの謎の地球外生命体に対し、どの国の政府も緊急対策本部（略獣）を設置、世界共通の名称として謎の地球外生命体のことを「アグレッシン」と名づけた。

ただ終わることのなかった戦争がアグレッシンの襲来によって停戦したのは不幸中の幸いだった。

さらに各国の政府はアグレッシンに対抗するために新たに特殊武器《ブレイカー》を作成し、ブレイカーを扱う者を育成するための教育機関も設置した。

そして人々はアグレッシンのことを神の答えと受け取り、唯一やつらと渡り合えるであろうブレイカー使用者たちのことを、願いを込めこう呼んだ。

「ゴッド・リベンジャー
神に復讐する者」

こうして人はアグレッシン対策を進め、比例するように徐々に勝率も上がってきた。

これで一安心か。しかし人の最大の敵はアグレッシンではなくやはり人間だった――。

時は流れ現在^{いま}。

各国がブレイカーの作成、強化を進めていた間に日本の対策本部はある男にあるものを頼んでいた。

それは成功すれば、アグレッシンはおろか、国一つ滅ばせることができる究極の兵器。そして養成学園の本当の目的を果たすことができるもの。

だが、男は学園の目的を知り、学園にバレないよう最後の希望を作る。

そしてそれは男の予定通りその男の息子に渡り、最後の希望として今はまだ眠っている。

第一話 「う、うるさい！ 早く行く！ これは命令よ！」（前書き）

この作品はライトノベルをかなり意識しているのでラノベを読む感じで読んでいただき、感想・評価いただけると嬉しいです。

第一話 「う、うるさい！ 早く行く！ これは命令よ！」

ピピピピッ！ ピピピピッ！

雲ひとつない快晴の空の朝、聞きなれてる目覚まし時計の音が今日もまた、盛大に鳴り響く。

「……眠い」

俺は目覚ましの音に眉をひそめながら手探りで時計をとり、音を止める。

いつもならこのまますぐに起きられるはずだが、今朝はなぜか寝た気がしない。

（まあ後5分くらいならいいか……）

「バカ日向、起きなさい！ これは命令よ！」

……どうやら最近の目覚まし時計は音を止めても起きないと喋りだすらしい。いやあ、素晴らしい。科学の進歩だね。

もつとも、朝からなんとも稀少な喋る目覚ましを聞いたからといって起きてやるわけではない。

俺は音源から遠ざかるように寝返りをうつ。

「……私がせつかく起こしにきてんのに。いいわ、そっちがその気なら意地でも起こしてあげる」

へえ、結構色々喋れるじゃないか。だけどそろそろ止まってくれないかな――

「っへぐふお!？」

うるさい雑音からさらに逃げるようにうつぶせになった俺に、まるで芸人の頭にタライが落っこちてきたときのような強い衝撃と音が腰あたりにおそってきた。

いきなりの襲撃に頭が混乱しつつ目を開けてみると、そこには幼馴染の凜華が上にまたがっていた。

状況を見るに、どうやらさっきの衝撃は凜華が俺に乗ってきたときのらしい。

「——って、なんだよ？」

「いいから早く起きなさいよ」

凜華はそう言いながら俺の背中に乗っけていた右手を後ろに引き、「イタツ! ちよつ、やめろ!」

「私がせっかく起こしにきてあげてんのに! このまま脊椎折りたいの? それともこの状況から助かるためにあの川でも渡る?」

それって渡ったら人生が終わってしまう絶対渡っちゃ駄目な川だろ! ってかどっちにしろ俺は死ぬしかないのか!?

「……それ以前に現実でそんなギャルゲみたいな朝迎えても全然嬉しかねえよ」

反論する気も失せた俺は、「幼馴染が寝坊しそうな主人公を起こしにくる」という定番のシーンを目の当たりにした率直な感想を述べてみる。

……まあ、ギャルゲで幼馴染に叩かれて起こされるなんて聞いたこともないけどな。

(最悪の目覚めだ……)

いまだにポカポカ叩いてくる凜華の腕を押さえながら、俺は深いため息をつく。

俺の名前は成宮日向。なるみやひゅうが

特に得意なこともない18歳だ。髪は少し茶色が混じっており、よく「染めた？」なんて聞かれるが、地毛だ。断じて染めてはない。背は170後半。体は下級生徒のときのトレーニングのおかげで結構引き締まってるほうだとは思う。友達から「日向って初対面だと全然喋らないクールな奴だよな」なんて言われたが……褒め言葉なのか違うのかよく分からない。

でもって俺の上にまたがってる大バカは幼馴染の杉原凜華。すぎはらりんか

身長は俺より頭一つ分くらい小さく、少し赤みがある茶色の長髪の一部を後ろで一つに束ねている。少し違うけど、簡単に言うとポニーテールだ。

体はすらつとしていて顔も整っている。おじいちゃんが外国人だからなのだろう、目は綺麗な藍色をおびていて名前のとおり凜とした雰囲気がある。結構モテてるらしい。……俺には全く理解できないが。

ちなみに今年、俺と凜華は上級生徒になる。

……ん？ そっぴやまだ始業式やってないじゃん。

「なあ凜華、始業式っていつだったけ？」

「……寝ぼけてんの？ 始業式は今日よ」

「ああ、今日ね……」

俺は苦笑いを浮かべながら時計を見る——あれ？ おつかしいな。まだ寝ぼけてるのかな。いつもならもう登校の準備をしてる時間じゃ——

「まさか寝坊！？ 起こしにきてくれてもよかったじゃねえか」

「だから今起こしに来てあげてんじゃないっ」

あ、そうだった。と思う前に凜華のストレートがとんでくる。

なんで俺はそんなに叩かれなきゃいけないんだ。いや、まあ昨日ちよつと夜遅くまで起きてて目覚ましの時間をセットし間違えた俺も悪いといえば悪いが……

「凜華ってすぐ人のこと叩いてくるよな」

「んなつ！ う、うるさい！ 起きないあんたが悪いのよ、このバカ日向！！」

いきなり顔が赤くなった凜華に今度は強く押された。いつもなら一歩下がるくらいで済む強力な一撃なのだが、まだ寝起きで体が起きてなかった俺はよろめいて、

「うぐっ」

「あっ……」

その勢いのままタンスの角に頭をぶつけてしまい、凜華の心配そうな声を聞きながら俺はまた意識が遠退いていった

日向や凜華が通っている学園。

——「政府アグレッション対策本部直属ゴッド・リベンジャー養成機関」——

通称「リベンジャー養成学園」と呼ばれるこの学園は、日本の首都東京から直線上に位置する海の上に作られた人工島に建つ、リベンジャー育成機関だ。

そもそも人工島とは「近未来都市の試験運用」という名目で作られた超大型都市だ。

アグレッションのときの戦闘時に備え、地下シエルターなどもあるかわりに「近未来都市」ということで最近の流行の店やデパート、遊園地から繁華街なんでもある。さらには本島とは海中電車によって繋がっているの、非常に住みやすい。

なので生徒や学園関係者以外にもここに住む一般市民や観光客も大勢いるのだ。

そしてその島の中に学園はある。

ちなみに生徒の階級は14〜17歳が下級生徒、18からは上級生徒となっている。

上級生徒は4年までで卒業後は普通の一般市民として生活していたり、成績がよければ正式にアグレッション対策本部直属のリベン

ジャーとして活動することもできる。

そのほかにも入学時から所属科選びがあり、選んだ科目に所属することになる。

科目は、戦場で傷ついたりベンジャーの応急手当と、最新の医療技術を学ぶ医療科。

アグレッシンの謎の解明や性質を研究する分析科。

敵の襲来時、全体に指示を出す及び通信役をする通信科。

ブレイカーを修理、調整する工武科。

戦闘時、敵と戦うことになる迎撃科がある。

この学園は、本部の指示があればアグレッシンと戦うことになるので科目選びはとても重要だ。

ちなみに俺も凜華も同じ迎撃科に所属している。

そして、この学園はあのめんどくさがりの校長の仕業か、行事のときのみ遅刻者に科目ごとの罰がある。どうせ早く終わらせたいのに遅刻者がいると式が始められないからだろう。

ちなみに迎撃科の罰は……

「——ユウガ！ 日向——！」

「ん……」

目を開けてみれば目の前に少し目を潤ませてる凜華がいた。

「よかった……もし目を覚まさなかったら私は……って、そんなこと言ってる場合じゃないわ。日向、早くしたくして」

「へっ……そうだった。遅刻は避けなくては」

「私も今日だけは遅刻したくないわ。ほら、早く」

……そう。迎撃科の罰は一番キツイのだ。一度でいいからこの制度つくった校長をぶん殴ってやりたい。

「よし、凜華。走るぞ」

「わかってるわよ。……全く、これも全部あんたのせいなんだからねっ」

「なんでだよ？ 確かに寝坊したのは悪かったが、凜華が俺をおいて先に行けばよかったじゃないか」

実際、そうすれば俺はともかく、凜華はこんな急がなくてすんだはずだ。

「そ、そんなことできるわけじゃない」

「……なんで顔赤いの？」

「う、うるさい！ 早く行く！ これは命令よ！」

「お、おう」

……命令命令って。

いったいなんなんだ。まあ言いたくなさそうだったし遅刻しそうだしまだあの危険な川は渡りたくないのて問い詰めはしない。

「凜華。時間がないから学校まで全力で走るぞ」

「わかったわ」

そういうわけで俺たちはなぜか初日から学校まで全力で走るはめになった。

第二話 「あの……なんで雑巾がけをしてるんですか？」

俺と凜華が寮から（この学園は全寮制だ）学園へ全力で走りはじめてから数時間後……

俺達は雑巾を持って校舎の外に立っていた。

「……結局遅刻したじゃない」

そう、俺たちは全力で走り、普段は10分くらいのところを3分で着いたという陸上選手にも負けないほどの記録を出したわけだが結局始業式には遅刻し、今こうして立っている。

「わ、悪かったって。明日からちゃんと起きるから」

「信用ならない」

「……すまん」

凜華は、むうううと言いながらほっぺを膨らましている。

「ご機嫌斜めだな。機嫌が悪いときの凜華はほんとに怖い……」

「それにしてもあと少しで間に合ったのに」

「まあまあ。罰もかるかったし」

「……かるい？ これが？ 学園内全部を掃除するのよ！」

「そ、そんな怖い顔するな。まあ雑巾がけだけだし、スパルタ訓練とかよりはいいだろ？」

「それは……まあね」

おそらくもう数分遅刻してたら俺達は迎撃科の教員達によるスパルタ訓練があっただろう。

まあ、学園内全部を掃除するのも相当辛い。

俺がこれからしなくてはいけないことの辛さに絶望していると、凜華が半分あきらめたような表情でこちらを見た。

「もついいわ。時間ももつたないし。お互い学園の半分の掃除する、でいいよね？」

確かに分担したほうが効率いいかもな。ご機嫌斜めな凜華様からも逃げれるし。

俺は「それでいい」と言いながら雑巾を洗うバケツを取りに向かった。

「んじゃ、終わったらまたここだな」

「うん。だからやらないでよ」

俺って信用あるんだな。……逆の意味で。

「はいはい。それじゃ」

「また後でね」

さて、いったい何時間かかるんだろうな。考えただけで嫌になる。

「はあ……」

くそっ、始めてから結構時間がたったんだが……一向に終わる気配がないな。

これ今日中に終わるのかよ。

現時刻は17:00。学園の校則で、「いかなる生徒も19:30までには下校するように」だから……残り約二時間半といったところか。

(……まだ半分しか掃除できてないこの状況で残り二時間半はキツイな)

とにかくできる限り終わらせないと。これで明日も掃除になったら洒落しゃれにならんからな。

よし、もつとスピードを上げてやるか――

「うおっ」「ひゃあっ」

スピードを上げた瞬間、誰かにぶつかってしまった。

「うう……！」「ごめん！」

「つふあ？……ひゃあっ！」

俺は一応それなりにぶつかった人を庇おうとしたわけで、それで手を相手の後頭部にもつていこうとしただけなんだけど……まあ、その、なんだ。決してわざとではないんだが……結果、そのぶつかった女の子を押し倒した状態になってしまっている。

しかもまるでプレイボーイがするかのように相手の顔を自分のほうに引き寄せている(頭を地面に打たないよう庇っただけだ。他意

はない……はずだ）。

（り、凜華がいなくてよかった……それにしてもこの子、綺麗だな）
身長は俺より少し小さいくらいだろうか。所々緩くウェーブがかかった黒髪のロングストレート。

そして髪留めの桜の花びらと、暗闇に火の粉が舞い散っているような少し紅い瞳、無意識のうちに色気を感じさせるようなおっとりとした目元がおしとやかそうな、いかにも清純な子だという印象を与える。

そして男ならつい守ってやりたくなる気弱で可憐な容姿。

たぶん、着物なんか着るとすごく似合うんだろうなあ。そしてなんととっても……

上から順に、

ボンツ、

キュツ、

ボンツ。

うん。このスタイルは反則だな。

それにこの子の胸、凜華の二倍くらいあるんじゃない？
いや、まあ、凜華が貧乳だからということもあるが。

などと俺がものすごく人には言えないこと——いや、ただの変態か——考えていると女の子が顔を真っ赤していた。

見知らぬ男とこんなことになってしまったのだ。至極当然の反応である。

「あ、あの、ど、どいてくれませんか」

「あ、ごめん。今どくから」

「は、はい。……あれ、あなたは」

俺がどいていると、女の子はどこか遠い記憶の中からなにかを思い出しているような顔をしていた。

（あれ？ 俺とこの子は面識があったかな……？）

こちらもつられて考える。

が、記憶のどこを探しても分からない。

「あつ！ あなたは今朝助けてくれた人ですよ！ 先ほどはありがとうございました」

「お、おう」

いや待て待て。ノリで返答してしまったが今朝は誰も助けた覚えはないぞ。

「あのときあなた方が助けてくれなかったら私はあの不良たちになにをされたか……」

女の子はそのときのことを思い出したのか、ブルツと体を震わせる。

（不良？……もしかして）

確か今朝、凜華と一緒に学園への近道で裏路地を通ったら不良が立っていて邪魔だったから蹴り飛ばしてやったんだが……そのことだろうか。

「あ、あの、お名前は？」

「ああ、俺の名前は成宮日向。科目は迎撃科。それと今日から上級生徒になった」

それにしても微妙に上目ずかいでみてくるこの子すごく可愛い。そんな子を運よく助けたことになったとは……運命の神様、グッジョブ。

「成宮日向さん……素敵な名前ですね……っあ、私の名前は焰ほむら香奈です。科目は同じ迎撃科です」

焰ってことは何か火に関係する家系なのだろうか。

ふと疑問が浮かんだが、どうでもいいことだと思い直す。

「焰さんか。珍しい名字だな」

「は、はい。よく言われます」

フツと優しく微笑みながら答えるのがなんだか似合ってる。

「あつ、ちなみに私も今日から上級生徒になったんです。だから同級生ですよ」

「同級生だったのか。もしかしたら同じクラスになるかもな」

ちなみにクラスは科目関係なく分けられるので違う科と一緒にいることも多々ある。

なぜ科目別ではないかというと、多いクラスと少ないクラスに分かれてしまうからだ。

……って校長は言ってたがどうせ分けるのがめんどろだったから
だろ。

「はい。そのときはよろしく願いしますね」

「こちらこそよろしく」

お互いに簡単な自己紹介を済ませた後、焰さんは首をかしげながら俺を、いや、正確には雑巾と俺を実に不可思議なものを見る目で見てきた。

「あの……なんで雑巾がけをしてるんですか？」

「ん？ ああ、これね。あの後始業式に遅刻しちゃって……んで、罰つてわけ」

「あ、あの、もしかしてそれって私を助けたから……？」

「いや、そんなことはないぞ」

「で、でも、私を助けなかったら間に合ったかもしれないですし…

…私も手伝います！」

「え、いいの？」

正直手伝ってくれるとは思ってもなかったなので俺は驚きながら問い返した。

すると焰さんはニツコリと微笑み、

「はい、もちろんです」

な、なんと、ホントいい子だな……

「それじゃ、お願いしようかな」

「は、はいっ。がんばりましょうね」

「おう」

焰さんも手伝ってくれるなら案外時間内に終わるかもな。

先ほどのまでの絶望感が嘘のように消え、やる気がでてきた。

第三話 「……なんでお前が俺の部屋にいるんだ」

「やっと終わった……」

掃除をやりきった後の独特の疲労と達成感が体の芯まで浸る。

結局焰さんに手伝ってもらったおかげでなんとか時間内に掃除は終わった。

本来、これを一人でやらなくてはいけなかったことを思うと……ホントに焰さんがいてくれてよかったな。

「結構疲れましたけど間に合ってよかったです」

「ホントだよ。これも焰さんのおかげだ。ありがとうな」

「い、いえ……」

俺がお礼を述べると焰さんは恥ずかしそうに目を横に逸らした。

「もう時間もないし早く凜華と会わなきゃな。焰さんも一緒に帰る？」

「は、はい、そうします。もう周りも暗いですし」

現時刻は7時くらい。やはりこの時間帯になると周りも結構暗い。こんなに暗いんじゃないじゃ誰だって怖いだろう。

「本当、遅くまでごめんね」

「大丈夫ですよ」

「ありがとう。それじゃ、行こうか」

確か待ち合わせ場所は学園の中央にある噴水広場だったはずだ。凜華はもう着いているのだろうか。

噴水広場には真ん中に周りを少し大きめな石で囲んだ噴水がある。この広場の正式名称は噴水広場ではないのだが、噴水以外にベンチすらないからこの学園の生徒は皆、噴水広場と呼ぶ。

だから待ち合わせ場所にはピッタリなのだ。こんなに暗い時間でも見渡せばすぐに凜華をみつけられるからだ。あたりを見渡すと案の定すぐに見つかった。あつちはまだ気づいてないようだ。

「おい、凜華」

「遅い！」

俺を見つけるなり凜華は人差し指をビシッ！と俺に指差し、犯人はお前だ！ 見たいな感じに突きつけてきた。

なんでそんなことをしているんだろうな。俺にも分けがわからないよ。

「……何だよ。まだ下校時刻過ぎてねえだろ」

俺は半分呆れ返った感じで答えた。正直、凜華の理不尽さにまともにつき合っていると身がもたない。

「言い訳無用！ 私より後にきたら遅いの」

さすが天下の凜華様だ。むちゃくちゃだ。

まあこいつと十何年間一緒にいるから悲しいことにもうなれたけ

ど。

「……ところでその人は誰？」

「ああ、この人は焰香奈さん」

「初めまして」

焰さんが挨拶をすると凜華は少し不機嫌そうに、ふうんとつぶやいた。

「……んで、日向は焰さんに掃除を手伝ってもらったわけ？」

凜華は少し小さめな声で言いながら俺をにらんでくる。

「な、なぜそんな睨む！」

「に、睨んでなんかないわよ！ いいから答えなさい。これは命令よ」

「ま、まあ手伝ってもらったけど」

一体何がそんなに気に入らないんだ？ いつも以上に不機嫌才ー
ラがでてるぞ。

「……へえ、私が一人で頑張って掃除してたって言うのに……あんな
たたちは楽しくイチヤイチヤしてたのね」

どうしてそうなった！？

あの憶測IQ170だと言われるアインシュタインでさえ、わかんないだろうよ。

「俺らだって掃除してたっての」

「信じられない」

いや信じろよ！

と、俺は声に出しそうになったが、凜華が憤怒になる寸前の表情だった。喉の手前で押し殺した。……声にだしてたら逝ってたな、

俺。

「……もういいわ、帰る」

しばしの沈黙の後、凜華は急に少し悲しそうな表情をしながら身をくるっとひるがえして、ててと行ってしまった。

「お、おい、一緒に帰るんだから待てって」

なんか今日の凜華は変だな。いきなり不機嫌になるわ、いきなり帰るって言いだすわ、悲しそうな顔をするわ……

なんでかよく分からないが、凜華のあんな表情は見たくない。

「あ、あの、私用事があるんで二人で先に帰っててください」

「え？ でも一人で帰るのは……」

俺が心配そうな顔をしていると焰さんは、俺にだけ聞こえる小さな声で「凜華さんと二人っきりで帰ってあげてください」といつてきた。

しかし凜華を追いかけると今度は焰さんが一人になってしまう。

この時間帯に女子を一人でおいていくのは危ないのでためらう。

けれど焰さんが、早く追いかけてください！と俺の背中を押すので、結局俺はバイバイと手を振る焰さんを置いて凜華を追いかけることになった。

やはり男子と女子の体力の差なのか、俺はすぐに凜華に追いついた。

「なあ、待てっ。なんで怒ってんだよ」

走ってきたので少し息を切らしながら話す。

「……焰さんはどうしたのよ」

凜華はまだ不機嫌なのか、俺のほうを向かずに答えた。

「焰さんなら用事があるとかでまだ学園にいると思う」

「一緒に帰らないの？」

「だって凜華を一人で帰らせるわけにはいかないし」

焰さんを一人で帰らせるのは心配だが凜華のほうもやはり心配だしな。

俺の返事を聞くと、凜華はちょっと顔を赤くして「そ、そう……」
と言ってさらにそっぽを向いてしまった。

「ま、まあ今日は一緒に帰ってくれたから許してあげる」

「そ、そっか」

どうやらだいぶ機嫌が治ったらしい。

俺がホッとしていると今度は凜華がこちらを、チラッと少し見えてきた。

「ねえ日向」

「ん？」

「日向は焰さんのこと好きなの？」

「ごほっ！俺は凜華の予想外すぎる質問に思いつきりむせる。

「な、なんでそんなこと聞くんだよ！」

「き、聞いているこっちも恥ずかしいんだから早く答えなさいよっ！」

じゃあ聞くなよ！ と、心の中で突っ込むがせつかく機嫌が直ったのだ。また不機嫌にはしたくない。

「好きなわけないだろ。今日知り合ったばかりだし」

「……ホント？」

うっ……そんな上目づかいでこっちを見るなよ。……幼馴染だからよく忘れるけど、こういうときは結構可愛い顔しているということをおぼろけされる。ちなみに決して上目づかいに弱いわけではない。

それに、気のせいかな凜華の目は少し潤んでいた。暗いからやはり俺の見間違いだと思いが……

「ほんとだよ。嘘ついたってしょうがないだろ」

「そう……」

凜華はなぜかは知らんが俺の答えにほっとしたらしい。

……なんだかこのままだと、こっちが酷くやられっぱなしだな。

「なあ、そういう凜華は好きな男いないの？」

「い、いないわよ！ 絶対絶対絶対いないもんっ」

そ、そこまで大否定するのか……？ それと腕を振り回すな。俺にポカポカ当たってる。

それにしても今までで一番顔が真っ赤になってるぞ。新記録だな凜華。

顔を真っ赤にして否定する凜華は見てて楽しい。一緒にいると疲れるけど、表情がころころ変わってこっちも自然と笑顔になってくる。それに元気を分けてもらっているような気がする。だからいくら理不尽でも付き合ってられるんだろうな。

真っ赤な凜華をじつと見ながらそんなことを考えていると、凜華は俺がまだ疑っていると思ったのか、ひととき大きな声で否定する。「絶対いないんだからねっ！ 勘違いしないでよっ」

「わ、わかったって」

これ以上聞くと冗談抜きで殺されそうなんで追求はしないでおう……まだ死にたくないしな。

そんな感じでわいわい言いあいながら帰っていると、いつのまにか寮の部屋の前に着いていた。

「そっぴや部屋が隣になつててよかったよな」

「うん。用事があつてもすぐ会えるしね」

ちなみにこの学園の寮はA棟とB棟で上級生徒と下級生徒に分かれているが男女は分かれていない。

戦うときは男女関係なくチームを組む。そのときにチームプレイをしやすいように普段からお互いの性格を知っておけるようにだそうだ。……ちなみにこれも校長が言つてたことだ。

部屋は一人一部屋でたしか2LDKだ。こんなに広いのはやはり国家直属だからなのだろうか……そうだとしたら税金の無駄遣いなのでは？ と最近疑問に思う。

まあ一人一部屋のおかげで今朝みたいに凜華が俺を起こしにきても誰かにバれることはないのだから文句はない。

「それじゃまた明日な」

「うん」

俺は凜華とわかれて部屋に入った。さて、コンビニに夕食を買い

に行こうか、それともシャワーでも浴びようか――

「……なんでお前が俺の部屋にいるんだ」

「フツ。気にすることはないぜ親友よ」

なんと俺の部屋には先客がいた。……鍵閉めておいたはずなんだけどな。

でもって、その先客は、俺のクラスメイトにして見た目は不良。
かみおかとある
上岡トオルだった。

こいつはそう、俺の入学当初からの決して親友ではなく、悪友だ。

第四話 「なあ、日向。今日はこれを持ってきたんだぜ」

さて、なぜ俺の部屋に招いてもないクラスメートがいるのか……俺は今にでもそのイケメン顔をぶん殴ってやりたい衝動をとりあえず抑える。

「んで、なんでお前がここにいるんだ？」

「罰掃除お疲れさん」

……なあ、こいつ殺していいですか。

「俺の質問を無視してもらっては困りますよ、トオルさん」

俺はかの有名なスナイパー、ゴリゴ13も気後れするくらいの殺気をだしながら、再度問いた。

「なあに、鍵を開けるくらい俺にとっちゃア리를踏み潰すようなもんよ」

なんか質問の答えになってないぞ。

つかア리를踏み潰すようなもんって俺の部屋のセキュリティー
どんだけ低いんだよ！

「まあまあ、落ち込むなって」

何に落ち込むんだよ！ むしろ、どうやったらお前を誰にもバレずに殺せるか思考中だよ！

それと、リビングにあるソファに勝手に座ってんじゃねえ。

——いかにいかに。突っ込む要素が多すぎて俺のほうがおかしくなってきた。

ちなみにこいつは工武科で俺のクラスメートだ（いや、明日クラス替えがあるから「元」かな）。

髪は染めるのに失敗したのかとところどころ黒髪が混じっている微妙な金髪で、体がちりしていることもあり、見知らぬ人が見たらまず不良だと思われるだろう。背は俺よりも少し高く、まあそこそこのいい顔をしている。

成績は中の上で工武科としての技術もある。だから普通ならそこそこモテるんだろうが……こいつは全然モテない。

さっきみたいに人の気持ちを全く読めないってところもあるが、俺が思うにモテない理由は別にあると思う。

「なあ、日向。今日はこれを持ってきたんだぜ」
少し偉そうに宣言しつつトオルがソファから降り、側にあつたかばんの中から出したのは……エロ本だった。

そう、俺が思うにこいつがモテない理由は「変態」だからだと推測する。

それにしても、エロ本をどうとうと見せつけてくるこのアホ……まるで、小学一年生が徒競走で一位をとってきたときのような顔をしてやがる。どんだけ嬉しいんだよ。

「またそれか」

こいつはよく買ったエロ本を俺の部屋に持ってくる。

なぜ俺の部屋かというと……まあ、俺も健全な高校生なのである。

正直言って見たい。

決して邪な考えがあるわけではないんだ。

しかし自分で買うほどの度胸はないのでこうして見せてもらってるわけ。健全な男子学生諸君なら分かってくれると思う。

「そんなこと言っちゃってよぉー見たいだろぉー？」

「…まあな」

くそっ！ こいつすげえむかつく！！ けど持ってきてくれたから許す。

「んで、どんなやつなのよ」

「ふっふっふ。なんとだな……ポニテの子特集なのよ」

な、なん……だと！？

——っは！ いかんいかん、またおかしくなってしまった。

それにしてもポニテの子とは……

いままでトオルがもってきたのはどれもエロ本ではありきたりの巨乳の女の人ばかりで正直つまらなかった（決して貧乳萌えなのではない。決して）。

が、ポニテの子となれば話は別だ。今すぐにでも見たいほどだ。と言っか見せる。

「トオルよ、ついに見つけたのだな」

「ああ、俺はやったぜ、親友！」

「さすがだ親友よ！」

ガシッ！

俺達は熱い友情の握手をした。

そう、それはこいつが初めて俺の部屋にエロ本をもってきてからの、ポニテの子のエロ本を見つけるといふ二人の夢が叶った証。

それはポニテは正義だという証。

それは友情は見返りを求めないという証。

それはこれから鑑賞会を始めようという証。

それは喧嘩せず交互に見ようという――

ああ、俺はこいつに敬意を払おう。この究極に目の保養になる本を手に入れてきてくれたこいつに。

「さあ、鑑賞会といこうぜ、親友」

「もちろんだとも、親友」

こうして俺らは変態だと思われても文句が言えないくらい、にや

けた顔をしながら俺の部屋で徹夜の鑑賞会を始めた。

第五話 「それじゃ朝のHRは終わりだ」

翌朝。

窓の外から朝を告げる小鳥達の声がよく聞こえる。俺はこの鳴き声を聞きながら朝を迎えるのが結構好きだ。

しばらく聞いてから体を起こすと気持ちよく起きれる。

しかし昨日は聞いてたら寝てしまっただけで遅刻してしまったので、さすがに今日はすぐに起きる。

（ん……体中が痛いなあ）

背伸びをしながら起きると体中が、特に腰あたりが痛む。

昨日の罰掃除とその後の鑑賞会での夜更かしで、どうやら昨日の疲れが残っているらしい。

そんな疲れが残っている体をほぐしながら俺は朝食の準備を始めた。

朝食はいつも簡単なものを作る。今日はスクランブルエッグとトーストだ。俺は朝は小食なのでこれくらいでたりる。

俺が朝食を作り終えゆつくりとテレビを見ながら食べてると、ピンポン とチャイムが鳴った。

（凜華かな……）

いつもこのくらいの時間に凜華は俺の部屋にくる。俺は食べかけのトーストを口にくわえたまま玄関に向かった。

ドアを開けると予想通り凜華がいた。

「おはよう日向」

「おはよう」

いつもどつりの挨拶をする。なんか日常って感じだよなあ　と俺が浸りながら凜華を見ると、上級生徒の制服をいじりながら少し恥ずかしそうにしている。

「ね、ねえ、制服似合ってる？」

どうやら上級生徒の新しい制服が似合っているか気になってしょうがないらしい。そういえば昨日もその制服だったけど遅刻しそうで（結局したけど）それどころじゃなかったもんな。

上級生徒の制服は下級生徒の制服の子供っぽいのと違い、清楚な感じがあり、いかにも大人っぽい感じた。

凜華の凜とした雰囲気もあってか結構似合っている。スカート丈も短くひらひらしていて、胸以外は女子の理想の体系をした凜華が着るとそのほどよく引き締まった、でも異性を感じさせる太ももが少し覗いていて、すごくいい。

「は、早く言いなさい！」

沈黙に耐えられなかったらしい凜華が恥ずかしそうに言う。

さて、これで胸さえあればなあと常日頃思っわけだが決して口にだしてはいけない。だしたのならその日が俺の命日になるだろうから。

「結構似合ってるぞ」

とりあえず俺がありきたりの感想を述べると凜華は「あ、ありがとう」と恥ずかしそうに、でも嬉しそうに呟いた。

そのまま俺が仕度が終わるまでほっておくと、ずっとニコニコしながら待つてそんな感じがしてしまうほどの上機嫌だ。

仕度が終わるまで待たせるのも悪いので玄関に戻りながら聞いた。「朝食余ってるから食べてくか？」

「うん。そうする」

凜華は二つ返事でうなずいて鼻歌をしながら「おじゃまします」と礼儀よく挨拶をした。

俺と凜華が朝食を一緒に食べるのは入学してから結構あることだった。俺が朝食をいつも多めに作ってしまう、ということもあるが凜華が料理が苦手というのが一番の理由だと思う。

「やっぱり日向のスクランブルエッグはうまいわね」

凜華がスクランブルエッグを頬張りながら俺に言った。ちなみにスクランブルエッグは凜華の大好物だ。

幸せそうにもふもふ食べている凜華が小動物ばくて少し可愛い。

「ありがとよ。凜華もスクランブルエッグくらいは作ってみたらど

うだ？」

「むむう……私が料理苦手なの知ってるくせに……日向の意地悪」

眉を眉間によせながらぶつぶつ言い訳をしている。卵をフライパンで炒めるだけなんだけどな……。

「まあまあ、それより今日は新しいクラスの発表もあるし早く食べてとっとうていこうぜ」

「うん」

凜華はそれほど気にしてなかったのか、怒ることもなく素直にうなずいた。普段もこうだったらいいんだが……。

それから俺達は少し早めに朝食を食べ登校した。

寮から学園までの距離は近く、徒歩10分くらいだ。

なので、凜華と話しながらいくとすぐに着いた。

学園に着いた俺らは校門近くにいた教員から新しいクラス表をもらう。

「今年こそは日向と同じクラスでありますように——」

「ん？　なんか言ったか？」
「べ、別に何も言っていないわよ」

なにか呟いていたような気がしたが俺の気のせいだったのか。

「お、今年は俺も凜華も一緒じゃん」

「え！　ホント？」

「ああ。後トオルや焰さんも一緒だな」

「へ、へえ……」

下級生徒のときは一回しか同じクラスになってないからか、一緒にクラスと聞いたときは、ぱあっと嬉しそうな笑顔を見せたが焰さんの名前を聞いたら少し不機嫌そうな表情になった。

「おい、凜華。どうした？」

いきなり黙り込んだ凜華に心配そうに聞くと、

「う、うるさい！　大丈夫だもんっ」

と言つて俺にポカポカたたいてきた。

このポカポカたく、が見た目以上に痛いんで俺は手で防ぎながら謝る。

しかし凜華は、バカ日向！　鈍感！　アホおお！！　と俺の悪口をさんざん叫んだ後、一人ですたすたと先に行ってしまった。

——やれやれ、理不尽にもほどがあるだ。

しかし、まあ凜華もしばらくすれば機嫌直るだろう。

教室に入ると結構生徒がいた。みんな新しいクラスの発表の日だから早く来たのだろう。

仲のいい友と喋っているもの。

一人で本を静かに読んでいるもの。

疲れたのか、机に突っ伏して寝ているもの（ちなみに後で確認したらトオルだった。昨日の徹夜がひびいたのだろう）

やはり上級生徒となると皆だいぶりラックスしているようだ。

俺は熟睡してるトオルの頭を忘れてた昨日の不法侵入の罰として、思いっきり叩き起こしてから自分の机に向かった。

「席に着け」

座って一休みしてたらチャイムが鳴り、だるそうな声とともに教員が入ってきた。恐らく担任だろう。

教員は壇上の上にクラス名簿を置いた後出欠を確認した。

「焰香奈。……ん？ 焰は休みか」

（焰さんが休み……？ 昨日別れたときは元気そうだったんだけどな）

「まあいい。後で私が確認しておく。それと上級生徒は下級生徒と違って午後からすべて各課の棟で専門授業だからな。忘れんなよ」

下級生徒のときは午後まで普通の学校と同じ授業をやって放課後から専門授業だったが、上級生徒になると午後から専門授業なんだな。いよいよ本格的なことをするってことか。

「そうそう、それと迎撃科は専ブレを持っているものは持つてくるように」

専用機ブレイカー、か。

よく略称として「専ブレ」「専用機」などと呼ばれている、適性率が高いものに与えられるその人専用のブレイカーのことだ。

そもそもブレイカーとは、簡単に言うと人の感情をエネルギーとした武器だ。

アグレッシンの容姿は派虫類のようで特徴などは一体一体違うが、どいつにも「コア」と呼ばれる唯一の弱点がある。そこを破壊することでアグレッシンは活動を停止し、死ぬ。

しかし鱗が硬く、ミサイルなどの普通の兵器ではコアに到達する前に鱗でふさがれるか、かわされるためあまり効果がないらしい。

そこで対策本部は確実にコアに攻撃できるために動きの自由が利く人が持てる武器で、なおかつアグレッシンの硬い鱗に防がれても耐えることができる強度を持つ武器を作成しようと試みる。

そこで思いついたのが人が持つ怒りや憎しみなどの「感情」をエネルギーとして武器にする、だった。そして本部は開発に成功し、その武器をブレイカーと名づけた。

専用機ブレイカーは所有者しか使えない分、所有者との適性率が上がり感情が伝わりやすくなり、武器の性能も上がる。

さらに、人によっては適性率が高いとごく稀にだが超能力のようなものが使えたりする。

逆に適性率が低いとブレイカーが起動すらしない。

なので専用機ブレイカーは適性率が一定以上のものでないと与えられない。ちなみに、俺も凜華も適性率が専用機の基準適性率よりも高いので専ブレ持ちだ。

ブレイカーがどうやって作られているかは国家級のトップシークレットのため本部の開発チームしか知らない。工武科のやつらも調整や改良などではできるが作ることはできない。

だからブレイカーは俺達にとって最高の武器であるとともに、どうやって作られたかもわからないのだ。

まあ、ここ十年くらいアグレッションは襲来してなく、俺も見たことはないから詳しくは分からないけどな。

「それじゃ朝のHRは終わりだ」

その後も簡単に下級生徒との違いを教えた教員は、「もう用は済んだ」といわんばかりにそそくさと教室を出て行った。

それから俺は次の授業の準備をしはじめた。

ちなみにこれは昼休みになる前に気づいたことなんだが、俺達は
このとき一番重要な説明を聞いていなかった。

そう、担任であるはずの教師の自己紹介だ。

第六話 「ん、特に変わんないんじゃない？」

午前の授業が一通り終わり昼休みになり、俺は凜華とトオルと屋上に昼食を食べにきていた。

ちなみに午後の授業は科目ごとの専門授業で服を各科ごとの制服に変えなくてはいけないため昼休みの時間は結構長い。

屋上には人があまりいなかった。恐らくほとんどの人は動くのが面倒で教室で食べているのだろう。

俺達は風当たりがいいところに座り、食べ始める。

しばらく雑談しながら食べた後、俺は朝に気になっていたことを思い出した。

「なあ凜華。焰さん大丈夫かな？ 昨日はあんなに元気そうだったのに」

「知らないわよ、そんなの」

さっきから普段より強く吹いている春風で乱れる髪を右手で鬱陶しそうに押さえながら嫌そうな声をだす。

……おいおい、まだ不機嫌なのかよ。さっきまでは大丈夫そうだったんだけどな。

さて、どうしたものか、とため息をついていると先ほどからずっと肉を食べているトオルが俺と凜華を交互に見ながら俺をひじで小突いてくる。

「ありや、凜華さん不機嫌じゃ〜ん。日向〜、さてはお前なんかしたな〜？」

ホントめんどくさいやつだ。その語尾をのばすのも気持ち悪いからやめてくれると嬉しいんだが。

「とりあえずお前は黙れ。喋るな。その憎たらしい口はなんかに呪われて永遠に開かなくなれ。それと肉ばっかくうな。野菜食え。栄養バランス考えろ」

思いつく限りの嫌味を言い、野菜ジュースをトオルの顔に投げると、さすがのトオルも黙って野菜ジュースを飲み始める。

すると何か不思議そうな顔をした凜華がこちらを横目で見てきた。「そういえば日向、迎撃科って上級生徒になると何やるの？」

「ん、たぶんチームごとになわかれて実践訓練じゃないか。確か、入科時の説明会みたいなやつで上級生徒はブレイカーを使つての実戦訓練があるとかいってた気がする」

「そういえば入科したときはいろいろな検査やつたね」

凜華は少し懐かしそうな目で外を見る。

乱れる髪を片手で抑えながら遠くを見る凜華はすごく大人びた感じがして……恥ずかしさを紛らわすかのように俺は記憶を探るのに集中する。

「確かにな。ブレイカーの適性テストや運動能力調査は分かるとして、血液採取なんかもやつたな」

「結局なんのために血液なんか採取したんだろう……血なんかとつても使い道ないと思うんだけどなあ」

「さあな……まあ気にすることはないんじゃないか」

他にもいろいろな検査をしたためそのときのことはあまり覚えて

いない。

「それもそうね。とにかく下級のときよりは楽しめそうね」

「そうだな」

下級生徒のときは筋トレや武器の使い方、練習、体力をつけるためにランニングなど実に面白くもなんともない、それこそ普通の学校で言う部活動みたいな授業だった。

そのときは「こんなんでもアグレッション倒せるようになるのかよ」とよく愚痴っていた気もする。

もっとも、アグレッションが襲来してくる周期は6、7年に1回ほどで、迎撃科のほとんどの生徒達は自分達がアグレッションと戦う“ゴッド・リベンジャー”なんだということを忘れている。

それに、近年危険な武器を持った凶悪な犯罪者やブレイカーを悪用する元生徒などが増えており、警察では対処しきれないため迎撃科が武力を持って解決する仕事もある。

さらに実際ここ十年はアグレッションは襲来してきてないため、最近はそのほうがメインになっている。

ちなみにこの学園は普通の学校とは違い得点制で、勉学のほかに所属科でいい成績を残せばポイントがもらえる。

もらえるポイントはその功績に応じてだ。なので犯罪者を捕まえたとなればかなり大きなポイントになる。

しかし反面相手は銃などの凶器を普通に使ってくるのでたまに油

断して命を落としてしまう生徒もいるため、ノーリスクではない。

一度本部のほうで「命の危険があるからやめたほうがいいのでは」という意見も出ていたが……今まで世間にアグレッシンのことは隠してきたため、アグレッシンのことをよく知らない一般の人々には、この学園は凶悪犯罪者に立ち向かうための特殊部隊育成機関と認識させている。

だからやめるわけにはいかないのだ。

ちなみにアグレッシンを一般にほとんど公開しないのは、アグレッシンはそんなに恐ろしい存在ではないのだと人々を思い込ませて、襲来時にもパニックにならないで避難できるようにするためだ。

アグレッシンのことは学園内最高の機密事項なので、卒業後にもアグレッシンのことを世間にばらそうとすると、すぐに学園からの迎撃科の教員で組まれた特殊部隊で牢獄にいれられてしまうほどだ。

他の科がどうなっているかは知らないが、迎撃科が一番危険な科である理由はこれである。そのかわりに待遇は全科の中で一番になっている。

「そっぴや、工武科って上級になって何か変わるのか？」

「ん、特に変わんないんじゃないかね？」

トオルは飲み干した野菜ジュースのストローを歯でかじりながら、

いかにも興味なさそうな感じで答える。

「ってか子供じゃないんだからストロー噛むなよ。いやそれより疑問形に疑問形でこたえるなよ。」

とはいえ半分予想していた答えなので聞き返しはしない。どうせ聞き返しても同じ答えが返ってくるだろう。もう突っ込む気力もないわ。

また肉を食べ始めたトオルを注意していると凜華が時計を見てから、こちらを見る。

「日向、そろそろ部屋戻らないと間に合わないわよ」

おっとそうだな。

俺はまだ少し残っていた白ご飯を口に押し込みながら立ち上がり、凜華と一緒に寮の部屋に着替えに向かった。

第七話 「よし、殺り合え」

部屋に戻った俺は迎撃科の制服に着替えた。

迎撃科の制服は活動上命の危険が伴うので、防弾性になっている。

胸には迎撃科であることを示すバッジがある。バッジは学年を表すのと、非常時にこれを見せることによって立ち入り危険区域などにも入れるなどの役割もある。

腰にはブレイカーや拳銃を収納するホルダーがついている。

ちなみに銃は非ブレイカー所持者などの犯罪者を捕まえるときによく使う。

ほかにもまだブレイカーを扱え切れない下級や上級の一年がブレイカーの変わりに使ったりする。聞いた話だと、相当な上級者はアグレッシン戦でもブレイカーと銃を使い分けるらしい。

銃は自動拳銃だ。オート・マチックただ、拳銃を工武科の連中に頼んで改造し自分専用の拳銃にしてもよいことになっているので支給された拳銃をそのまま使っている者は少ない。

「まあ、拳銃これを使うことがないことを祈りたいけどな」

俺の拳銃はトオルに改造してもらい、反動を少なくしてもらった

のだが……なにかに失敗したのか、引き金を引く度に1発ずつ弾丸が発射される半自動式時に一回引いただけで3発ほど同時に出てしまうのだ。セミ・オートマチック

ようするに、3発目、2発目が前の弾に当たってしまい失速してすぐに落ちてしまうのだ。運が悪ければ跳ね返ってきて自爆だ。

それでは洒落にならんのでトオルに直すように言ったのだが、「もう疲れたからまた今度な」と一発で断られた……今度あいつに向かって1発撃ってやろうか。

と、冗談にしてはリアル感があるなと思いながら、俺は拳銃をしまいブレイカーを手に取る。

ブレイカーは扱いやすいようにか、箱のような形をしている。これが起動するといういろんな武器の形になるんだからすごい。いったいどうやって作られてるんだろうな。

「それにしても専用機ブレイカーを持っているくせに使ったことは一度もないって変な話だよな」

入科時に高い適性率をだしてから持つてはいたが、使ったことは一度もない。ブレイカーの専門授業のときも適性率が低くても起動できる練習用のブレイカーしか使わせてもらえなかった。

今日やっとこれを使えるのか——そう思つと、なんだがうずうずしてくる。

一刻も早く行きたくなった俺はブレイカーをしまい部屋の外にでる。

各個部屋につながってる渡り廊下に出ると、なんだか先ほどよりも暑く感じた。

さっきまでは風が南に強く吹いていて涼しかったのだが……

いきなり風が吹かなくなったのに少々違和感を感じていると、隣の部屋から同じく迎撃科の制服に着替えた凜華が出てきた。

「あら、日向にしては早いじゃない」

心底意外だったらしく、少しつり目気味な目をまんまるに見開いている。

「失礼なやつだな。そんなに俺はダメ人間か」

「えっ、違うの？」

……嘘をついてるようには見えない顔で言っただけだと結構傷つくんだが。

「それよりどうする？」

昼休み終了まで約20分ある。今から行くと少々早く着いてしまふのだ。

「そうね、ゆっくり話しながらでも行くのは？」

「そうだな、ここにいてもやることないし」

すると、凜華はいきなり目を輝かせて、

「ねえねえ！ それじゃ久しぶりにグリコで行くのはどう？」

……幼稚園児か、お前は。

「そんなことやってたら今からでも間に合わねえよ」

ちえつ　と少しふてくされた凜華を横目で見ながらスタスタと学園へ向かう。

「ちょ、ちよつと待ってよ！ 冗談だつてば。それにそんなに早く歩いちゃすぐ着いちゃうじゃない」

後ろから袖を引つ張られたためしかたなしにペースを落とし、俺達はこの後どんなことをやるかなど話しながら学園に向かった。

「全員銃を出せ」

授業開始のチャイムが鳴るなり迎撃科の教員の一人、狼火ろうかが名前のとおり獲物を射殺す狼のようにこちらを見る。

狼火は全科目の教員の中で一番狂くるってる女教員だ。

歳は20代後半と教員の中では若く、何色にも染まらない漆黒のショートヘアに威圧感のある鋭い目。しかし、どちらかというとかっこいい美女を連想させる綺麗な顔立ちとモデルも顔負けの抜

群のスタイルのよさで入学したての男子生徒に人気だ。

もっとも、この狂った性格を知れば老若男女問わず誰もが恐れるが。

口調は荒いが実績はすごい。

13年前の過去最強のアグレッシンが率いる大群が襲来し、過去最悪の被害を被った決死の迎撃戦。

そこで15にも満たない少女であった狼火は、普通は8人がかりでやっと倒せるかどうかのアグレッシンを一人で3体倒したという化け物じみた、それこそ神のみぞなせる業をやったのけたのだ。

ちなみにそのときの狼火の戦いを見ていたリベンジャーは口々に「あいつの戦闘能力は人間じゃありえない」と言っていたらしい。

そして、そのときから狼火はリベンジャーの世界ランクでも一桁に入るようになり、そのありえない戦闘能力と狂った性格からついた二つ名が『狂神』だ。

そんな『狂神』を怒らせては一瞬にして殺されかねないので生徒達は皆、ビクビクしながら銃を手に取る。

そして狼火のことを下級のときからよく知っているのでこの後何を言うか大体分かる。

恐らく……

「よし、殺^やり合え」

いきなりの殺し合い宣言に生徒達の間で動揺がはしる。

……ホント、狼火だと冗談じゃないから困る。しかも何人か殺し

たことのあるような目つき。いや、教員になってんだからそれはないと思うが。……たぶん。

狼火の隣にいる副教員の人もビクビクしながら「狼火先生、ちゃんと説明してください」と注意している。

「つか同じ職務の人からもあんな感じなのかよ。どんだけ恐れられているんだ。」

狼火はいかにも不機嫌そうに頭をかきながら補足する。

「あー、ようするにだ。今からチームわけをして戦うってことだ。もちろん銃を使え安全装置セーフティも外せ」

皆、安全装置を外す。

それを見て満足したのか、よしと一つ頷いて説明を続ける。

「もちろん勝ったチームには少ないがポイントをやる。ブレイカーはお前らじゃまだ使えんだろうから無しだ。そんじゃ今からチームわけを——」

これからチームわけが始まろうとしたとき、狼火の携帯が鳴った。

「どうやら電話らしく、俺らに「少し体を動かしてろ」と指示を出してからこちらに背を向け電話に出る。」

俺は少し気になったので凜華とともに狼火に後で睨まれない程度に近づく。

「なんだ……緊急………んだと！………奴らが焰………いい、こちらがやる」

あまりよく聞こえない。

電話を終えた狼火はこちらに振り向き、俺らに気づくなり急ぎ気味に歩み寄ってきた。

こ、こええ………！！　ただ歩み寄られただけでこの威圧感かよ！

俺と凜華はすくつと姿勢を正しこちらにくる狼火の目を見つめた。……いや、正しくは動いたら殺されると思ってしまっほどの怒りがこもった視線から目を逸らせなかった。

狼火は、俺達の真ん前にくると周りを見渡し、他の生徒達がこちらを気にしていないのを確認すると俺達にだけ聞こえるよう耳元で小さな声を、しかし事の重大さが伝わるよう威圧のある声でささやいた。

「焰香奈がジャス^{正義の裁き}ステイスの連中に連れ去られた」

第八話 「大丈夫だ。俺達なら、やれる」

「焰香奈がジャステイスに連れ去られた」

「そんなんっ!？」

正義の裁き
ジャステイス。

ジャステイスは養成学園の迎撃科やリベンジャーを「人ではない化け物だ」と言い、「我々が神に代わって化け物を抹殺しなければならぬ」という俺達にしてみりや意味不明の理念を掲げている組織だ。

卒業生たちのなかで、近年ブレイカーを悪用するリベンジャーが増えてきたせいなのかもしれないが、それだけで「化け物」と呼んで殺そうとする奴らが正義を名乗ってるなんて……ふざけた連中だと思う。

しかも最近では超能力の研究をしているとかの噂もあり、もはや正義の欠片もない。

もつとも、奴らがどんな超能力を持ってもブレイカーには断然劣っている。

なので基本的にリベンジャーが殺されることもないし、リベンジャーは「いかなる状況下でも人を殺してはならない」ため相手が死ぬこともない。

だが、だ。ブレイカーがまだ扱えない下級生徒や上級生徒の1年

は拳銃しか武器がない。

拳銃と超能力。

どちらが強いかなど考える必要もない。こちらが負けるに決まっている。

そしてこちらが相手を殺せないのに対し、向こうはまるで自分の死も恐れていないかのように問答無用で殺しにくる。

そう、ブレイカーを扱えない生徒が連中に捕まった場合その場で殺されるか組織の基地にでも連れて行くのか……どちらにせよ、学園からの救援作戦が間に合わなければ死ぬのだ。

そして焰さんはまだブレイカーを使えない――

……ごくり。

俺は一瞬頭によぎった最悪の結末のイメージを打ち消すように手を強く握り締め、唾を飲む。

恐らく焰さんが連れ去られたのは昨日の夜、俺が凜華を追いかけて帰ってつた後の下校途中。俺らを見送った後帰ろうとしたら襲われたのだろうか。

（あるとき焰さんと無理やりにも一緒に帰っていれば――）

どうしようもない怒りが、苛立ちがこみ上げてくる。だが今は過ぎたことを言っている場合じゃない。

俺は怒りを静めるためにゆっくり息を吐いて目を閉じ、確かめる。

ふと横を見てみると凜華が手を口に当てたまま固まっていた。恐らく凜華も昨日のことを思い出しているのだろう。

そんな凜華に声をかけようとしたそのとき、

「もつとしっかりしろバカ共が！　今から救出作戦を立てるから聞け。撃ち抜くぞ」

シヨックで何も喋らない俺達に痺れを切らした狼火が俺と凜華の顎に銃を突きつけてくる。

怖っ！　そんな物騒なもん顎に当てるなよ。冗談だとしてもあんなだと冗談に聞こえないから本気^{マジ}でやめてくれ。

凜華もさすがにヤバイと思ったのかしきりにこくこくと頷いている。

「学園側は今さっき救出作戦として襲撃任務をだしたそうだ。ちなみに今回は奇襲だ。なので私が引き受けておいた。本来なら迎撃科の教員でのみ任務を遂行するのだが、今回は敵の数も正確に把握してないため私以外の教員は学園で待機することになった」

「ちょ、ちょっと待ってください！　本来襲撃任務は教員か3年以上の上級生とでなければ受けることはできません。なのに教員はだめだなんてできる人がいないじゃないですか」

そう、襲撃戦にはブレイカーが必須なので教員の承諾をもらわないう限り、受けて遂行することができるのは3年以上だけなのだ。

そして今の時間帯は3年以上は全員任務を遂行しているところだろう。

なので残っているなかで任務ができるのは教員のみ。しかしいくら教員でも襲撃任務は複数人でないと学園は受諾しない。

要するに焰さんを救えないのだ。

だが狼火は、「最後まで聞け」と余裕の表情で——いや、むしろ楽しんでるかのような表情で話を続ける。

「お前の言うとおり今この場で任務ができるのは私だけだ。そこで、だ」

俺達の顔を交互に見ながらいつもとは違う、まるでいたずらを思いついた子供のような笑みで言う。

「お前らで奇襲しろ」

「なっ!」「えっ!」

狼火の言葉に二人して同時に驚きの声を上げる。

「なにそんなに驚いてんだ。私が焰が連れ去られたといったときお前ら何かに思いふけていたじゃないか。なにか心当たりがあったんだろ?」

その核心を突いた言葉に俺達は反論のしようもない。

「いいか、今からお前らには強化服に着替えてもらう。まあ、一応お前らが死なないよう私は後方で医療科のやつと待機しといてやるからやばくなったら退却しろ」

それだけを言うと時間がもつたいないのか、「15分後に裏門だ」と言い残しどこかへ行ってしまった。

強化服とは任務や対アグレッションなど、実践で使うもので、弾防弾性（通常の防弾服は弾があたると少なからず衝撃が来るが、これは軽く平手をされたくらいしか衝撃は来ない）だ。

ちなみに制服をただ強化しただけのようなもので、防弾性が高い割には重さはほとんどない。噂では制服のようにいつも着ているやつもいるらしい。

とにかく着替えに行くか。やるだけのことはしないと。

……さて、どうしたものか。

裏門に着き、教員が持ってきてくれた強化服に着替えながらため息をつく。

（っていうか、なんで強化服に俺の名前が刺繍してあるんだ？）

普通に考えて生徒の専用強化服なんてあるわけがない。卒業してリベンジャーになったときに専用強化服を注文するのが常識だ。それなのに俺達だけあるとは……なんだか早かれ遅かれ、俺が強化服を着ることが分かっていた——いや、決まっていたかのような。

いや、考えすぎか。第一、そんなことをして学園側に得がないのだから。

「おい凜華」

「うつ、うるさい！　べつ別に考え事なんてしてないもん！」

怒られた。呼んだだけなんだけどな……。

「それで、なによ」

「ああ、ここまでできた以上断るわけにもいかないけど……お前は大丈夫なのか？」

「大丈夫って何がよ？」

「いや、ここからは命を失うかもしれないからさ……お前はやらなくてもいいんだぞ」

そもそもこれは俺の責任で凜華が無理に付き合う必要はないからな。

「あんた一人で何ができるのよ」

「そりゃあ……なんもできないかもしれんが……」

「でしょ。だからあたしも行くの。べ、別に日向が心配とかそういうのじゃないから期待しないことっ！」

「そんなの、初っから期待してないっての」

「……期待してないんだ」

なにやらぶつぶつ凜華が呟いてたが、それをかき消すかのように遠くから馬鹿でかいエンジン音が聞こえてきた。

第九話 「約束して、死なないって……これは命令よ」

エンジン音はどんどん近づき、バイクと人影が見えはじめ——
——って危ねえっ！ このままだと直撃コースじゃねえか！！

俺はなぜか不機嫌な凜華を引っ張りながら避難した。

ものの数秒後、狼火と医療課の制服をきた上級生徒がさっきまで俺たちがいたところに2台の大型バイクが豪快にドリフトしながら止まった。

……気づかなかつたらホントに当たってたよな。

「ちょっと、狼火先生！ 危なかったじゃないですか！」

「成宮、待たせたな」

「……無視ですか」

狼火がバイクから降り、上級生徒の人もぶつぶつ文句を言いながら降りる。

（綺麗な金髪だな……）

俺と同じくらいある女子にしては高い身長と医療時に邪魔になるからなのだろうか首あたりで切つてあるストレートの金髪、少し長いまつげの下にはキリッとした目がどこか迎撃科の雰囲気と漂わせる。

「今回後方で私と待機する医療科三年の雌ヶ崎だ」

「雌ヶ崎しがさきです。今日はよろしく」

「こちらこそよろしく願います」

「お前らにはこれからこのT・SAで奇襲を仕掛けてもらう。前座席は成宮、後部座席は杉原だ。通信科の情報によると奴らはどこかの建物にこもっているらしい。なので近くの高速路から二階か三階辺りに突っ込み、空中で銃を乱射、着地後に混乱している敵を銃で牽制しながら焰を保護、その後は追手の迎撃は私がやるからすぐに学園まで退却しろ」

なるほど、確かに人数も分からない相手を殲滅してからじゃ流れ弾もあるから焰さんの無事が保障できないし、戦闘時に誰かが焰さんを連れて逃げる可能性もある。

だから俺らが先に焰さんを救出し、外で待機している狼火が残りの敵を殲滅するというわけか。さすがは迎撃科の教員だな。作戦に無駄が無いし、本来の目的を最優先としている。

……それにしてもT・SAか。

最新の科学技術をフル活用し、世界で唯一超小型原子力エンジン^{……}を搭載した奇襲戦用重装大型バイク。

二人での奇襲戦を基準としているので前座席が操縦用、後部座席が銃撃用（立つても体がぶれないようバランスがとりやすい構造になっており、座席の下と横には予備の銃弾が入っている）。

さらにはタイヤからエンジンまで全て強防弾性、車体の前に弾数は少ないがなぜか超小型バルカン砲がついている。（動きにくくなるのでヘルメットは無い）

……この重装備をしても最高時速は300kmを超えろというん

だから……乗り物じゃなくてもはや兵器だろ、これ。

ちなみにT - S Aの正式名称は『T I P E S u r p r i s e
A t t a c k』だ。

そしてこのT - S Aを活用するために作られた迎撃科作戦時専用
超高速道路、通称、高速路はビル3階〜5階ほどの高さがある。

高速路には目的地に一気に奇襲するため、ところどころにジャン
プ台のようなものが置いてあり、そこから奴らがいる建物に突っ込
んでいくのだ。

俺達一年には多少、いや素人に銃撃戦をやらせるくらい無理があ
るかもしれないが、それが一番早く焰さんを救出できるので二人と
も文句は言わない。

「よし、準備はいいか？」

「私は後方で待機だけですからいつでも」

「わ、私も大丈夫です！」

「俺も準備オーケーです」

狼火の最終確認に紗江さんは特になにも、俺達は銃の最終チェッ
クをしながら答える。

その様子里に満足したのか、狼火は好戦的な笑みをこぼしT - S A
のエンジン音を鳴らす。

「よし、そんじゃ任務開始！！」
ミッションスタート

「目的地まで残り2分です。敵は建物の中にいる模様。以前、動きはありません」
「了解」

耳につけた小型通信機から通信科のオペレーターと狼火の声が聞こえる。

この小型通信機はオペレーターからの連絡や戦闘時にも正確に指示を伝えることができる。ちなみに小型カメラもついているのでオペレーターもリアルタイムで指示を出すことができる。

それにしても、だいたい180kmくらいで走っているのにまるで静かな場所で聞いているかと錯覚するほどの聞きやすい声だ。しかも知りたい情報を先読みしてすぐに報告してくれる。オペレーターの技術もさすがだな。

「おい杉原、そろそろ銃の安全装置外しとけ」
セーフティ

凜華は狼火の指示通りに銃（ちなみに凜華は二丁拳銃だ）のセーフティを外す。
「残り1分です」
「よし、そろそろさらにスピードを上げ始めろ。後杉原は成宮にしつかり抱きついておけ」

「「ええっ!?!」」

「いちいちうるさい! 建物に突っ込むときに衝撃でとばされないよう抱きつけて言ってるんだよ」

いきなりの命令に同時に声を上げた俺たちだったが、こつも正論を言われると反論の使用もない。

しばらくした後小さな声で、「す、少しでも変なことしたら許さないんだから」と遠慮がちに凜華が背中に抱きついてきた。

(お、おいおい)

いくら幼馴染でも抱きつかれたことは一度も無い。手すら繋いでたのはものすごく幼いころだけだ。なんだか心拍数が異常に上がっている気がする。

(マ、マズイ……作戦中だったのに余計なことを考えてちゃだめだ)

しかしそうはいってもどうしても気になる。妙に背中に凜華にはないはずのやわらかいものがあたってるし……。

凜華の体温が直に俺に伝わってくる。幼馴染でもこんなにドキドキするもんなんだなあと思わされる。

「残り40秒」

「成宮! スピード上げろ! 200km以上だせ!」

「りよ、了解」

って返事しちゃったけど無理無理!! そんなことしたら転倒するだろ!

しかし狼火の指示を無視するわけにはいかない。
俺はむりやり背中のことを忘れ、心の中で転倒しないよう祈りながら、徐々にスピードを上げていく。

183 — 187 — 193 — 201 —

速度が200kmを超えたとき、腰に回ってた手が、ギュツと強くなった。

不思議に思っただけ顔を後ろに向けようと思ったが——こんなスピードで後ろ向ける度胸なんて俺にはない。

「日向……」

俺がアホみたいにあたふたしていると凜華がいつもとは違う、か弱そうな声で俺を呼んだ。

「凜華……？」

まさか緊張してるのか……？

いや、当たり前か。俺は敵の的にならないよう走り回ればいいのだが凜華は違う。

突っ込んでから着地も待たずに立ち、そこからずっと銃撃戦をしないで済まない。しかも相手は何人なのかも分からない状況で、だ。

弾道を予測する訓練はしてきたから死ぬことはないかもしれんが、大怪我をする確立は俺なんかよりはるかに高い。

本来なら俺がすべきだったことを凜華がやっている。

ならば俺は凜華に比べればちっぽけでも、こいつをできる限り助けなきゃならない義務があるよな。

「なあ、凜華」

俺は加速と操縦に集中しつつサイドミラーに目をやり、まだ強く俺に抱きついている（よくみれば手が震えている）凜華に声をかける。

「な、なに？」

「帰ったらスクランブルエッグ作ってやるよ」

その俺の場違いすぎる言葉に凜華は最初ポカンとしたが、すぐに俺がなんでこんなことを言っているのか分かり、くすつと苦笑を零す。

「絶対に、よ。忘れたり作れなかったりしたら許さないんだからっ」
「もちろんだ」

すると凜華は少し黙ってから恥ずかしそうに顔を近づけてきて、俺の耳元で呟いた。

「約束して、死なないって……これは命令よ」

目を閉じ、今この瞬間をかみ締めるかのようにゆっくりと、でもはつきりと優しくささやかれたセリフ。

その言葉を聞いた瞬間、体から抜けていくように不安、緊張が消えていく。なんだこの感覚は。今ならなんでもできる気がする。

「ああ……その命令、引き受けた」

俺は顔が少し熱を帯びているのを感じていた。

（そうだ。お前は笑ってる顔のほうがいい）

だからもう二度とさっきみたいな顔はすんな。

俺はさらに強く、しかしさっきのとは違う、どこか嬉しそうな凜華の温もりを感じながら最後の加速を始める。

「残り10秒。目標の建物発見しました」

オペレーター言うとおりの場所に目を凝らすと廃棄となったらしいビルがあった。

（なるほど、隠れるにはもってこいだな）

コンクリートの壁をどうやって壊そうか、などと考えていると俺の考えてることが分かったのか凜華が俺に聞こえるように大きめの声で話す。

「日向、小型バルカンをリロードさせておいて」

なるほど。こういう状況のためにバルカンがついてたのか。

俺は凜華の言うとおりリロードする。

しかし、まあ奴らも漫画の世界じゃないんだからまさかビルの外からバルカンぶっぱなしながら奇襲してくるとは夢にも思わんだろうな。

そのときの奴らの顔を想像するだけで笑いがこみ上げる。

「後5秒」

カウントダウンが始まり、俺と凜華は徐々に体を前傾させていく。

「4」

T・S Aの進路をビルに一直線に微妙に軌道修正をする。

「3」

指をバルカンのトリガーに当てる。

「2」

照準をしっかりと合わせ、緊張を沈める。

「1」

ビルに一直線にあるジャンプ台から、大空へ羽ばたく鳥のように
飛び――

「0」

俺は盛大にバルカン砲を放ちながら全ての想いをぶつけるかのよ
うに叫ぶ。

「行けよおおおおお――!!」

第十話 「——っ！何をふざけたことを！」（前書き）

初めての戦闘描写です。

描写がへたくそだと思っんで遠慮せずビシバシ指摘くださいー！

第十話 「——っ！ 何をふざけたことを！」

「な、何だ！？」

突如上から爆音がし、ジャステイスの奴らが驚きの声をあげる中、T・S Aが宙を舞う。

どうやらこのビルは外装以外は全て解体されており一階からだが一番上の天井まで見えるようだ。

凜華は作戦通り、敵が気づいた瞬間から俺に回していた手を腰の拳銃に回し、得意の二丁拳銃でやつらの武器を正確に射撃している。

「お前ら何をうるたえている！ 殺しても構わん、殺れ」

T・S Aの着地のドリフト音にあからさまに眉を顰^{ひそ}めながらジャステイスのリーダーらしき男が声をあげる。

恐らくだが、今指示を出したやつの中に焰さんがいるはずだ。

（それにしても……）

さっきの一声ですぐに体勢を立て直すところはさすがだ。

しかし人数が予測と全然違う。このままじゃ焰さんを救出できたとしても脱出は難しいな。

「日向！ 援護して！」

「おいおい、無茶を言うな」

今でさえアクセルを少し踏んだだけで一瞬で80kmくらいは出る普通じゃないバイクを運転しながら、しかも敵の弾を避けているんだぞ。さらに銃で援護しろとか……どこのアクションゲームだよ。

「早く！」

「ああ、分かったよ！ 転倒しても知らないぞ」

半ばやけくそ気味に俺はT・S・Aのアクセルをさらに踏み、今にも転倒するんじゃないかと思うくらいジグザグに走りながら銃で凜華を援護する。

「死ねえ！」

ジャステイスのやつの一人在金属バットをぶん回しながら来たが、銃でバットを飛ばしつつ、T・S・Aで体当たりし遠くに吹っ飛ばす。

凜華も敵の武器を狙って撃っている。が……

（おかしい……なんであいつらは銃を持たないんだ）

ほとんどの奴らが打撃武器を持っている。

まさか銃の訓練をしていないわけでもないし……違和感がある。ぎる。

しかも凜華の弾は最初は一発一発正確に敵の武器を弾いたり壊したりしていたが今はほとんど当たっていない。

凜華は射撃の精密性に非常に長けており、その実力は迎撃科の中でもトップクラスなのだ。

その凜華が撃つことに当たらなくなっていくなんて……しかも俺の弾も狙っているはずなのに違う方向にいつてしまう。

（一体どういうことだ）

「ビル内に極微量ですが強い風が発生しています。銃撃戦を止め、今すぐ焰香奈を救出し、直ちに脱出してください」

「風……？」

「日向、焰香奈を見つけたわよ！」

オペレーターからの報告にさらなる違和感を覚えつつも、指示どおりに攻撃をを交わしながら焰さんのところに向かう。

敵を避けつつ向かうと睡眠薬が何かで眠らされているらしい焰さんと先ほどのリーダーらしき男がいた。

「これはこれは。防弾性に加えて原子力エンジン、か。学園もほとんどんでもないものを作るな」

こんな状況でも一瞬でT・S Aの性能を見抜く冷静さ。

やはりこいつがリーダーか。

「ふむ。これにはいくら銃で撃つても無駄か」

「凜華、このまま焰さんを救出するからあの男を牽制してくれ」

「分かったわ」

凜華は指示通り、再度ホルダーから銃を出し相手の動きを封じるため男の腕と足にめがけて発砲する。

——よし、この弾道は絶対当たる。

「おいおい、そんな物騒なものを向けるな」
「なんだ……こいつ？　なんでこんな余裕でいられるんだ？」

刹那、絶対に当たる弾道にあつた弾がやつに当たる直前、金属が擦れ合うかのような音とともに、まるで男を避けるかのように弾が曲がった。

「なっ……！？」

「危ねえな。それにしてもそのバイクに乗られていては厄介だ。だから降りろ」

「——っ！　何をふざけたことを！」

もう一度アクセルを踏もうとしたそのとき、

「と、止まった……！？」

アクセルを押しても進まないどころか、まるで押し返されているかのようにバックしていく。

「早く、降りろ」

先ほどよりも低く、威圧のある声と同時にT・S・Aが宙に浮き、

俺達ごと横に、まるで突風にとばされる傘のように簡単に吹っ飛ばされ、壁に激突する。

「きゃっ！」「ぐっ！」

その強い衝撃に思わず声が出てしまいついにはホントにT・S Aから降ろされてしまう。

「まさか……^{エスパー}念動力者なの……！？」
「まさか、嘘だろ……？」

凜華の言葉に俺は驚きを隠せない。

ジャステイスはホントに超能力者を育成したって言うのか？

それもこんなも物を持ち上げ吹っ飛ばすことができるほどの力を。

「ふん。見たところ貴様らはブレイカーを持ってないようだな。ということは一年か？ だとすれば我々もなめられたものだな」

男はあからさまに不愉快な顔をするが、何を思ったかすぐに余裕の笑みを浮かべる。

「まあ、いい。暇つぶしにはなるな。遊んでやる」

「——っ！ なめんじゃないわよっ」

「やめる凜華！ むやみに突っ込むな」

しかし完璧に見下されているからか、頭に血が上った凜華は太ももにいつも隠し持っている短剣を握る。

「こんのっ！」

「まだまだだな」

男は小さい体を生かして小刻みに鋭く攻撃してくる凜華をいとも簡単に避けている。

「っ！！　これなら！」

凜華が得意とするサイドステップでの高速の切り返し攻撃も男は足をほとんど動かさず、まるで何かに引っ張られてるようにかわしている。

銃で援護しようにもただでさえ動きが速く標準が捉えられない上、先ほどのように曲がってしまっただけでは凜華に誤射する可能性がある。

（俺はただ見守ることしかできないのか……！）

つい数時間前に感じた苛立ちがまた始まる。

「もらったあ！」

男を壁際に追い込んだ凜華が大きく宙に跳び、回転しながら男に大根切りのように大きく刀を振るう。

が、目の前にまで振り下ろされた刀が男を捉える直前。先ほどの弾が曲がったときと同じような音がし、まるで壁にでも当たったかのように刀が止まる。

「え……！？」

「邪魔だ」

凜華が驚いて気を抜いた隙にまたあの分けの分からない能力で凜華を突き飛ばす。

「大丈夫か」

「う、うん。けどやっぱあいつエスパーなんじゃ……」

俺は飛ばされてきた凜華を受け止めつつ、またも感じた違和感に頭を悩ませる。

弾を曲げるときも刀を止めるときも使っていたあの超能力^カ。

そして足を動かしてる様子もないのにまるで地面を滑るようなあの動き。

そして音は刀を止めていた間ずっと鳴っていた。

本当にエスパーならどんなものも一瞬で止められるのではないのか？あれはまるで刀の勢いがなくなるまで盾で防いでるかのような感じた。

いや、そもそもだ。なんでエスパーがあんな金属音のような音を出すんだ？

下級生徒のときの対超能力者の授業で習ったが念動力なら無音のはずだ。

少なくとも何かと擦れ合うような音はしない。

何かがおかしい。

だがあと一歩で分かりそうなのに全く分からない……

（くそっ！ 結局俺は何もできないのかよ……）

また怒りがこみ上げてくる。

（いつも安全なところから見ているばっかで……今回だって凜華に辛いことを任せっきりで！）

そこでふと自分のなかにある、“あるもの”を思い出す。

（そうか、いつそこれを発動させてしまえば――）

「日向！ 大丈夫！？」

「えっ、ああ」

「いきなり顔色が悪くなっていってたけど……あたし達じゃ勝てないし一回撤退する？」

「いや、今を逃したら恐らくもう奴らを捕まえることはできない。

少なくとも焰さんが生きていられる可能性はない」

「だったらせめて狼火先生のところまで――」

「駄目だ。その隙に逃げられちゃ元も子もない」

「じゃあどうすれば……」

「……大丈夫だ。あいつはエスパーなんかじゃない」

「――っえ！？」

さつき凜華に呼びかけられる前。意識が飛び、ほんの一瞬だけ発動したのか今まで感じてきた違和感が全て解けた。

こいつはエスパーではない。

「まあ、見てろって。お前にも手伝ってもらうことになるけどな」

そう言いつつ俺は不良品のほうの銃をホルダーからだし、俺はさ

つきまでの不快感がまるでなかったかのような余裕の笑みを浮かべる。

「さあ、凛華。反撃開始だ！」

第十一話 「命を駆け引きつてやつをよ！」

「凜華、もう一度だけあいつに突撃しながら銃を撃ってくれないか？」

俺は男に聞かれないよう、小さな声で凜華に言う。

「で、でもあいつに銃は利かないんじゃない……」

「頼む。最後にもう一回だけ確認しておきたいんだ」

「……わかったわ」

少し戸惑った顔を浮かべながらも凜華は頷いてくれた。

「よし、それじゃ今から3秒後だ」

「うん……！」

俺たちが会話終わると、男があざ笑いながら聞いてくる。

「さて作戦はできたのか？」

「ああ、今からその余裕そうな面をぶつ潰す作戦をな」

「ほう……それは楽しみだ」

—— 3秒！

「凜華！」

「うん！」

やつが言い終えた直後、凜華は全速力で走り出し一気に距離を詰める。

「またか。お前らは学ばつてことを知らないのか」

「凜華、撃て！」

「言われなくてもっ！」

パァァン。

やつの腹にめがけて銃を放つ。

しかし、銃声の直後また弾はやつの体に当たる直前——さっきと同じところで曲がった。

「期待はずれだな」

男は手を前に突き出し、

「きゃっ!？」

凜華は真後ろにいた俺のほうに吹っ飛んできた。

「大丈夫か？」

凜華をキャッチし、負傷してないか確認する。

どうやら足首を軽く捻っただけらしい。赤くはれている。

「う、うん。でもやつばあいつには……」

「いや、よくやってくれた。後は俺が何とかする」

「で、でもっ……!」

「まあ、見てなつて。——ここまで頑張ってくれてありがとな。後は俺に、任せろ」

安全だろう壁際に凜華を座らせ、安心させようとさらさらな髪を撫でながら言つと……いきなり凜華の顔が赤くなった。

なんで赤くなるんだ？ まるでキュンって音がしそうな感じだぞ。

「ヒュ、日向も気をつけてよねっ」

「わかってる」

俺は不良品のほうの銃を持ち、男に向かって凜華と同じように突撃する。

「貴様らは一体何度同じことをやれば気がすむんだ」
「はっ、勝手にほざいてる！」

男は俺たちが奇襲してきたときからエスパーのようなことをしている。

そしてさっき凜華が突撃しているときにもう一回確認してわかったのだが、あいつは弾道を見ていなかった。

あいつは一番最初の時に銃の種類をみていたのだ。

仮にだが、男が銃を知り尽くしているなら相手の銃の種類さえ分かれば弾の初速が、要するに弾の速度も分かり、自分にあたる直前が分かるのだ。

そしてさっきのオペレーターの報告にあった、本来屋内に吹くはずがない風。

昼休みときには結構強い春風が吹いていたのに作戦開始前は全く吹いていなかった。

そう、こいつは超能力者ではあるがエスパーではない。

下級生徒のときの対超能力者の授業で嫌々ながら超能力の種類を

覚えた甲斐があつたつてもんだ。

「さっきの女と同じように吹っ飛ばしてやるよ」

「はっ、やってみな」

本来無風のところに風を吹かせることができ、銃弾を逸らすことができる超能力は一つ。

「……調子にのるなガキがっ！」

男が俺に向かって手を出した瞬間、俺はすばやく真横にサイドステップをした。

「こいつ……」

「吹っ飛ばすんじゃないかったのか？ 風操者さんよ」

ウィンド・ソーサラー

「貴様……！」

風操者——その名のとおり風を操る超能力者のことだ。

「凶星みたいだな」

そう、さっき凜華やT・SAが吹っ飛ばされたのは念動力ではなく突風だったのだ。

銃弾を逸らすのも今日みたいに強力な風——昼に吹いていた春風——なら不可能ではないだろう。

「そしてT・SAをやっかいたと言ったのは防弾性のことではなくT・SAに搭載されているバルカンの弾の初速を知らなかったから他のやつらが銃を持ってないのは俺らの銃弾を逸らすさいに仲間の銃弾も逸れてしまい意味がないから、だろ」

「……見事だ。まさか一年に見抜かれるとはな」

男は苦笑する。

俺も見抜けるとは思ってなかったさ。父さんに貰ったこの嬉しくもないプレゼントがなけりやな。

「しかし分かったところでどうだと言っただ？ 貴様が今もっている銃をこの私が知らないと言っても言っただ？」

（そうだ。この銃の種類も恐らく知っているのだろう）

俺は走りながら銃が半自動式になっていることを確認する。

（だが、こいつは不良品）

半自動式時に一回引き金を引いただけで2発、3発と同時に出現しちゃう使えない銃。

だが、逆に考えれば――

一発目は二発目によって加速する！

そう、やつは予測する弾速とは違うのだ。

「じゃあ、こいつはどうだッ――！」

俺は男のできる限り死角に入るように斜め上に跳び上がりつつ銃口を向ける。

狙いは動けなくするために太ももを。

さあ、目の中かっぽじってよく見てろよ！

予測した弾側を超えて向かってくる加速する銃弾^{たま}を！

一発目と二発目がほぼ同時に出たため変な発砲音が鳴響き、俺の予想通り初弾は二発目によって加速して男に向かつていった。

（よし、これで！）

勝った、と思った。が、

「なっ……！？」

今までとは違う、まるで黒板を指で引っかいているかのような音と予想外の状況に俺は愕然とする。

別に銃弾が逸れたわけじゃあない。

だが――

銃弾がやつにあたる寸前で止ま………！！

「いやはや、驚いたよ」

男はまるで楽しんでるかのような声色で空を（いや天井か）仰ぎながら喋り始める。

「まさか銃弾が加速してくるとは………！ その発想素晴らしい！ リベンジャーでなかったらぜひともジャスティスに勧誘してたな」

だが、と男はどこか残念そうな顔でこちらを見る。

「そんなので私に弾を当てれると思ったのか？ その顔では分かってないようだ……まあ、ここまで楽しませてくれたせめてものお礼だ。冥土の土産に種明かしをしてやる」

そう言つと男はまだ音を鳴らして止まっている銃弾を手で払い、

風を剣のような形に収縮した。

「キミの推測どおり、私はNO5、風操者だ。手下どもに銃を持たせなかった理由なんかもキミの推測どおりだ。正直驚いた。だが、一つの可能性を忘れている。いや、その女の短剣を防いだときに気づけなかったか」

ナンバーファイブ

NO5……なにかの番号なのだろうか。

男はゆつたりとこちらに歩きながら剣をさらに収縮させている。

「可能性だと……!?」

「そうだ。キミは私が防弾服も着ないでリベンジャーと戦うと思ったのか」

「……どういう意味だ」

「まだ分らないのか。要は防弾服がいらないんだよ、風壁があるからな」

「なっ!?!」

風壁。自分の周りを回るように風を吹かせることによって作られた壁のことだ。

風操者なら誰でもでき風壁の強さは風の速度によって変わるが…

…銃弾を止めるなんて聞いたこともないぞ。

しかし超能力はファンタジーにでくるような魔法とは違い、呪文の詠唱をせずにそくざに一切の常識を無視した力を発動できるものだ。言わば非常識の塊なのだからなにができてもおかしくはない。

「ようやくわかったようだな。そう、さっきのキミの銃弾は私の風壁によって止めたのだよ。いや、実際は止めたという表現は少し違うが……まあいい。これでなにをしても無駄だということが分かったはずだ」

おいおい、ジャスティスはこんな化け物を創ったって言うのか。

「そして風を収縮してできたこの剣はコンクリートの壁さえまるで紙切れのように切れる。そうだな……まずは小娘から殺るか」
「ッ!？」

男が凜華のほうを向き動けない凜華が息を呑む音が聞こえる。

(ま、まずい! このままじゃ……)

しかしどうする。

今のままではこいつにはかすり傷どころか触れることさえできない。

しかしこうしている間にもやつと凜華の距離は縮まっていく。

「ヒュ、日向……」

凜華が怯えきった目で頼るようにこちらを見る。

それでも俺は動かない。いや、動きたくても恐怖なのか足が震えていて動けない。

守るものも、守るための銃も持っていないのに……

「安心しろ、すぐにお前も殺つてやるよ」

その時、いつだったか父さんがいなくなる前日、俺の誕生日の日に言われた最後の言葉の一部とある光景が浮かんできた。

——人は生きる意味があるから生まれたのではない。生まれ
たからこそ生きる意味を探さねばなんのだ——

父さんは俺に注射をうちながらそんなことを言っていた。

——なあ、父さん。俺は生きる意味を見つけれないまま死ぬの
か？ それも守らなければならぬものを守れないまま……

……………ドクン。

突如俺の体の奥から何か不思議なものが体中に流れ始めた。

（これは……）

俺はこの感覚を知っている。

一回目は父さんが注射している間。

二回目は迎撃科のブレイカー適性テストの時。

そして少し違うが風操者の正体を見抜いたときもこんな感覚だっ
た。

どのときも発動したときの意識がほとんどない。

だが、一回目のときは小さい頃でわかんなかったが、二回目のと
きは半分意識があったからこの存在のことを薄々分かった。

そして光景はどんどん鮮明になっていき、これが何だったのかを
思い出す。

そうだ、他人には絶対に言ってはいけないもの。
別にこれは小説の主人公のようなピンチで目覚める、形成を逆転
する新しい力などみたいな優しいものじゃない。

これはあのととき父さんが俺に投与した――

「ようやく準備ができたか」

「ろ、狼火っ！？……先生」

いきなり耳の通信機から狼火の声が聞こえてきた。

「早く起動させろ」

「な、なんのことですか？ それよりなんで援護に来てくれないんですか！」

「私だってオリジナルの力が見たいのだ」

「オリジナル……？」

「まあそんなことはどうでもいい。今感じているんだろ？ 体中を支配し始めている、お前の父が作った『細菌兵器』を」

「――ッ！！？」

なぜ狼火が知っている！？

今思い出したばかりだが、これは俺と父さん以外は知らないはずだ。

「なぜ私が知っているのか気になるようだな。しかしそんなことより早くしないと杉原が危ないぞ？」

「それはっ……けどあれは使うと意識が……」

「いまさら何を言っているんだ。適性テストのときから分かったた

んだろ。ブレイカーを使えば意識を保てることに。そして隠し持ってきてるんだろ、お前」

「そ、それは……ッ」

狼火の的を突いてくるセリフに言葉が出ない。

「いいか、お前の専ブレは普通のとは違く、所有者との感情リンクを最優先させたブレイカーだ。それさえあれば意識を乗っ取られることはない。そして起動条件の残りはお前の意志だけだ」

「だからなんでそこまで知っているんですか！ それに、今ここで起動したら他のやつらにバレル可能性がある！」

もう一名にはバレているようだが。

「それなら問題ない。医療科のやつは眠らせているし杉原も恐怖でもう意識が朦朧としているはずだ。後でごまかせばいい。もちろん私は他人に喋ったことはない。学園側はすでに知っているだろうがな」

「なっ……」

本当に信用していいのか？

しかし男はすでに凜華の目の前までにきている。

（考えている暇はない、か……）

——いいか日向、今までお前がやってきたことを無駄だと思うな。

…ドクン。

父さんのセリフとあのときの情景がより鮮明になり、さらに流れが強くなり、筋肉が鼓動するように波打つ。

——成功したことも、失敗したことも、嬉しかったことも、誰かを傷つけてしまったことも全ては無駄なんかじゃない、今のお前がいるための、意味のあることだったんだ。

ドクン。

これ以上ないくらい気分が高ぶってくる。

——たとえば他人から批判されようとも必ずお前の味方でいてくれる人がいるはずだ。そしてこの兵器は誰にも言^{ちから}つてはいけない。これは自分の信じる道を進むとき……大切な人を守るためにだけ使え

父さんが注射の最後に、意識が朦朧としている俺に言った、初めてで、最後になった父親らしい言葉^{セリフ}。

……なあ、父さん。

今こうして凜華を助けるためにこれを使うのは意味があることなのか？

それともいつものように「それもまた必然なのだ」とか言つのか？

……いや、そんなことどうでもいい。

今俺は俺のせいで凜華や焰さんの命を危険な目にしてしまっている。

そして今使わなかったら俺も含め凜華たちの命は危ない。

本当はこんな兵器^{もの}使いたくないが……

仲間を助けるためなら俺は――

ドクン！

さらに強く、俺自身と同調するかのような感じがくる。

「早くブレイカーを起動させる！ ブレイカーの前に起動させたら意識を保ってられる保証はないぞ！」

「セット・アップ」

狼火の指示通りブレイカーを起動させる。

すると棒状だったブレイカーは見る見るうちに白銀の美しい刀になった。

ドクン、ドクン！

さらに鼓動が増す。

「おい、超能力者」

俺は凜華の目の前でとどめの一撃を加えようとしていた男に挑発する。

「……なんだ？ 命乞いならもう遅いぞ」

ドクン、ドクン、ドクン！！

ああ、分かる。もう後少しで起動する。
けど意識は保ってられるはずだ。

「それはこっちのセリフだ、ゴミ野郎」

「なんだと……？」

さっきまでの俺とは違う雰囲気違和感を覚えつつも男は俺に剣を向ける。

父さんが俺に残した最後のプレゼントよ。

ずっとあのときから眠っていた兵器よ。

力を、かけがえのない仲間を守るための力を――

「今、俺によこせッ！！」

その瞬間、一気に俺の体が細胞兵器に支配されていくのが分かった。

だが、狼火の言うとおりブレイカーのおかげで俺の意識はまだ保たれている。

「さあ、始めようぜ……」

一気に目つきが変わった俺に「なっ……！？」と驚愕の声を上げている男に獣のように低くなった声色で、俺は戦闘狂のように好戦的な笑みを浮かべながら高らかに叫ぶ。

「命を駆け引きてやつをよ！」

第十二話 「せめてもっと俺を楽しませてから死ねよゴミが」

「ブレイカーだと……！？ なぜ一年のお前が扱えるのだ。いや、それよりもお前はなんだ？」

男はこれ以上なくらいに目を見開いていた。

だが俺の豹変っぷりに驚くのも無理はない。

そう、今俺を支配、いや同調しているものは、父さんが俺に投与した細菌兵器。

所有者と同調しありえない戦闘能力をもった『狂戦士』……いや、戦闘狂にさせるもの。別名『バーサーカーシステム』

これは政府がブレイカー開発と同時に世界屈指のリベンジャーでもあり、技術者でもあった俺の父に極秘裏で開発を要請した、禁断の兵器。

しかし父さんは作ったバーサーカーシステムを実際に使い、その危険性から開発を中止した。

もつとも、それをなぜ俺に投与したのかは不明だが。

「ああ？ んなもんでもいいだろうが。それよりもさっさと始めようぜ！」

…… ああ、バーサーカー狂戦士の俺よ。凜華も不安や恐怖とかで気絶してるみ

たいだからよかったけどもし誰かに見られてたら俺が狂ったって思われんだろ。——いや、まあ狂った戦士だから狂戦士のわけなのではあるが……

今俺はどうなっているかというところ、意識や記憶ははっきりして、セリフや行動も俺の意思だが……バーサーカーシステムとリンクしてるので実際の言動は完璧に戦闘狂になってしまっている。

たとえば攻撃を受けたら「いいねえ、そうだよ。戦いはこうでなくちやなあ！」などという超ドン引きの発言をしてしまう。

戦闘のときも同じだ。身体能力などが桁外れになり、俺が反応できない攻撃がくると代わりに回避してくれるが、ただ相手を足止める戦いなどできない。

こんなのが俺の体の中にあるなんて、父さんに言われなくても絶対に秘密にするわ。

とまあ、愚痴はとりあえずこいつをぶっ倒してからにするか。

「ふん、いいだろう、貴様から殺してやる」

男はそういうと剣の収縮を一度解き、もう一度収縮させてどこかのロボットアニメの機体が持つていそうなバズーカにした。

「塵となりてこの世から消え去るがいい」

男がバズーカのトリガーらしきところを引くと銃口から爆音を響かせながら風で収縮された弾が飛んできた。

直径1mはあるだろう普通じゃないとてつもなくでかい銃弾——いや、風弾は当たるところか掠るだけで人なんぞホントに塵になつてしまいそんな威力だ。が、

「そんなものか？ 遅すぎる」

そう。バーサーカーと化している俺にはその弾は愚か、速度すら分かるくらいに視える

「なあ、自分の必殺の一撃が跳ね返ってきたときってどんな感じなんだ？」

バーサーカーの俺は、楽しんでいるかのように風弾と地面のわずかな隙間にスライディングのように滑り込み、刀になっているブレイカーの腹で威力を殺さずに上へ軌道修正。

そのまま体を捻りバック宙をし、その力で流れるように風弾をやつのほうに反転させた。

もつともこれは時間にしてコンマ2秒。

どんなに動体視力がいい人間でも風弾がいきなり反転したように見えるぐらいだ。

「なっ!？」

驚愕もつかの間、威力と速度そのままの風弾が男自らに襲い掛かり、室内に爆音が木魂した。

「おい、まさか死んだんじゃねえだろうな」

ほお、バーサーカーの俺も人を殺したくないのか？ これは意外

だな。

「せめてもつと俺を楽しませてから死ねよゴミが」

……前言撤回。少しでも感心した俺がバカだった。

と俺が自分のセリフに自分で突っ込んでいるという奇妙なことをしているとなが両手を前に突き出しながら立っている。

「一体なぜ跳ね返ってきたかは知らんが……このくらいで死ぬつもりはない」

恐らく全ての風壁を前面に集中させ風弾を防いだのだろう。それでも男は見るからにボロボロになっている。

「ほお……いいねえ！ まだ戦うのか！ そうだよ、そこで死んでもらっちゃつまらねえんだよ！」

おい、さすがにその戦闘狂すぎるセリフはやめろ。終わった後マジで死にたくなるくらいに恥ずかしいから。

そんな俺の願いも意味なく、戦闘狂の俺の感情にブレイカーが鼓動するように刀の輝きを増していく。

「な、なんなんだお前は。まるでさっきとは別人じゃないか」

まあ、実質別人みたいなものなわけだが。

「もつと、もつとだ！ 俺を楽しませてくれ！」

動揺する男を無視し、俺は体勢を低く、さらに輝きを増す刀を両

手で持ち、体を捻りながら刀を背中に隠すようにタメをつくる。

「なあ！ その風壁とやらはこの攻撃も耐えられるのか！」

男が警戒するように風壁を前面にさらに収縮し、じりつと一歩引き下がったそのとき、俺は捻りで生まれた力を一気に開放するように斬りかかる。

20 m以上はあろうかという間合いを男に向かって一直線に、たつた一歩で。

普通の人間じゃありえないことだが、システムによって強化された俺の筋力では、タメさえあれば20 mくらい一蹴りで移動できる。

それもまた常人離れたスピード、詳しくは分からないが恐らく銃弾に匹敵する速度で。

ギヤイイイイイイン！！

風壁に当たった衝撃で銃弾のときや風弾のときなど、比べものにならないくらい大きな音が屋内に反響する。

「な、なんだその戦闘能力は！？ まさか超能力者なのか！」

もはや瞬間移動に見えるだろうその攻撃は風壁がなければ男は何も対応できずに真つ二つにされていただろう。

そう、それほどまでにバーサーカーシステムは人を最狂にさせるのだ。

「そんなもんかよ！　つまらねえ……もつと楽しませろよお！！」

もはや守ることしか考えられない男は、顔を恐怖に染めながら徐々に風壁を切り裂いていく俺をまるで化け物を見るかのような目で見てくる。

「お、俺が悪かった！　もう二度とこんなことはしないから、た、助けてくれ！」

「ああ？　最後になって命乞いか。残念だがもう遅い」

怒りでさらに輝きを増した刀で命乞いをする哀れな男の風壁を切り裂き、じりじりと壁に追い込んでいく。

焰さんや凜華にあんなことをしたんだ。助けるつもりは、ない。

「弱すぎるんだよ、てめえ。もう用はない。……死ね」

壁に張り付き、羞恥心を感じる余裕すらなくなってしまったのか、ボロボロと鼻みずを垂らしながら泣く男に俺はこの世のものとは思えないほどゾツとする目を向け、刀を引く。

……ってまさか刀で頭をぶち刺す気か！？　人は殺しちゃいけないのに、んなことしたら絶対に死にまうぞ！

とバーサーカーではない俺があせりながらも刀の軌道を逸らそう

と――

「あゝ ああああああああ！！」

声にならない絶叫をあげながら意識を失った男の頭には――

何もなく、刀は頭の数センチ横のコンクリートの壁に刺さっていた。

（ま、間に合った……）

直前まで頭に直撃コースだったため男は恐怖から刀が刺さったと錯覚したらしい。

俺は戦闘が終わったことで静まっていくシステムを感じながら苦笑を浮かべる。

「ヒュ、日向……」

「凜華！ 無事だっ——」

あれ、視界がくるくる回ってくる。

「日向！？ ヒュ……ガ！ ……ガ——」

どんどん凜華の声が遠くなって——

そこで俺の意識はなくなった。

「これがオリジナルなのか……学園のやつらが固執するのも無理はない、か。だがたぶんあれはまだ完全に発動しきってなかったな……」

しかしそれで“コピー”と同等の性能……。

予想以上すぎる結果に狼火は一人不敵に笑みをこぼす。

「ん……狼火先生なにが……？」

「起きたか。なあに、たいしたことはないさ。それよりミッションは達成だ。あいつらを回収しにいくぞ」

通信機を介して日向を見ていた狼火は、どうやら今起きたらしい雌ヶ崎に声をかける。

「は、はい」

（さて、この化け物をどうしたものか……）

「狼火先生、日向君たちが空けた穴から跳びこみますんで衝撃に備えてください」

「ああ」

雌ヶ崎の言葉に、ひとまずこのことは後で考えることにし狼火は衝撃に備えた。

「日向！ 早く食べてっ！ これは命令よっ」
「お、おう……」

今、俺の目の前にはなぜか紫のオーラを放っている物体……否、料理がある。

これは凜華が加工食品で作ったものだ。

……って冷静に解説してる場合か！

なんで加工食品がこんなになってるんだよ！？

どう考えてもおかしいだろ！

しかもこんなことにならないようにと香奈と相談した結果、ほとんど調理済みのものを渡したはずだ。

いや、そもそもだな。加工食品というのは誰にでも手軽にでき、簡単に見た目も味もおいしくできるものなんだ。

それがどうやってたらこんなどこかのギャグ漫画で「下手なのに気づいてない料理好きのヒロインが作った絶対に食べなくてはいけない紫色の何か」になるんだよっ！

「は、早く食べなさいよ！ べ、別にあんたに食べて欲しくて作っただんじゃないんだからね！ 勘違いしないことッ……！」

「あ、私はちよっとお手洗いに行ってきますね。日向さんは先に食べててください」

凜華がそういった直後、俺の隣に座っていた香奈がありえない料理を見たシヨックの硬直状態から回復し逃げるようにトイレへ行った。

……ってかあいつどさくさに紛れてこの料理が安全かどうか俺で確かめるつもりだろ。

「は、早くしなさい！」

「そ、そうだな」

ちよつとそわそわしている凜華を怒らせないために俺はガクガク震えている右手を左手で必死に押さえながらスプーンを持ち、凜華曰くチャーハンを口に持っていく。

（どうか、せめて生きていられるものでありますように。 アーメ）

しかし、神に祈りを告げる「アーメン」すら言う前に意識が消えていく。

ああ、と俺は消えかけていく意識の中思う。

なぜ俺は凜華に料理をやらせてしまったのだろう、と。

いやそもそもあの日、香奈を救出した翌日に凜華が病院で「生きて帰ってこれた&初襲撃任務クリアのお祝いでパーティーやろうよ」って言い出さなければ――

そう、こうなってしまった原因は俺が意識を失って病院に運ばれた翌日、先週までさかのぼる。

第十二話 「せめてもつと俺を楽しませてから死ねよゴミが」(後書き)

諸事情により次話更新は遅れます。

なお、今までの話を改稿する予定なのでそのときは活動報告にて報告します。

誤字脱字等ございましたらおしえていただけると嬉しいです。

第十三話 「え、えっと……たぶんずっとです」(前書き)

ながらくお待たせしました!!

これでジャスティス編完全完結です

第十三話 「え、えっと……たぶんずっとです」

あの日風操者を倒した後俺はそのまま意識を失い、気がつけばいつもとは違う見慣れない天井を見ていた。

（ここは……？）

どうやら個室らしい。ふと横を見てみると、どうやら眠っているらしい凜華がいた。

光のせいかな、目の下にはくまがある。

「……ん……？ 日向！ 起きたのね！ よかった……」

「凜華、ここは……？」

「覚えてないの？ ここは治療科の病院よ」

そっぴい治療科の棟にはリベンジャー専用の病院があったんだっけ。

俺はそんなことを思いつつまだ眠いのか、目をこしこししてる凜華から俺が意識を失った後のことを聞いた。

どうやら俺が倒れた後すぐに狼火たちが来て、雌ヶ崎さんが俺を、狼火が凜華と焰さんを救出したらしい。ちなみに風操者は後で学園

の教員が回収するとか。

そして意識がない俺と焰さんはこの病院に連れてこられたというわけだ。ちなみに焰さんは俺より早く目を覚ましたらしく今は自室で安静にしているらしい。

「目を覚まさないんじゃないかとほんつとに心配したんだからね」「心配してくれたのか？ お前が俺を？」

俺の中のイメージの凜華だとありえないことだったので聞き返すと、凜華は顔を真っ赤にして、

「ちょ、ちよつとよ。ちよつと。ミジンコよりもちっちゃいんだから！」

どっちだよ。

まあ、心配はしてくれたらしいな。

「凜華、ありがとな」

「う、うん。そ、そうよもっと感謝しなさい」

「はいはい」

今回ばかりは文句を言わないでおく。作戦中もいろいろ頑張ってくれたしな。

「なんだかんだ言っただけ任務は達成できたな」

「そうね。正直なんで風操者を倒せたのか全然分からないんだけど……」

「そ、そっか。まあ任務は達成できたんだしいいじゃないか」

不思議そうに言う凜華はあるとき、狼火の言うとおり意識が朦朧としていたらしく、俺がバーサーカーシステムを使っている間は記憶がほとんどない。

危なかった……もしあんな戦闘狂の俺を覚えられていたとしたら俺は社会的に死んでただろうよ。

仮に凜華が誰にも話さないって言うっても自殺したいくらいだ。

「それはそうなんだけど……まあいつか。私これからちよつとご飯食べてくるから」

「ご飯？ と、不思議に思っ
て時計を見ると、ああなるほど。現時刻はだいたい4時。俺はどうやら一日中寝ていたらしい。」

「わかった。遅くまでありがとな」

「ご飯食べたらまたくるからしっかり休んでおきなさいよ」

それにしても早い夕食だな、と思いつつ凜華を見てると、腹が減ってるのかばたばたとつまずき、壁に肩をぶつけながら出ていった。

「やれやれ。ほんと騒がしいやつだな」

凜華のあたふたぶりに苦笑しながらも、焰さんを自らの手で助けることができた達成感を感じる。

しかしそれもつかの間、次の来訪者が来た。

「はい」

凜華が出て行ってからものの1分もしない部屋にノックが鳴り響く。

「ずいぶんと元気そうだな」

「ろ、狼火先生!？」

俺の返事を聞く前にドアを開け始めていた来訪者は狼火だった。

「どうしたんですか？」

「なんだ。私が生徒の心配をしたらおかしいか？」

おかしい。絶対。

と、俺が疑いの眼をむけると、

「ふっ。冗談だ。今日ここに来たのはお前の容態を確かめるのもそうだが、お前が今一番気になってることを教えてやろうかと思ってるな」

気になっていること、にさっきまでの浮ついた気持ちは消え、緊張がはしる。

「……バーサーカーシステムのことを、ですか」

「ああ。できる限りは話さないといけないからな」

「いったいどこまで知ってるんですか？ いや、そもそもどこでシステムのことを……」

「システムを知ってる理由は言わん。システムの知識については……そうだな、今のお前よりは知っている、とでも言っておこうか」
どこか謎めいた感じな前置きをし、狼火は説明を始める。

「まずバーサーカーシステムとは、所有者の感情が高ぶることによって活性化する。このときのシステムは言わば“起動準備”であって“起動”ではない。ちょうどお前が、やつが風操者であることを見破ったときの状態がそれだ」

「ちよつと待つてください。と、言うことは俺が違和感を感じつつも見破れなかったのにいきなり分かったのってやっぱシステムのおかげなんですか？」

ようはあのとき俺が感じた一瞬意識が飛んだときの状態は、やはりバーサーカーシステムは起動、いや起動準備の状態だったのか？

「ああ、そうだ。とはいえいくら起動準備では本来のシステムの10分の1も機能を引き出せないし、お前の意思がない限りシステムは完全には起動しない。だからお前が望まない限りバーサーカーになることはないし、せいぜい悪くても意識が少しの間飛ぶくらいだろ」

意識飛ぶとか充分問題あるだろそれ！

と心の中で突っ込みを入れつつも真剣に聞き続ける。

「そして起動の条件がお前の意思に対し、起動準備の条件はいとも簡単に一定以上の怒り、憎しみなど、要は“負”の感情をシステムが感知することだ」

今まで喧嘩をしてきたがそれでもシステムが活性化しなかったってことは相当な負の感情がなくてはいけないのか。

「そしてここからが本題だ。お前のシステムは普通のとは違う、オリジナルだ。よって普通のシステムなら起動させてもコントロールできるが、オリジナルは起動準備ならともかく起動させる際はその専用ブレイカーを起動させておかないとシステムに完全に意識を乗っ取られることになる」

くいつと狼火は顎で俺のベッドの横に置いてある俺専用のブレイカーをさす。

「ちょっと待つてください。オリジナルってなんですか？ いやそれより普通って言うことはシステムは俺以外にも持っている人がいるんですか？」

「オリジナルについては今は言えない。システムはこの世に3つしかない。お前とお前の親父さんと誰かだ」

狼火はさつきからさらに謎を深くさせるようなことしか言っていない。

それにしてもなぜシステムは3つだって分かるんだ？ 父さんは秘密は厳守する人だった。だから父さんがシステムのことを言ったとは思えない。

そこでふと一つの可能性を考える。

もしかしたら狼火もシステムと一緒に作ってたのか？ ……いやそれはないか。父さん独自で開発したって言ってたしな。

俺はさらに深まっていく謎に頭を混乱させつつも必死に理解しようとする。

「ともかくだ。お前のシステムは強力すぎるから必ずブレイカーを起動させてリンクしてからシステムを起動させるよ。じやなきや暴走するぞ」

「専用機ブレイカーってみんなバーサーカーシステムを抑えるような効果があるんですか？」

俺がふと思った疑問を口にするると狼火は珍しく困ったような顔をし、

「あー、全部の専ブレにあるわけじゃないが……まあこれくらいは言って大丈夫か」

とぶつぶつなにか呟いてから、ハアとため息をつき答える。そのとき上下した胸に不覚にもドキドキしてしまった。今まで気づかなかったが狼火って隠れ巨乳だったのか……。

「お前の専ブレは他の奴らが持っているのとは違い、バーサーカーシステムに対応させるために作った、ある意味本当のお前専用ブレイカーだ」

普通のとは違う、システムに対応した俺専用のブレイカー……？

駄目だ。ますます分からなくなってきた。

「ああ、もうこれ以上は喋れん！ 仕事もあるし私は帰る」

俺がまた質問しようと狼火を見ると、察されたのか狼火はすぐに立ち上がりスタスタとドアのほうへ行ってしまった。

「あ、ちょっと待ってください！」

「なんだ！ システム関連の質問は受け付けんぞ！」

や、やばっ。

今ここで帰らせたらもう一生分からなような気がして呼び止めてしまったが……もし質問したら絶対殺されるぞ。

かと言っただけなんでもありませんって言ってもそれはそれで殺されそうな気がするが……

「早くしろっ。私も忙しいんだ」

そんな狼火からの催促に俺はパツと思いついたことを質問する。

「風操者の男はどうなったんですか？」

よし即興ながらいい質問だぞ！

「あいつは今迎撃科の教員全員で拷問中だ。手足を縛ってこの部屋の半分くらいの拷問部屋に入れて……そこでなにをしてるか知りたいか？」

「い、いえなんでもありません！ 本日はありがとうございました！」

どうやら聞かなかったほうがいい質問だったらしい。

結局狼火はその後すぐに帰り俺は一人暇つぶしに銃をいじりなが

ら、さつきまでの狼火の説明を整理していた。

「オリジナル、か」

結局オリジナルってのがなんなのかも分からないままだが、ようはシステムを起動させるときは必ずブレイカーも起動させとけってことだ。

「それにしてももう少し説明があればなあ……」

そんなことを考えてるとまたしてもノックがした。

来訪者多いな、と思いつつ「はい」と返事をする、

「あ、あの、体調は大丈夫でしょうか？」

「焰さん？」

そう、本日三人目の来訪者さんは現在自室で休んでるはずの焰さんだった。

「もう体調は大丈夫なの？」

「ええ。だいぶよくなりましたよ。日向さんもだいぶよさそうでしたよ。よかったです」

とりあえず怪我はなかったみたいだな。よかった。

「そういえば凜華さんは？」

「凜華？　なんで凜華がここにいたことを知ってるんだ？」

「私が朝、目を覚ましたときにお礼を言おうとここに来たのですが……そのときに凜華さんとメアドを交換したんです。それでさつき凜華さんから日向さんが目を覚ましたってメールがきたんで来たの

ですが……」

「ああ、そういうことね。凜華ならさっき夕食を食べに行っただよ」

そのときの凜華のふらふらぶりを思い出してまたもや笑ってしまった。

ん？ ちょっとまでよ。焰さんがここに来たのは朝で凜華は俺が起きたときにメールを送ったってことは……

「なあ、凜華ってここにどのくらいいたんだ？」

「え？ え、えっと……たぶんずっとです」

「ずっとというと……俺が倒れてからずっとか？」

あまりにも思わなかったのでつい声を荒げてしまう。

「は、はい。……私が来たときは最初寝ていて、「日向……日向……」とずっと寝言を呟いてましたから。ご飯も食べてなかったみたいです……きっと目を覚まさないんじゃないかとすごく心配だったんだと思います」

そ、そうだったのか……じゃあ、あのときあんなにふらふらしてたのは俺のために飯も食わずにずっと傍にいてくれたから――

「そっか。それじゃ後でお礼しなきゃな……」

正直今でもあの凜華がそんなことをするとは信じられないが……たぶんほんとなんだろうな。ああ見えて案外心配性な奴だし。ちょっと嬉しかったりする。

今頃凜華はぱくぱくおいしそうに飯を食べてるんだろうなあなどと思っていると、焰さんが少し頬を赤くしながら恥ずかしそうに言

ってきた。

「あ、あの。今回は助けにいただきホントにありがとうございました！」

「ああ、いいよ別に。そんなお礼を言われることじゃねえし」

「い、いえ……でも日向さんが助けてくれなかったら私は……」
恐らく死んでいたかも。そう言いたいのだろう。

しかし焰さんはブルツと体を震わせただけでその続きは言わない。

「礼はもういいって。焰さんが今生きているだけで俺たちはやった
かいがあつたつてもんだ」

ホント、風操者のやつを倒しても焰さんが死んでしまつてたら何
の意味もなかった。だから本当に生きていてよかったと思う。

「はい………あと、その……えっと……」

すると焰さんは顔を真っ赤にして手を弄りはじめた。

「？ なに？」

「えっと、その……！ 焰じゃなくて香奈って呼んでください！」

「へ？ お、おう。わかった」

焰さ、いや香奈が珍しく、いや初めて俺の前で大声を出した。

正直こんなに大声を出せるとは思ってなかったので俺はびっくり
する。

一方香奈は、ぱあっと何故かすごく嬉しそうな顔をしている。

（まあ、名前で呼んでもいいくらい仲良くなれたってことか）

これでやつと香奈と友達になれた気がするな。

すると香奈は俯いてた顔をバツと上げ、

「そ、それじゃ香奈って呼んでみてください！」

……本気ですか香奈さん。それすげえ恥ずかしいんですけど。後顔近いです。

「ええ……と」

とはいえ鼻と鼻がぶつかるくらいの至近距離で期待の眼差しで見られちゃ無理とは言えない。

「か、香——」

恥ずかしくなりつつも「香奈」と言おうとしたそのとき、
「日向！ パーティーするわ……よ……」

ドアを勢いよく開いて飛び込んできた凜華はこの状況とただならぬ雰囲気を感じたのか、まるで「部屋を間違えました」かのようにくるっと引き返す。

「ま、待て凜華！ もっと詳しく聞かせてくれ！」

しかしこの俺が超気まずい空間から唯一助け出してくれるだろうノアの方舟をそう簡単に逃がすはずもなかった。

呼び止められた凜華は入っていいのかと戸惑っていたがすぐに気を

とりなおす。

「そ、そう？ それじゃ話してあげるわ」

香奈がどこか残念そうな顔をした気がするがそこは気にしないようにし、凜華の話を聞く。

「えっとね、私達なんだかんだで今回が初めての襲撃任務だったじゃない？だから初襲撃任務成功祝いパーティーをしようかと思って」
凜華はチラチラと俺と香奈を見つつ話す。

「それで、日向の退院に合わせて来週あたりに日向の部屋で料理パーティーでいいかなって聞こうと……」

「ああ、いいなそれ。うん、やるか」

なぜ俺の部屋なのかは抗議したいとこだがこの際しょうがない。

料理パーティー、というところも凜華がいると危ない気がするが……この状況から脱出するためだ。やむをえない処置だろう。

「よし、じゃあ今日は各自自室で料理を考えとくとして解散でいいな？」

「うん」「……はい」と二人の返事を聞きホッとした俺だったが――

今思えばこのとき料理パーティーだけはなんとしても阻止しなきゃいけなかったのだらう。

こうして料理パーティーは開催されそして今、俺は先週と同じく今度は見慣れた天井を見ていた。

「日向起きた？」

「ああ」

どうやら凜華の作ったチャーハン（ほぼインスタントのはずだ）を食べた後、意識を失ってたらしい。

「その……ごめんね」

「へえ……お前が誤るなんて珍しいな」

いつもなら「バカ日向がいけないんでしょ！」とかいつてるのだが。

「う、うるさいっ！ 私もさすがにあればないと思ったから……」

（ああ、もしかして自分で食べたのか、あれを）

ホント、どうやって人を気絶させる料理がつけれるんだろうな。それも加工食品で。

いまだに不思議なのか、「作り方どおりやったのに……何がいけないのかしら」とぶつぶつ呟いてる凜華を横目に苦笑しながら俺はこのいつもの日常に浸る。

（風操者やシステムとかいろいろ危なくてわかんねえことが起きたけど……）

「もう時間が時間だから私はもう帰るわ」

時計を見ると時刻は夜の12時。どうやら香奈はすでに帰ったらしいな。

「ああ。看病ありがとな」

「と、当然ことをしただけよつ。それじゃまた明日」

凜華は照れ隠しか俺に別れの挨拶を言つとすぐさま帰っていった。

——俺は守れたのだ。この日常を。

そついやパーティーにトオル呼ぶの忘れてたなと思いつつ俺はまた寝る。

——そして今こうしていつも日常が繰り返され始めている。

そう。今はそれでいいのだ。今回のようなことが起こったときはそのときどうすればいいか考えればいい。

——今はただこのちょっとした幸せを感じていよう。

明日も早く起きなきゃなと思いつつ俺は静かに眠りについた。

第十四話 「ヒュ、日向さんに……妹が……」

「大丈夫なのか？」

教室に入ると一番ドアに近い席のカルラが声をかけてきた。

加羅崎カルラからさきかるらは下級のときから同級生としてまた、トオルなんかとは違い親友としてよくつるんでいた一人だ。

身長190越えにNBAの選手にも負けない体つきをもち、髪はトオルの染めたのとは違う、地毛の金髪にモデル顔負けのイケメン面、さらに性格まで完璧なのだからあのトオルがカルラを見るたび「チキショー！神は不公平だああああ！」と叫ぶのも納得できる。

ちなみにお父さんが外国人らしいが、カルラと妹さんは日本生まれ日本育ちらしく日本語ペラペラだ。

「ああ、もう大丈夫だ」

ちなみに俺は一日で退院できたのだが医師と狼火から、今週は学園には行かなくていいから体を休めろと言われ、ずっと部屋で暇をもてあましていたので今日はあの事件以来となる久々の登校だった。

「そうか、それはよかったよ。なにやら襲撃任務を受けたとか……本当なのか？」

「ん、まあな」

まるで噂話確かめるかのように聞いてきたカルラに俺は適当に答える。

別に口止めされてるわけではないから普通に「やった」って答えていいのだろうが……なにぶんシステムとかでできる限り触れたくない話題ない。

「一年なのにすごいなあ。まあ、万が一怪我でもしたら僕でも呼んでよ」

「ほんとか。カルラが来てくれるなら怪我したときも安心だな」
ぐっ、しゅぱっ！ と手術前にするあの薄い透明な手袋をはめる医者の真似をしたカルラは、見た目のわりに手先が器用で迎撃科ではなく実は治療科なのだ。

「席につけー」

その後もカルラと世間話に花を咲かせるとチャイムが鳴り担任教師がきた。

「おし、今日は全員きてるな。それじゃ今日のHRは……」

久々のHRにいつもなら欠伸をしているところだが今日はなぜかやる気があった。

いや、別にHRだから特にやることはないけど久々だとなんかワクワクすんだよね――

「うん、これでHRは終わり」

はやっ！ 俺のわくわく返せ！

思わずトオルといることによって鍛えられたツツコミ魂が反応してしまったが、その後トオルに聞くと「いつもこんな感じだぜ」と言われてしまった。

いや、まあ無駄に長い挨拶をする教師とかよりはいいんだけどね。むしろありがたいくらいだね。

しかし今日だけはなぜかがっかりしてしまう俺だった。

昼休み。

朝、凜華が「着替えに戻るの面倒だしこれからは迎撃科の制服で行きましょ」と決めたので飯をゆつくり食べても時間が余ったので先に凜華と迎撃科の棟に向かっていた。

「あんたいきなり動いて大丈夫なの？」

「ああ。医者に駄目とは言われてないしな」

「いや、そういう問題じゃ……」

そういいかけて、まあ、日向に聞くだけ無駄よね。と凜華はため息をつく。

「そういえば今日はこの前できなかったチームごとのブレイカー戦らしいわ」

「やっとブレイカーをつかえるのか」

バーサーカーになったときに一回使ったが、あれはノーカンにしておく。

しばらくして迎撃科棟の前に着くと凜華がなにやら思い出したような顔をしてこちらを見てきた。

「そついえば今日の迎撃科のチーム戦のチームのことなんだけど、四人くらいで一チームみたいよ」

「そうなのか？　じゃあ」

俺と凜華と香奈。

「後二人足りねえや」

「そうね、あと一人は……」

後一人をどうするか考えはじめたそのとき、

「リアがお兄ちゃんと一緒のチームになりますなの！」

「リア！」　「お、お兄ちゃん！？」

いきなりの声に、俺、凜華の順に驚きの声を上げる。

「……日向。あなたに妹なんていなかったわよね」

隣からものすごい殺気が肌にくるんだが。

「えっと、これはだな」

説明しないと殺されそうなのでリアが無駄口を叩かないよう口を片手で押さえながら、ついでにリアにも凜華たちのことを説明する。

加羅崎リア。苗字から分かると思うがこいつは決して俺の妹では

なく、カルラの妹だ。年は15で世間一般ではまだ中学生だ。

髪は肩に被るくらいのサラツとした綺麗な髪だが色は珍しく兄妹で違い、薄い桃色だ。

なので白い天使の羽をモチーフにした髪留めが意外と似合っている。

瞳はカルラと同じでひまわりのような黄色だ。身長は凜華と同じくらいだが所属は迎撃科。

狙撃に関しては天才で、その実力は上級生徒をも凌ぐだとか。

ちなみに俺がまだ下級のとくにリアが髪の色が理由でクラスのやつらからイジメられていたとき、俺とカルラでそのイジメっ子どもをぶちのめしたことがあり、そのときからなぜかお兄ちゃんと呼ばれ懐かれてるいる。

「……と、言うわけだ」

「ふうん。てつきり無理やり呼ばせてんのかと思ったわ」

ひ、酷いな。そんな風に思われてたのか。

「お兄ちゃんはいいい人なの。悪い人じゃないなの。イジメないでなの」

リアに責められた凜華が、むっとなり言い返す。

「そ、そんなの知ってるわよ」

「じゃあ、凜華さんはお兄ちゃんが好きなの？」

「えっ！？　そ、それは……」

「だって好きな子のことイジメたくなるんじゃないの？」

いきなりの質問に顔を真っ赤にしながら狼狽する凜華をリアはまだ問おうとしている。

すると凜華が目で「どうかしなさいよ」といつてくるのでしづぶんは話題変更する。

「ところでリア。なんでここにいるんだ？　お前はまだ下級生徒だろ。下級はまだ普通の授業のはずだが……」

それはどうしたんだ？　と聞く前にリアは俺の腕に抱きつきながら幼い子特有の無邪気な笑みを浮かべて嬉しそうにする。

「えっとね、この前リア、狼火先生にお前はこれから上級生徒と一緒に午後から迎撃科棟にこいつて言われたの。だからこれからはお兄ちゃんと一緒にいられるなの！」

下級生徒が上級生徒と一緒に訓練だと？

そんなこと聞いたこともないが……まさかそれほどこいつは実力があるのか。

しかしそんなことよりも今気になってしょうがないことは、その……このやわらかくてふにふにしてる……胸が腕に当たってるんだが。

しかもこいつ、中学生くらいのくせに案外育ってるらしく、香奈や凜華と比べると、香奈>>>>>リア>>>凜華って感じだろう。

異性を感じさせるその感触にドキドキしていると、凜華がなぜかリアじゃなく俺に睨みつけてきた。

でもってそれを知らぬふりしてるのかリアは「お兄ちゃん」とご機嫌の様子で頭をすりすり肩にすりつけてくる。

さてどうしたものと俺が困惑していると――

「ヒュ、日向さんに……妹が……」

どうやら俺たちを追ってきたらしい香奈が、普段はおどおどしているその顔を驚愕の表情にしている。

（ああ、またあらぬ誤解が……）

結局その後俺は香奈にも凜華たちと同じ説明をするはめになった。

第十五話 「しかしいつたい誰から……？」

結局俺は昼休みをフルに使うことによってなんとか香奈の誤解を解いた。

「それにしても……」

昼休みが終わり生徒が集合するなり狼火は「今日は組んだチームごとに作戦や連携の打ち合わせをしとけ。明日チームごとで対抗戦だ」とだけ言い残しどこかへ行ってしまった。

そして今俺らは迎撃科の棟の一つの個室で陣形を考えているんだが――

「私と日向で前衛ね。香奈は後ろから援護、場合によっては前衛に切り替えてもいいわ」

「ちょ、ちよつと待ってください。凜華さんも中距離タイプなのでは？」

「とりあえずリアは後方から狙撃って決まってるから関係ないの。だからお兄ちゃん遊ばおなの」

「ちょ、ちよつとリア！ そうやってすぐ日向に抱きつかないでよっ」

「そ、そうです。そうやって胸を押し付けちゃ駄目です！ ……リアさんばっかずるいです」

「あれ〜、二人ともリアに嫉妬してるなの？」

……陣形どころか一番重要なチームワークの欠片もねえ。

「……んでだ。お前らは一体何の武器にしたんだ？」
俺はとりあえずまた頭をすりすりしてきたリアを離す。

ブレイカーはその適性率の高さにもよるが変化させる武器の種類は結構あり、やろうと思えばブレイカー一つで戦いの最中に刀だったブレイカーを瞬時に鎖にして相手を捕縛、なんてのもできる。

しかしまあ戦いの最中にそれができるのはかなりの上達者だし、まだ慣れたてのこの時期はメインで使う得意とする武器とサブの武器、計二種類を決め、まずはメインのほうを完璧に使いこなせるようにする。

確かこいつらは俺が入院してる間に迎撃科でブレイカーの起動訓練は受けたはずだ。でもって運のいいことに、ここにいる全員がサブレ持ちだ。

だからこいつらが使う武器——正確にはブレイカーを変化させたときの武器——がすでに決まってるはずなのだ。

「私は弓です。子供の頃弓道を少しやってたので……まあ、他にも理由はあるんですけどね。ちなみにサブは槍です」

弓か。銃が普及し始めてからはあまり聞かないが……まあ香奈にはなんとなく似合っている気がする。

「私はもちろん両短銃。サブは双短剣よ」

「リアはもちろん狙撃銃だけなの！」

「となると狙撃銃だけのリアは後方からの狙撃で援護に決定で……」

今聞いた武器の特性を考えながら陣形を練る。

「とりあえず俺は前衛だとして問題は凜華と香奈だな。普通に考えたら後ろから援護する役目なんだろうが凜華は近距離も得意だしな……」

実際ブレイカーとなると銃だから遠距離、剣だから近距離というわけではない。

あくまで形とおおまかな性質が同じになるだけで、ブレイカーは感情だけでなく所有者の意識ともリンクしてる。

なので剣ならば振るときに刃の部分から衝撃波がでるようにイメージすればリーチ外からでも衝撃波で攻撃できるし、銃も小さくて速い弾やでかくて威力がある弾などを使いこなせば近距離でも十分戦える。

それに凜華は下級のときの対ゼロ距離戦の訓練で、銃を使ってかなりの好成績を残していたはずだ。

そのためリベンジャーのブレイカーを使ってによる戦闘は複雑で、正直やってみない限りベストな陣形はわからないのだ。

「やっぱ俺が前衛で香奈が中距離から。凜華は状況に合わせ前衛にくる、でいいよな？」

「私は日向と一緒に前衛よ。これ命令」

「私は構いません」

香奈も了承してくれ、凜華も……まあ、前衛に変えてやれば大丈夫

夫そつだ。つてか凜華の奴、遂に「これは命令よ」と言つのが面倒くさくなって「これ命令」に短縮しやがった……。

結局決まつた後もまた凜華たちが言い合いを始めたのでそれ以降は進まず、陣形を決めただけで下校時刻となつてしまった。

「はぁ」

俺は凜華と別れ自分の部屋に入るなり思わずため息をつく。

このまま明日の対抗戦をやったら惨敗しそうで、少しおっくうになる。

「どうしようもないか……ん？」

ドアの鍵を閉め忘れたのを思い出して重たくなる足を引きづりながら玄関に行くと手紙のようなものが落ちていた。

「なんだ、これ」

さっき入ってきたときにドアの横にあるポストから落ちたのだろう、踏んでないだけよかったがいまどき手紙をよこすなんて物好きな奴だ。

「しかしいったい誰から……？」

凜華やトオルは下級るときからメアド持ってるし、カルラやリア、香奈もこの前貰った。

となるとそれ以外の人が……。

しかし残念ながら俺は学園ではトオルのように目立つ奴ではないし、最初の頃は適性率が高いつて有名で見知らぬ人から話しかけられたりしたが、それも今じゃほとんどない。

郵便の人が間違って入れたのだろうかとあて先を確認するが住所などはなく『成宮日向』とだけ書いてある。

では誰が？　と思って裏返してみるが差出人の名前は書いてない。

（となると俺の部屋を知ってる奴が直接入れたのか）

そうなるとますます変だ。

俺の部屋なんかは教員に聞けば分かるだろうからこの学園の奴らはほとんど知ることができるが、わざわざ手紙に書いて届ける必要はないだろう。

怪しいな、と思いつつ封を開ける。

『単刀直入に用件のみを書かせてもらう。お前のオリジナルは他のは全てが違う。常識は一切通用しない。惨事が起こってからでは遅いのだ。覚えておけ。それとむやみに使うな。使うときは本当に必要なときに誰にもばれぬように、だ。特に学園にはオリジナルのことを絶対にばらしてはならない。これは忠告ではない。必然だ』

……なにこれ。新手の脅し？

オリジナルってのは……まさかシステムのことか？ しかしそうすると、『特に学園には』の部分ですでにばれてるしな。

色々と考えてみたはものの全く分からず、今日は疲れたこともあってとりあえず手紙は引き出しの中に入れシャワーを浴びることにした。

（それにしても）

シャワーを浴びながらさっきの手紙について考える。

（全然分からなかったけどなんか変な感じがするんだよな。どこか懐かしい感じがするっていうか……）

そう、内容は全く意味不明だったがどこか見慣れている字というかこれは信用できるっていうか……

「だあああ！　こんなよくわかんないこと考えてられるか！」

今日はもう疲れているのだ。こんな不思議な手紙はまた今度元気があるときに考えればいいだろ。

俺はいまだにどこか引つかかるのを振り払うように髪を洗う。

「よし、今日は飯食ったらすぐ寝るぞ」

よく言えば有言実行、悪く言えば都合のいい俺は手紙のことを忘れ今日の夕食をどうするか考えながら湯船につかった。

第十六話 「お兄ちゃん一緒に遊んでようよなの」

「よし、集まったな。では今から対抗戦をおこなう」

まだ朝早い時間で眠いからか、どこか優しげに見える狼火は欠伸をしながら目をこする。

今、俺達は午前だが迎撃科棟にある演習場にいる。今日は休日で授業がなく、午前から所属科別授業なのだ。

そしていよいよ対抗戦が始まるわけだが……

「お兄ちゃん一緒に遊んでようよなの」

「だからそうやってすぐに抱・き・つ・く・なっ！」

あゝ、ずっとこんな調子なわけで、結局作戦とかも立てられなかったし、これじゃ一回勝てたらいいくらいだし、まじ凜華さんお願いだから俺を睨まないでください。まるで俺がさせてるかのような目つきですけど俺は全く関係ないです。

（ああ、大丈夫なのか……これ）

俺は一人気づかれぬようため息をつく。

そうこうしてるうちに狼火の話は進み、対抗戦の説明になっていった。

「それで今から簡単な説明をする。まずこれからチームごとにリーダーを決めてもらい、私に報告してもらおう。対抗戦ではそのリーダーが戦闘不能になったら負けだ。ちなみにリーダーの目印はないが誰がリーダーなのかは戦えばわかるだろ」

そうか、リーダー以外は戦闘不能になっても負けにはならないか

ら必然的にリーダーはあまり戦闘に参加しない奴になるのか。

年下に抱きつかれ、幼馴染に睨まれてる俺をよそに説明はさらに続く。

「それと今回はこの演習場のフィールドで行うわけだが、このフィールドはアグレッションと戦うときを再現している。なのでキミ達には一刻も早くこのフィールドに慣れてもらいたい」

くいつと狼火が顎で指した方をみると、ところどころに障害物があるかなりでかいフィールドがあった。この建物自体はコンクリートでできてるのに、フィールドは下が土のところをみるに、かなり本格的なつくりらしい。

「ではまずはAチーム。成宮日向、杉原凜華、焰香奈、加羅崎リアは私のところにチームリーダーの報告にこい」

だいぶいつもの調子になってきた狼火に呼ばれ、ようやくAチームであることとリーダーをまだ決めてなかったことを思い出す。やはり避けるのが得意な奴が適任なのだろうか。

「なあリーダーどうする？」

「日向やってよ」「日向さんお願いします」「お兄ちゃんに決まってるなの」

……なんてこういうときは息ぴったりなんだよ。

こうして三人から同時にご指名を受けた俺は断れるわけもなく、肩をすくめながら素直に狼火に報告をしにいった。

「日向は刀にしたのね」

全チームの報告も終え、俺たちは第一試合だったのでフィールドでブレイカーを起動させると、横からひょいっと凜華が覗き込んできた。

ちなみに普段のブレイカーはスタンモードという言わば危険防止のための機能が働いており、仮にこの刀で相手を切りつけても怪我はほとんどない。

代わりに痛みに関しては相当なものらしい。

「ああ」

まあ、刀にしたというよりは刀になったと言ったほうが正しいかな。

俺の専ブレはバーサーカーシステムに対応させるため適正率の上昇を最重視しているため、その代償として多重変化機能——ようは状況に合わせて武器を変えることができない。

そしてこの前のシステムが発動したとき無意識のうちに刀をイメージしてしまったので刀以外には変化できないのだ。

小さい頃に父さんに刀の扱い方を教えられてたから運がよかった。これが槍だとか弓だったら全く使いこなせなかっただろうしな。

狼火は各自ブレイカーを起動したのを確認した後、ホイッスルを口にもっていく。

「よし、それでは第一試合Aチーム対Bチームを始める。スタート！」

遠くからでもはつきりと聞こえる掛け声と、ホイッスルの音が鳴り、沈黙していた室内が声援で一気に活気づく。

（敵は全員近距離系か）

開始とともに陣形を組みながら突撃してくるBチームは、種類こそは違うが全員近距離武器だった。

こちらに対抗するため俺、凜華、香奈の順に走る。ちなみにリアには開始直後から狙撃ポイントの確保に向かってもらっている。

「よし凜華、銃で牽制しながらリーダーを探し出してくれないか？」
俺は刀を構えつつ、すぐ後ろを走る凜華に指示を出す。

恐らく戦闘に参加しても他の奴より避けることを考えているはず。銃で牽制してればおのずと回避がメインになって分かるはずだと思う。つての提案だったのだが……

「なに弱音いつてるのよ。そんなめんどくさいことしなくても全員片っ端から倒せばいい話じゃない」

あ、あれ？

「別にあんな奴ら私と日向がいれば敵じゃないわ」

黙っている俺がさっきの言葉で傷ついたと思ったのか少しそっぽを向きながらフォローの言葉を付け加える凜華に、俺は返す言葉が見つからなかった。

普通に考えてもみる。

援護系武器を使わないってことは敵は連携に相当自信があるはずだ。それに連携どころか作戦すら立てられなかった俺たちが真正面から戦っても勝てるはずがない。

リアの援護があれば話は別だがまだあいつは狙撃ポイントを探してるだろうから早くても後2分はかかるはずだ。

そう、常識で考えれば開始早々から近距離ができるのは俺と凜華だけなのに手当たり次第に戦うなんて……死亡フラグだな。

だが凜華が一度言ったことをやめるわけがなかった。

「さあ、いくわよ！ 香奈、援護お願い」
「任せてください」

ああ、終わった。

そのとき確かに俺はそう思った。いや、ここにいる誰もがそう思うはずだ。

しかしこの後俺は、こいつらのことをまだ何も知らなかったのだということをお願いしられることになる。

第十六話 「お兄ちゃん一緒に遊んでようよなの」(後書き)

次回、試合は思わぬ展開に…!?

第十七話 「けど首なんか撃ったら即死じゃ——」

「くらえっ」

敵チームの一人が槍で突撃してくる。俺たちはそれを左右に分かれるように回避。

凜華はその勢いで回転し、反撃に移る。

それは仲間の俺が見ても魅入るほど無駄がなくスムーズな動きだった。学年零距离戦成績上位の名は伊達じゃないってか。

さすがともいえる動きで攻撃の態勢になった凜華の銃口から立て続けに銃声が鳴る。

ちなみに弾はエネルギー弾のようなもので威力は適正率と感情によつて変化する。普通の銃とは違い弾切れが起きないのがブレイカーの利点だ。

「陣形を崩すな！ 作戦通りいくぞ」

凜華のすばやい反撃に崩れかけていた陣形が指揮官らしき男の一言で持ち直す。

たつた一言で立て直すとはやるな。

だが……

「それじゃ自分がリーダーだと言ってるようなものだ——」

刀を構え凜華や香奈にも伝えようとしたそのとき、予想外のこと起きた。

そう、陣形を持ち直した三人が凜華たちを無視してまるで狙う敵はただ一人とも言つように俺を包囲したのだ。

(な……？ まさか俺がリーダーだとバレたのか？)

助けを呼ぼうにも凜華はさっき突っ込んできた槍の男に足止めを食らっている。

まさかの展開。万事休すか……。

敵三人に囲まれた俺が少しずつ後退すると先ほどのリーダーらしき男が武器である鎖を構えながらニヤリと不敵に笑う。

「くくく。成宮日向、今日こそ逃がさないぞ」

「なぜ……」

俺は鎖の奴とは違って特段にリーダーみたいな行動はしていないはずだ。

それなのに何故俺のことが――？

「なぜ……だと？ 分からないとは言わせないぞ！ いつも杉原さんや焰さんと一緒にいるくせに……あげくの果てには年下美少女を入れてハーレムチームをつくるだど！？ ふざけんな!!」

杉原……ああ、凜華のことね――って俺を狙う理由はそれかよ！
いや、確かに中学生入れたけども！

「俺たちには女子一人もいないってのに……」
女子いないとかそんなこと知らねーよ。誘えないお前らが悪いだろ。

「どうせ誘えないお前らが悪いって思ってたんだろ？ けど、そんなことしたら俺の彼女が嫉妬して俺が怒られてせっかく誘った女の子をむりやりどけて自分がチームに入るって言い出すと思ったから結局誰も誘えなかったんだけど、ってかそもそも俺の彼女が二次元なにが悪いんだよチキショー！」

うん。何言ってるが全く分からないが、とりあえず妄想と現実を区別できないトオルみたいな痛い子だってことは分かった。

「とにかく貴様は男の敵だ。今こそ俺たちの気持ちを思い知るがいい！」

突っ込みたい気持ちを必死に抑えつつ、発狂し始めたアホどもに一応講義してみるが、やはり俺の話を聞くつもりはないらしい。なぜなら奴らの目はすでに空腹のときに見つけた獲物をみる野獣の目と化しているからだ。

あきれていた隙に背後にも回り込まれ、逃げ道がなくなったそのとき、

「私を忘れてもらっては困ります！」

香奈の声とともに、突如後方から炎を纏った矢が飛んできた。そのまま矢は地面に刺さり、矢に纏っていた炎がまるで生きているかの如く敵を寄せ付けぬ壁のように俺の周りに広がる。

突如現れた炎。そしてそれがまるで操られるかのように動いた。

これはまさか――

「香奈、お前もしかして」

「……はい。私は火の超能力者なんです」

弓を構えていた香奈は驚愕している俺と目が合つと、なぜか申し訳なさそうに目を逸らす。いつもの黒い綺麗な髪は燃えるように深紅色になっている。

まさか香奈が超能力者だったとは。

ブレイカーを使うと身体能力が大きく上昇する人はよくいる。

だが超能力者は本当にごく稀で、その確立は十万人に一人と言われている。

超能力者は人によって能力が異なるが、能力の限界はほとんどないため人によって違うが、だいたい超能力者の一人の力は普通のリベンジャー二十人ぐらいに相当するらしい。

そして香奈が言っていた弓を使うもう一つの理由。

これは憶測に過ぎないが香奈の能力である「火」を一番活かせるのが弓なのだろう。

先ほどのように矢に炎を纏わせれば矢が外れても炎を遠隔操作することで追撃ができるからな。

「くそ、まさか超能力者がいるなんて」

香奈が作った炎の壁によって俺に近づくことができない。

これは敵も予想外だったらしく、動揺を隠せていない。

「隙だらけよっ！」

リーダーらしき男が一時撤退をかけようとしたその瞬間、凜とした威勢のいい声とともにその両手からエネルギー弾が発砲される。

「ぐあ！」

その射撃は正確に敵一人の足と肩に命中し戦闘不能にさせる。

「なら私もっ」

さらに俺の周りを囲んでいた炎が収縮、火の玉となって敵に襲い掛かり、また一人戦闘不能になる。

「日向、大丈夫？」

瞬時に敵を戦闘不能にさせた少女——凜華は、敵が反撃してこないのを確認すると一目散に俺のところに駆け寄ってきた。

「おかげで大丈夫だ。それよりお前は……」

「ああ、私なら全然平気よ」

少し安心したらしい凜華の後ろを見てみると——さっきの槍の男が仰向けになって倒れていた。どうやら気絶しているらしい。

それにしてもこいつら……一人は超能力者だわ、一人は同学年の

男子を二人も倒しちゃうわ……強すぎだろ。

正直俺がいなくても勝てるんじゃない？

さすがにこのままでは俺の立場がないので、最後に残った敵リダーに刀を向ける。

「さあ、後はお前一人だ。覚悟しろ——」

「な、なんでこんな強いんだよぉ！」

「えっ？」

最後に俺がかつこよく締めようと思っていたが、セリフの最中に敵は予想外にも逃げた。

いや、まあこんな化け物ぞろいじゃそうなるのも分からなくもないけど逃げんなよ！

「くそっ、まちやがれ！」

すぐに俺と凜華は追いかけるが恐怖に陥った人間は速くなるのか、全然追いつけない。

香奈も後ろから矢で狙ってみてはいるようだが、やつは武器である鎖を体に巻きつけるようにして盾代わりにされ、防がれている。

これ以上追いかけるのは無理か。

俺と凜華が諦めかけたそのとき、どこから銃声が鳴り、同時に男がその場に倒れる。

「な、なんで？」

ビィーと試合終了のホイッスルが鳴り、おおおと歓声が沸くが、当の本人の俺たちは何故倒れたのか全くわからない。

それは凜華も同じだったようで、俺と凜華はブレイカーを停止させつつ男に駆け寄る。

すると男の首の辺りに撃たれたような後があった。

「これって、まさか……」

「リアの狙撃銃の弾だわ」

「けど首なんか撃ったら即死じゃ——」

「掠めただけだから心配ないなのー」

ぎゅっ。

狙撃したところから走ってきたリアが俺の背中に抱きついてくる。

「掠めるって——こいつは走ってたんだぞ？　しかも鎖が邪魔で当たらないんじゃない」

「走っていいようがリアには関係ないなの。鎖だっていくら巻きつけようが鎖の隙間を撃てば当たるなの」

鎖の隙間って……まさかあの小さな輪の部分のことか？　だがいくらなんでも走ってる奴にそれを、しかも掠めるだけだなんて――。

だがそんな俺の気持ちを讀んだのか、リアは満面の笑みで、

「弾が細くなるようイメージすればできるなの。リアに不可能はないなの！　お兄ちゃん、リアのこと褒めてなの」

これが下級生徒にして学園一とも噂されている天才狙撃手の実力なのか。

もはや何でもありだなと思いつつリアの頭を撫でてやろうとする
と……

「ヒュ、日向。私も二人も倒したんだから褒めてよね」

「え？」

「な、何度も言わせないでっ！　これは命令よ！　ほら、早く」

顔を真っ赤にして怒鳴る凜華がおかしく、笑うのを必死に堪える。
すると、

「えー、リアが先なの」

「む、私が先よ」

「リアなの！」

「だから私よ！」

……また喧嘩か。この二人は初めて合ったときから何故か仲が悪い。
い。

「あ、あの……せつかく勝ったんですから喧嘩は……」

深紅から黒に戻った髪をなびかせながら、喧嘩を止めに入る香奈に二人を任せ俺は一人、先ほど思ったことの間違いを訂正しながら
むなしくため息をつく。

俺がいなくても勝てる、じゃない。

勝つために俺はいてもいなくても変わらない、だろ……。

第十八話 「キ、キス……するんでしょ」

結局この日はもう俺たちの試合はなく、他チームの試合を観戦するだけだった。

そしてそれもさつき終わり、帰っているところだ。

「ねえねえこれからどこか食べに行きたいなの」

リアがおなかに手を当てて、アピールしてくる。

「そっぴいやもう昼時だよな」

今日のように午前から科目別授業があるときは大抵午前には終わる。いつもはこの後一人で家で昼食を作っていた。

「それじゃワックはどう？」

「あ、いいですね。私も久しぶりに食べたいです」

「たまには外食もいいか。リアもそれでいいか？」

「リアはお兄ちゃんといければどこでもいいなの」

「それじゃさっそく行きましよ。時間がもったいないわ」

自分の案が通ったからかご機嫌な凜華を先頭に、俺たちはさっそくワックへ向かった。

ワックとは『W』の看板が目印のファーストフード店だ。ポテトが上手いことでも有名でいつも人々で賑わっている。

そしてワックに行くことになってからおおよそ十分後、俺たちは有名店の休日の昼を舐めていたことを知る。

「なっ……!!」

「こ、こんなに人が……」

さすがに空いているとは思っていなかったが……まさか三百席はある席が満席とは。ワック恐るべし。

「こりゃ店内で食べるのは無理だな」

半分諦め気味で呟くと、リアが俺の服をつかみながらもう抗議してくる。

「えゝ！ でもリアはワックが食べたいなの」

「そうね、私もここまできて食べれないのはごめんね」

どうやらこいつらにはワック以外を食べに行くという考えがないらしい。

だがそれは俺も同じだったので結局持ち帰りにすることになった。

幸いなことにレジはそれほど混んでなく、五分くらいで買っことができた。

そして多数決の結果、何故か俺の部屋で集まって食べることになり、今こうして四人で机を囲んでいる。

「それじゃいただきますなのゝ」

四人で食べるには少し小さいテーブルを囲むように座り、さつそくりアが袋から自分の分を出して嬉しそうに食べる。凜華や香奈もリアに続けて挨拶をしてから各々食べ始める。

「んゝ、やっぱりワックはおいしいなの」

「そうね、久々に食べると結構いけるわね」

「あ、香奈ちゃんのナゲットいただき〜！」

「ちよつとリアさん！ 人のをとっちゃ駄目ですよ」

いつもは一人で静かに食べているのだが……たまにはこういうみんなで喋りながら食べるのもいいな。

そんなことを思いながらポテトをつまんでいると右肩をちよいちよいつと引つ張られた。

「なんだリア…… ってなんでポテトくわえてんだ？」

するとリアは指でくわえているポテトを指しながら、

「ふいっしょにはへよなの」
たへよ

あー、なんだ。ようするに恋人がよくやるポッキーゲーム（棒状の食べ物をお互い端っこをくわえて同時に食べていく食べ方）をしるっていうことが。

くわえているからか、言葉が八行発音になっているリアを見ながら自分なりに解析する。

「…… ってなんでだよ？」

「ごほうびなの」

「ご褒美？ …… ああ、そういえばBチームとの試合が終わったときにそんなことを言ってたな。」

頭の中で試合に勝った後のシーンを再生していた俺はしかし眉を顰める。

「でもさすがにこれは……」

これではリアへじゃなくて俺へのごほうび……こほん。

「とにかくだめだ」と言うとりアは「むむむう」と唸ってから一旦くわえていたポテトを食べ、頬を膨らませる。

くわえているのに疲れたんだな。

「お兄ちゃん、いいよって言ってくれたのに……」
「ちよつと日向ホントなの？」

リアの言葉に左から凜華が反応する。その目がどこか蔑んでいるように見えるのは気のせいだろうか。

しかしすぐに顔を赤らめ、その蔑んだ目をなぜかキョロキョロさせ始める。

「どうした？」
「だって、それって最後に……キ、キス……するんでしょ」
「し、しねえよ！」

しかもなんで「キス」のところで一瞬黙り込んだんだよ！

「別に食べるだけだから心配ないなの。……まあもしかしたら最後にリアとお兄ちゃんの唇が——」

「お前は余計なこと言うな！」

リアのどこか期待のこもった目から目を逸らしつつ突っ込む。

俺にはこういう積極的なタイプの女の子は合わないみたいだな。いつも気づけば相手のペースに引きずりこまれてしまっているからな。

「日向……あんた、やっぱり最初からそれが目的で……」

……まさかずっと一緒だった幼馴染にすらこんなことを言われるとは。

女子二人に振り回され半泣きになる俺をよそに顔を真っ赤にする凜華をみて何を思ったか、リアはいきなり「くふふ」と笑う。

「もしかして凜華ちゃんもキスしたことないなの？」

「キ、キスくらいしたことあるわよ!」

リアのデリケートのない質問に、凜華は目を明後日の方向にうるさせながら反論する。

というかしたことあるんだ。

少し複雑な気持ちになる。

「それじゃリアが誰とキスをしたって問題ないなの。さ、お兄ちゃん早くやるお？」

半分無理やり凜華を納得させたリアはまたポテトを一本くわえながらこちらに顔を近づけてくる。

ちなみに香奈はというと「キス」というセリフが出た瞬間からなぜか固まっている。

「あ、ああ」

できれば今すぐにでもやりた……くないのだが、恐らくリアは俺がするまで絶対あきらめないだろう。

(まあ一本だけならご褒美として)

リアの根気に負けた俺は、チラチラとこちらを見てくる二人の視線を感じながらリアがくわえているほうとは反対の端っこをくわえる。

（うおっ、顔が近い……！）

予想よりも全然顔の距離が近く、下手に動けば鼻と鼻がぶつかってしまいそう……自分の顔が赤くなってくるのがわかる。

「ほあごまいくよ」

リアの合図とともにお互い同時に少しずつ食べていく。いや、これはかじっていくという表現のほうが正しいだろうか。

開けた窓から吹いてくる風で、リアの綺麗な髪が俺を優しく撫でるように包んできて、この瞬間だけ俺の中の妹みたいな女の子、というリアのイメージが“可愛い女の子”だけを残して崩れていく。

そして当たり前のことだが、同じものを両端から同時に食べているのでさまざま距離は縮まっていき、リアの甘い吐息が顔にかかってきて——心臓の音がさらに加速したことは言うまでもない。

そしてさらに距離は縮まり、もう唇と唇の距離はほとんどない。

今までこんなに近くで見たことがなかったから気づかなかったが、どうやら女性の唇というのはいつも妹みたいに接してきた女の子ですら、異性を意識させるものらしい。

色っぱさを感じさせつつも、まだ幼い少女の健気さが残るその唇は見た目以上に弾力性がありそうで俺の中の好奇心をくすぐる。

(いっそのまま勢いで……)

俺の中にドキドキしているとき特有の熱い不思議な感覚が広がる。

そしてリアの唇がどんどん俺の唇に近づき……ついに触れるか触れないかの限界のラインに到達したそのとき、

「そ、それ以上は駄目えええええ！」

見るに耐えなくなつたのか、今まで以上に顔を真っ赤にした凜華と香奈がまるで倒れこむように俺を押す。

いきなりの不意打ちにいきなり現実に戻された俺はその勢いのまま何かの角に頭をぶつけ（あれ、これなんか既視感）——

「む、後少しだったのに……」と言つリアの残念そうな声とともに意識は消えてった。

第十九話 「あううう……こんなんでも明日ちゃんと話せるかなあ」

「まだ起きないのかしら」

いまだ寝ている日向のベッドに腰をかける。

いつもなら無理やり起こしたりもするのだが……なにぶん、こうなったのは自分の責任でもあるためさすがに起こせない。

「ひまだなあ」

少し宙に浮いた足をぶらぶらさせながら凜華は呟く。

先ほどまでは日向をベッドに運んだり、ワックのごみの片付けをしたりと忙しかったのだが……今はもう何もない。香奈やリアは雨が降りそうだから干してある洗濯物を取り込むために、ついさつき帰っていった。

ちなみに私は今日は部屋の中に干しておいたので急いで帰る必要もない。

「……やっぱ謝らなきゃだめよね」

いくら日向とリアがキスしそうになったといえどあそこまで強く押す必要がなかったのは分かっている。

でもあのとき、日向がドキドキしているのがなんとなくだが分かっってしまったとき、なぜか胸がいきなり痛くなって……気づけばこんなことになっていた。

「いや、そもそもリアがご褒美とかいいだすのがいけないのよ」

無論、それを承諾日向も日向だ。

いつもは真面目なのに、たまに変態の部分がでてくるのだからだらしい。

そもそもたかがご褒美でなんであんな――
「あれ、そういえば私にもご褒美あげるとかいつてなかったっけ」
確かあの時、リアに続いて私もと言ったら「いいよ」と言っていた。

「……けどこんなことしておいてご褒美くれ、はないわね」
もしそんなことを言ったら図々しい奴だと思われるだろう。
少なくとも私はそう思う。

そのときふと、凜華の頭に先ほどのリアの言葉が思い浮ぶ。
「キスしたことあるか――ね」
そんなこと、したことあるわけない。あのときは勢いであるとい
ってしまっただが。

日向に男たらしだと思われたらどうか。
解けるはずもない心配をしていると、またふと頭に名案が浮かぶ。

「そうだ！ 日向に今回のことも含めてお礼を込めて……そ、そう、
お礼のためにキ、キス……すれば……」
自分へのご褒美にもなる。

そこまで言おうと思ってたが、いざ言葉にすると恥ずかしく、語
尾が自然にフェードアウトしていく。

（けどやっぱりこれしかないわよね）

どこから現れたか、変な使命感を感じた凜華は拳をぎゅっと握り、
チラッと日向をみる。

どうやらまだ寝ているらしい。

「寝ているすきになんて卑怯な気もするけど……ファ、ファーストキスあげるんだからこのくらいは当然よね」

ぶつぶつと呟きながら腰掛けていたベッドから一旦立ち、日向に覆いかぶさるように乗る。

一人用なのか、体重を移動させるだけでベッドがキシキシ鳴る。そのたびに日向が起きないか心臓がバクバク——いやドキドキしてくる。

こんなに心臓が張り切れそうになるのは初めてだ。

この前のジャスティス戦のときだってこんなには緊張しなかった。

一歩が重い。

息がしにくい。

心臓がのどから出てきてしまいそうだ。

自分でも顔が熱をもっているのがわかる。

日向に近づくたびに胸がギュッと締め付けられる。

最近よく感じるこの不思議な感じはなんだろう。

このままだと生きている心地がなかったので日向のおなかにゆっくり手を置いて少し休憩する。

そういえばこの体勢のことを日向に取り付く変態工武科が「これ

はマウントポジションと言って格闘技の技名であるのだが、それ以外にもう一つ意味が隠されており」と途中から聞く気も失せるくらい熱く語っていたが……どういう意味なのだろう。

ふと頭に浮かんだどうでもいい疑問を振り払い、心臓が落ち着くのを待つ。

だいぶ落ち着いてくると、なぜか今まで日向にやったこと（ぶつた記憶がほとんどだが）を思い出していく。

（私……今までずっと日向に迷惑かけてたわね）

おなかにおいていた手を日向の頭の横に置く。

そしていまだに寝ている日向の顔を優しく引き寄せながら、顔だけでなく体ごと日向に近づいていく。

（でもずっと怒らないで、笑っていてくれたのよね）

二人の距離はもう鼻と鼻が触れるほどになり、凜華の吐息が日向にかかっていく。

（たぶんこれからもそんなあなたに甘えて迷惑をかけていくけど）

今までにないくらい気分が高揚してきて目がうつとりしてくるのが自分でも分かる。

「ありがとう日向。これからも迷惑かけるけどよろしくね……」

今感じている、ずっと前に日向に対して生まれたこの不思議な気

持ちにはいまだによくわからないが、今はお礼を言えただけでも良しとする。

自分で納得した凜華はそのまま自分の唇をもう一つの唇へ――

「んん……」

「やっと起きたのね」

目が覚めて肩を伸ばしながら声のするほうを見ると、

「って凜華!？」

「な、なによ。私がそんなにおかしいの？」

「い、いや。そういうわけじゃないんだが……」

まさかいるとは思ってなかったのでびっくりした。

(いや、驚いた理由は夢の中で凜華が……)

しかし夢は夢。現実には現実。

これくらいは区別できないとトオルと同類になってしまう。

そう、現実の凜華があんなことするわけないのだ。

「それよりももう大丈夫なの？」

「ああ。今はもうなんともないぜ」

「そう、よかった」

始業式の朝もそうだったが、いつもは俺に容赦なくぶつたり殴ったりしてくるくせにこういうときはものすごい心配してくる。

まあそれが凜華のいいところでもあるが。

凜華は俺に大怪我はないかを確認したかったようで、

「それじゃ私はもう帰るわね」

「おう。それじゃまた明日な」

「うん。また明日」

そういつもどおりの別れの挨拶をして部屋をでていく。

ドアが閉まる音がして、ふと先ほどの夢を思いだす。

「それにしても……夢の割には妙にリアル感あったなあ」
起きたとき凜華が横にいて驚いた本当の理由。

それは凜華が俺にキスしてくる夢を見たからだ。

「まあさすがにあれが現実のわけないけどな」
俺は夢にしては珍しく、まだキスされた感覚が残っているほおを
名残惜しそうに撫でた。

「バレてないよね」

日向の部屋を出てドアを閉めたとたん、凜華は両手で顔を隠しながらしゃがみこむ。

頬がすごく熱い。熱でもでているのかと思うほどだ。

日向の前では極力普通に振る舞ったつもりだが……胸のドキドキ
は止まらなかったし、日向におかしな目で見られなかっただろうか。

「キス……しちゃった」

相手は寝ていたが。

「あううう……こんなで明日ちゃんと話せるかなあ」

次から次へと不安が押し寄せてくる。

このままでは頭がオーバーヒートしそうだったのでほかの事を考える。

すると自然と人差し指が唇をなぞった。

あれは夢ではなくて現実なんだということを確認するかのように唇を何度も、何度も触る。

あの時、日向の唇に触れそうになったとき、なぜか急に「これが日向にとってファーストキスだったら？」という罪悪感が浮かび……気づけば唇ではなく頬に触れていた。

確かに日向がまだキスしたことがないのなら唇にしなくて正解だったのだろうが……それでもただ単にそれは私が怖くなったからだろう。

何が？ と聞かれてもわからないが……とにかく日向の唇にキスする度胸が私にはなかった。

その事実には少しショックだが——それでも、あの頬にしていたほんの数秒。

誰にとっても時間は平等で止まってはくれないが、あの時だけはたった数秒が永遠にも感じられ、すごく恥ずかしくて、でもそれ以

上に幸せて……

「ま、いつか」

だんだん自分でも恥ずかしくなってくる考えを半ば強引に切り上げて立ち上がる。

とにかく、今はこれでいいのだ。

日向の唇にキスする勇気がなくても。

まだまだ時間はある。

なにも急ぐことはないのだ。

たとえ今その勇気がなくてもいい。何年、何十年とどんなに長い時間をかけてでも……

「日向は絶対、わたしのものにするんだからっ！」

これは命令！ と誰に言うでもなく空を見上げて言った凜華は神様にむかって宣言してるようにも見えた。

だから今はこの幸せをかみ締めていよう。

先ほどよりも一段と軽くなった足取りで凜華は自分の部屋へと帰る。

——そう、まだ時間はある。だがしかしそれでも今日のよう
な日々が続くとは限らない……。

第二十話 「アグレッッシン迎撃戦……！！」 (前書き)

えー、20話書いている途中に気づいたのですが……

設定に一つ、重要なことをかきわすれていました。

本当に申し訳ないです><

しかしこれを知っておかないと三章の内容が恐らくわからなくなると思うのでここにその内容を書いておきます

以下第一話より引用

通称「リベンジャー養成学園」と呼ばれるこの学園は、日本の首都東京から直線上に位置する海の上に作られた人工島に建つ、リベンジャー育成機関だ。

そもそも人工島は「近未来都市の試験運用」という名目で作られた超大型都市だ。

アグレッシンのときの戦闘時に備え、地下シェルターなどもあるかわりに「近未来都市」ということで最近の流行の店やデパート、遊園地に繁華街とんでもある。さらには本島とは海中電車によって繋がっているので、非常に住みやすいのだ。

なので学園関係者以外にもここに住む一般市民や観光客なども大勢いる。

簡単に言えば学園があるところは東京から直線上にある島で、学生や教員以外も普通に暮らしている。ということですよ。

こんな初歩的なミスをしてしまい本当に申し訳ないです><

第二十話 「アグレッシン迎撃戦……！！」

「日向、早く行くわよ」

「今行くからちよつと待ってくれ」

玄関からかかる声に教科書などを鞆に詰め込みながら答える。

初めての対抗戦の日からもう二週間もたった。

春の象徴である桜も今はもう散ってしまっている。

花は散ったときが一番きれいだ。なんて誰かが言ってたがこうしてみると、やはり咲いているときのほうがいいと思う。

その後も週末のたびに対抗戦はあったが俺たちの試合はなかった。なんせ上級一年だけでもおよそ百人はいるのだ。それを5人のチームで分けたのでは、また自分のところに試合が回ってくるまでは相当長い。

狼火もさすがに一チームの人数を増やすことを検討しているらしい。

ちなみに観戦するだけではつまらないと言うことで俺たちはその間ブレイカーの訓練をし、その際二種類目の武器の設定として凜華は双手剣、香奈は槍にした。

「待たせたな」

「別に平気よ。それよりも早く行かないとみんな待ってるわ」

手前でスクールバッグをぶらぶらさせて待っていた凜華と一緒に急いで階段を下りる。

ちなみに凜華は二週間前からずっと機嫌がいい。

最初の何日かは何故かこつちをチラチラみては顔を赤くしたりしていた。

最近じゃいつも笑顔のような気がするし、あの日から今日まで、なんと一度も怒っていない。

しまいにはこうして待たせても文句一つ言わないときた。

（そんなに勝ったのが嬉しかったのか……？）

無論、凜華が上機嫌でいるぶんには俺としても大助かりなのだが、ここまで優しい凜華は違和感があるというか……正直気味が悪い。

まるで何か企んでいるようで怖いとも思ってしまう。

「あ、日向さんおはようございます」

「お兄ちゃんおはようなの！」

俺の脳の数少ない精鋭部隊が『では凜華はいったい何を企んでいるか』という新たな疑問にぶつかっているとホールのほうから香奈とリアの声が聞こえた。

「おう。待たせて悪いな」

今俺たちがいる寮の玄関の前に作られたこのホールは意外と広く、こうして他の奴らと待ち合わせするのに適しているのだ。

「成宮君も杉原さんもおはよう」

「お、日向おはよっす！」

「カルラおはよう」

「ちょ、俺は無視ですか日向さん！」

爽やかな笑顔を浮かべながら丁寧に挨拶してきたカルラといつもどおり挨拶を交わす。

ちなみにいつも調子乗っているアホもこれまたいつもどおり無視

する。

上級生徒となっただけからは俺たちは各科で用事がない限り毎朝こうしてホールで待ち合わせてから学園に向かうのが日課となっている。

「そっぴえば日向、今日の一時間目の数学って宿題あったわよね。ちゃんとやった？」

「げっ、まじかよ。俺なんにも聞いてなかったからな……」

「もう、しょうがないわね。教室着いたら私のノート見せてあげるわ」

「ホントか凜華。恩にきるぜ！」

「し、仕方なくよ！ 勘違いしないこと！ これ命令！」

「？ おう」

なにをどう勘違いするのだろうかかわからないけど返事はしておく。

すると俺の横を歩いていったトオルも焦った顔になる。

「やべえ、俺もやってないや。杉原さん、もしよかったら俺にも……」

「無理」

「即答ですか！？ てかなんで日向はよくて俺はだめなんだよ！」

「だってあんた、どうせ知ってたけどめんどくさくてやってこなかっただけでしょ」

断られた憂さ晴らしにか反撃にでようとしたトオルにすかさず凜華が釘を刺す。

「くっ……ちなみにカルラは……」

「やってないトオルくんが悪いと思うよ」

「ぬぐっ！」

頼みの綱であるカルラにも断られ、今度は本気で焦った顔になる。

まあこいつが宿題をやつてこないのは毎度のことです。毎回誰かに写さしてもらっていたのだ。

だからいくら優しいカルラといえど断るのも無理はないだろう。

「お、俺先行くわ！」

「おう。写すんじゃないでちゃんとして自分でやれよ」

さすがにまずいと思ったのか、タオルは額に冷や汗をかきながら一足先に学園へと走っていった。

とはいえあいつの学力じゃいままから授業までに自分でやるには時間が足りないことは明白で、走るだけ無駄なのだが……あえてそこは言わない。

そもそも自業自得なわけだし、ざまあみろってもんだ。

「……あんたも私に見せてもらうんだから人のこと言つてられないわよ」

「わ、わかつてるって」

俺の心を読んだらしい凜華からあきれたため息と共に冷静な突っ込みがきて、乾いた笑いがでる。

「そんなお兄ちゃんにリアが元氣パワーあげるなの」

するとリアは俺が落ち込んだと思ったのか（いや、たぶん抱きつく口実がほしただけだろう）ここぞとばかりに、いつものように中学生の年にしては成長しているその胸を押し付けるかのように腕に抱きついてきた。

「ちょっと、リア！ 日向に抱きつくなんて何回言えばわかるの！」

「違うなの。これは抱きついてるんじゃないでお兄ちゃんに元氣を分けてるだけなの」

「どうみても抱きついてると思います……」
「成宮君って人気者だよな」

そんなリアにこれまたいつものように凜華や香奈が反応する。
しかしリアが抱きつくのは今までも数えるのも嫌になるくらいしてきてるので、俺含め他の奴らもやめさせることは半分諦めている
感がある。

ってか妹が自分の友達に抱きついていてるってのに「人気者だね」
って……カルラってすっかり者に見えて案外抜けているな。

ジャステイスの事件から約一ヶ月。

良か悪か、時の流れは思っているより早いもので、始めは遠慮気味
というか気を遣っている部分があつた香奈も、最近じゃ素の自分
を出していられるようで俺たちも一段と賑やかになった。

こうしていつものように過ごすだけでも一緒にいて楽しい仲間と
いうのは生涯を通してでもそうはいないと思う。

（なんだかんだ言っつていつもどおりが一番だよな）

最近たまにそんなことを思うようになった。

これを凜華とかに話したら「年寄りみたいね」って笑われるだろ
うな。

「なにぼさつとしてるのよ。学園着いたわよ」

考えに浸っていたせいかな、俺は凜華の声でようやく自分が校門の

前で突っ立ってしまったのに気づく。

「わりいわりい、まだ寝ぼけてたわ」

「もうだらしのないわね」

「日向さんってたまに抜けてるところありますよね」

言い訳をしながら俺は後ろを向いて待っていてくれる凜華たちのところへ軽く小走りで向かった。

「この後もまた今までと同じ、いつもどおりのことをしていく――はずだった。」

「ああ……やつと飯だ」

授業も一段落終わりこの後の昼休みの弁当を食べる準備をしているとトオルが疲れた右手をさすりながらやってきた。

「まさか宿題忘れただけであんな目に遭うとは……予想外もいいとこだぜ」

「さすがにあれば災難だったな」

数学の時間、結局宿題が終わらなかつたトオルは罰として山のよなプリントを渡され、それをこの時間中にやっておけ、と言われたのだ。

「あのおきのお前の絶望した顔つたらもう爆笑もんだったな」

「うるせえ。杉原さんに写させてもらったくせに。つーかあのプリ

ントやったせいで右腕攣りそうだしマジ最悪だわ」

「俺はお前みたいに毎回やってこないわけじゃないから見せてもらえたんだよ」

憎たらしげにこちらを見てくるトオルを軽く受け流す。

それでも先生に俺のことをチクらないところはやっぱりいい奴だと思ふ。今度ジューズでも奢ってやるか。

「それにしてもチャイム鳴るの遅いな」

「そういえばそうだな」

時計のほうを見ると長針はすでに「12」を回っている。

いつもなら長針が「12」を指すのと同時に昼休みの始まりのチャイムが鳴る。

しかしいまだにチャイムがならない。

「早く弁当食べたいんだから早くしろよな」

隣でトオルがぶつくさぼやいている。

それもそのはずで、この学園は昼食を摂る場所は指定されていない代わりに、平等にするためにチャイムがなるまでは食べ始めてはいけないことになっている。

しかし長針が「1」を指してもスピーカーからはチャイムどころか物音一つ聞こえない。

変だな。

そう感じたそのときだった。

ビー！　ビー！

「な、なんだ!？」

「け、警報？」

いきなりスピーカーから音がでたかと思ったら、廊下にある警報機が作動していた。

「おいおい、今日は警報で食べ始めろってか」

「こんなときにまでよくそんなこと言えるな」

学園に入学してから初めての音に驚いていた俺はジョークとも思える呟きに呆れる。

しかしそうこうしている間も耳をかき鳴らしている警報はやまない。

この事態に教室もざわつき始めている。

しかし何で警報がなっている？

誤作動か？ いや、それにしては全く止む気配がない。

訓練、というのも考えられなくもないが前述したように今まで警報がなったことは一度もない。

ではなぜ――？

しかしその疑問はトオルに聞くまでもなく、スピーカーから聞こえた声によって明かされる。

「緊急避難警報発令、緊急避難警報発令。一般市民の方々は速やかにお近くのシェルターに避難してください。緊急避難警報発令、緊急……」

「緊急避難警報……?」

全くもって聞きなれない言葉に少なからず違和感を覚える。

するとスピーカーから機械音声ではない、聞きなれた声が聞こえてきた。

「迎撃科の狼火だ。警報のとおり、非戦闘員である下級生徒の諸君は全員速やかに学園の地下シェルターに避難しろ。繰り返す非戦闘員である……」

「おいおい、いったいどうなってるんだよ！」

スピーカーからの指示にトオルが、いや、クラス全員がざわつき始める。

「ちよつと日向どうなってるのよ」

「大丈夫なんでしょうか……」

この予想外の事態に凜華や香奈もすぐに俺たちのところに駆け寄ってきた。

「いや、俺に言われてもなんとも何もわからな……」

「ちよつと何いきなり黙り込んでいるのよ」

わからない、のところでいきなり黙り込んだ俺を凜華が少しイライラしながら聞き返す。

（ちよつと待てよ……）

そんな凜華を、しかし俺は相手にせず考えに潜り込む。

今スピーカーから流れていた警報は恐らく島全体にも流れているだろう。

ということは一般市民を地下シェルターに避難させなくてはいけないほどの事態が起きた、あるいは起きるということである。

そして地下シェルターとは試験段階のために不足の事故が起きたときに一時避難するために作られた。が、この地下シェルターには確か本当の理由があつたはずだ。

（そう、確か……一般市民も安全の確保ともう一つ、市民に……世間にアグレッシンの恐ろしさを知らせないため——）

「いや、まさかな……」

頭にでてきた一つの単語を、その可能性を否定する。

いや、否定したかった。

しかしそんな俺の願いも虚しく、狼火から衝撃の事実が明かされる。

「そして全上級生徒に告ぐ。本部の命令により、学園はこれより第一種迎撃態勢にはいる。各自各科ごとの棟に速やかに集まれ」

「そんなんっ！」

「まさか！」

「第一種……！」

第一種迎撃態勢。

それが意味することはただひとつ。

「アグレッシン迎撃戦……！！」

第二十話 「アグレッシン迎撃戦……!!」 (後書き)

これにて一応二章は終わりとなります。

この作品は冬か春にMF文庫jさんに応募してみようとおもっているので次の三章が最終章となります。

どうか最後までお付き合いいただけたら作者としてこの上なくありがたいです。

第二十一話 「い、いいから服をきてくれ！」

アグレッツシンが初めてその姿を地球にさらした日、まだ人類の大半がその存在を知らなかった。

それもそのはずで、アグレッツシンが姿を現したのはオーストラリア大陸付近、当時の国連がそれを人類の敵となりうる生物と理解し、さらに奴らに気づかれずに映像を持ち帰ってくるまでおよそ丸三日かかった。

そしてその間にすでにオーストラリアはアグレッツシンによって首都キャンベラを基点に大陸の七割が壊滅的被害を被っていた。

それでもオーストラリアはその未知なる敵に政府も軍もお手上げ状態。

そしてその二日後、生き残った住民を各国への避難完了とほぼ同時に国一つがアグレッツシンの手によって崩壊させられた。

その後奴らはほんの一時期は大陸から姿をくらました。

そのためその隙にアグレッツシンらの対策を練り始める。

しかし映像からの解析は失敗、偵察部隊なども成果をあげられずいまだに世界が混乱していたそのとき、遂にアグレッツシンは活動を再開。

まるで狙うかのように各国の首都を襲撃、何とか迎撃をしてもまた大陸付近から出没しては首都に襲撃しては被害を被りつつも撃退の繰り返しだった。

こうした首都防衛戦は今もお延々と繰り返されており、今回はその標的が日本になったというわけだ。

そして日本アグレッション対策本部からここ近未来都市——否、日本の科学の全てが注ぎ込まれた首都最終防衛都市に迎撃命令が下るのはいささか当たり前でもあるのだ。

「さて、今回君らがしなければならないことは二つ。一つは命をはってでも敵を一体たりとも逃がしはしないこと。もう一つは本部のリベンジャーがここに到着するまでの間、できる限り敵戦力を削ること」

そして今、学園は各科ごとに迎撃態勢に入っている。

医療科なら戦場となる荒地の近くに緊急治療テントの準備。工学科ならブレイカーのスタンモード（危険や犯罪の未然防止のために学生のブレイカーは常時スタンモードになっており、どんなに適性率が高くても一定以上の威力は出ないようになっている）の解除の準備などだ。

そして迎撃科はというと作戦確認と配置分けだ。

ちなみに迎撃戦は基本チームごとに配置されるらしく、そのチームと言うのが対抗戦のチームのことだ。

「もし逃がしてしまったら……」

作戦内容を聞いた一年と思われる者がおずおずと手を上げる。

それは誰もが考えたことで、誰もが考えたくなかったことだった。

だが……

「一応首都とその範囲二十kmは自宅待機命令がでているはずだが……それでも町はパニック、リベンジャーが始末するまでに死傷者は千は超えるだろうな。それにまずこの島が襲われないという確証はどこにもない」

「……っ！」

狼火の容赦のない言葉に、室内の全員が息を呑む。

“一匹も逃がさない”

それは非常にわかりやすく、そしてこれでもかというくらい難しいことだ。

「さて、とりあえず配置についてだが、三年と四年で前線。二年が後方で前線の漏れの始末、ブレイカーになれてない一年は待機だ」

全体をゆっくりと見渡しながら狼火は説明を続ける。

「ちなみに狙撃ができるものは後方の援護としてチームの仲間とは別行動で狙撃隊として行動してもらう。無論、一年も上級生徒だ。場合によっちゃ出撃もありえるから心の準備はしておけ。では各自準備が整い次第待機所に集合だ」

「はい！」

指示が終わると同時に人が流れるように迎撃科棟から出て行く。
今から強化服に着替えたり、ブレイカーのスタンモードを解除しにいったりするためだ。

「日向さん」

なんとか流れから抜け出すとちょうど香奈と凜華がいた。

「やっと会えましたね」

「ホント人が多いと大変よね」

「まあな。とりあえず俺たちも解除してもらったためにトオルのころへ行くぞ」

「あんな変態にやつてもらうのは癪だけどね」

「けど私は一旦部屋に帰って強化服に着替えないといけないので…」

…

「ん、そういえばそうか。なら俺たちも一旦戻るか」

「そうね」

これからすることを確認すると、流れが少し落ち着いたので見計らって俺たちは走って寮に戻った。

部屋に戻り、さっそく午前使ったかばんを置いてから一口水を飲み強化服に着替える。

腰ホルダーにブレイカーをセットし、外にでるともう凜華が待つ

ていた。

「随分と早いな」

「着替えるだけだから。女は男と違ってやるのが早いだよ」

「そういう……ものか？」

よく判らないがまあいい。

「それよりも香奈はまだか？」

「香奈ならさつき『もう少し待ってて』って言ってたわよ」

「ん、そうか。なら香奈の部屋の前で待つとするか」

「あ、それなら私は先に工武科の友達にスタンモードを解除してもらいに行ってもいい？」

「それじゃ待機所で待ち合わせだな」

「うん」

凜華とは別行動になった俺は一人一つ上の階にある香奈の部屋の前に向かう。

部屋のカーテンの奥にまだ明かりが見えるあたり、まだ着替え終わってないみたいだな。

（とりあえず待つか）

それから壁に寄りかかって待つこと数分、後どれくらいかかるか聞こうか迷っていたとき中から「凜華さぁん」と呼ぶ香奈の声が聞こえた。

「凜華は先に行ったぞ」

「ええ！？……ホントですか？」

中に聞こえるよう少し大きめの声量で答えると、中から何か焦っ

ているような返事がきた。

「どうかしたのか？」

「い、いえ……あの、その……」

どんどん聞こえなくなっていく声に心配になっていると、一泊おいてから「な、中に入ってくれませんか」という恥ずかしそうな声がした。

言われるがままにとりあえず中に入りリビングに行く。

女性の部屋らしく隅から隅まで整理が施されている。

「あの、ちよつとこつちに……」

綺麗な部屋だなあと感心していると奥の個室から香奈の呼ぶ声がしたほうへ急ぎ歩きでそちらへ向かう。

「いったいどうした……って！ 何でそんな格好を！？」

「えっ！ み、見ないでくださいっ！——って私が呼んだんでしたよね。で、でもこれにはちよつと理由^{わけ}があつて……」

個室のドアを開けた瞬間、俺は軍人の如くキレのあるすばい回れ右をした。

その理由は至ってシンプル、部屋の真ん中にスタイル抜群の美女が下着姿でいたからである。

「い、いいから服をきてくれ！」

「そ、それができたらしてますって！」

服が着れないということはどういうことか。俺は恐る恐る香奈のほうを向きながら聞く。もちろん顔だけを見るように意識して。

「な、なんでできないんだよ」

「それが……ブ、ブラを替えて新しいのを取ったらホックタイプだったんで鏡を見ながらやろうとしたんですけど……その、買ったのが先週だったからかですね、その……」

「その……なんだよ？」

涙声になりながら話す香奈が途中で黙り込んでしまったので聞き返す。

すると、香奈はさらに涙声になって、

「こ、ここまで言ってもわからないんですか？ うう……だから、その……む、胸が大きくなってサイズが合わないんです……！」

最後らへんは半ばやけくそ気味に言った香奈の言葉を理解するまで、俺はたつぷり五秒はかかった。

（ええと、ようするに先週はサイズが合ってたブラが今はもう着れない……ということなのか？）

要するに一週間で約ワンサイズでかくなった……と？

その驚愕の事実には俺は足が痺れるような感覚を覚える。

もちろん、いつも凛華べったんを見ている俺としては到底信じられない話だ。が、香奈がそんな嘘を言うような奴じゃないのは知っているし——何より今両腕によって隠されているあの立派な二つの富士山が、今の話が真まことであることを物語っている。

しかしそういうことなら簡単だ。

「そ、それじゃ他のやつにすればいいじゃないか」

思いついたことを言いつつ、つつい胸元にいつてしまう視線を無理やり部屋に泳がせる。

よく見てみると、寝室らしいこの部屋は鏡がついているクローゼットとベッドしかなく、他には少女部屋にありそうな可愛いぬいぐるみと部屋の電気のリモコンが転がっている。

「それが他のはこれより全部サイズが下で……さっきまで着てたのはもう洗濯機の中ですし」

「そ、それじゃどうするってんだよ」

「え、ええと……多少無理やりでもいいんでホックを留めてくれませんか？」

言っていることが頭はわかってているのだが心が、というか理性がついていかず念のため右と左、そして上を見る。

「……あのさ、それやるのってやっぱり」

「……はい、お願いします」

予想外すぎる展開に俺は目の前のことを理解するのに精一杯になる。

「ええと、俺女性の下着なんて着けたことないんだけど」

「そ、そんなの当たり前です！」

とりあえず頭に浮かんだことをいっただら怒られてしまった。

「早くお願いします！」

「い、いや、でもこれは……さ、さすがに」

自分の顔がどんどん赤くなっていくのにも気づかないほどテンパってきて上手く言葉が続かない。

「下着を着ないで行くわけにもいけません。そしてなによりこの

格好で日向さんの前にずっといるのは恥ずかしいんです！ 死にそうなんです！」

「わ、わかった！ わかったから泣かないでくれ！」

結局俺は声をあげて泣きそうな勢いの香奈に負け、顔を真横に向けながら香奈の背後に回る。

「じゃ、じゃあいくぞ」

「は、はい…… あ、その前に電気暗くしてもいいですか？」

「あ、ああ」

さすがにこんなに明るい電気じゃ恥ずかしいのだろう、香奈は目の前にあるリモコンを取ると電気の強さを最弱にした。

「ええと、このホックを留めればいいんだな？」

「はい、そうです」

電気はほとんどないような光で、昼間なのにカーテンも締められてるからか部屋の中は自分の手元を見るだけでも精一杯の明るさで正直ありがたい。

もし明るかったらどうやっても香奈の体を見る羽目になり、正直すごく気まずい。

一応ホックも確認したので早速留めようとする。が、初めてだから暗いからか、これがなかなかできない。

しかも力づくでやろうとちょっと力を入れると、きつくて痛いのが香奈が変な声をあげるのでやりにくくてしょうがない。

いや、それ以前に自分の正気を保つだけで精一杯だ。

しかしこのままでは埒があかない。
そう思った俺は一度手を休めて香奈を見る。

「よし、このままじゃ終わらないから痛いかもしれないけど、今から一気に締めるぞ」

「えっ、は、はい」

疲れたのか少し息が乱れている香奈を心配しつつもまた手に力を込める。

「それじゃいくぞ……せーのっ！」

パチン。

「で、できたぞ！」

「ほ、ほんとですか？」

一気にやったせいからさらに声をあげた香奈だったがすぐにちゃんと留まっているか確認してくれた。

「どうだ？ 大丈夫そうか？」

「ちよっときつくて胸が痛いですけど……取れることはなさそうです」

なんとか成功できたことによって今まで体を支配していた緊張などの重みが一気に抜けていった。

だがそれがいけなかった。

「うわぁっ！」

「日向さんっ！」

体の力が抜けたことによって重心が大きく移動し、俺はいつの間にか踏んでいたらしいぬいぐるみで滑ってこけてしまう。

どんっという鈍い音とともに俺は床に腰をぶつけたが、香奈が咄嗟に手でカバーしてくれたおかげでなんとか頭はぶつけずにすんだ。しかし――

（む、胸が顔に――！）

どうやら香奈は抱きつくように俺の頭に手を回して一緒に倒れたので、ものの見事に俺の顔は香奈の豊かな山の間の未知の世界にフットしていた。

「ふ、ふもふもふも《これはわざとじゃ》………！」

「ひゃあっ！ く、くすぐったいです………！ 喋らないでください」
なんとか言い訳しようとする、頭の上のほうからまた涙声が聞こえる。

「ぷはあ」

泣きそうになりつつも香奈が上体を少し上げてくれたおかげで俺はようやく息が吸えた。

「ご、ごめんなさい。こんな目にあわせちゃって………」

「い、いや香奈のせいじゃねえよ」

ずりずりと這うように上のほうから下がってきた香奈はちょうど俺の胸の前辺りで顔を置き、謝る。

（しかしそれにしても………）

いくら下着を着ているといえ、それでも純白の布に押さえつけられながらもその大きさと形の良さをみせつけてくる二つの山に自然と目がいつてしまい、すぐにそらす。

「か、香奈？」

このありえないシチュエーションに動揺して気づくのが遅れたが、しばらくたつても香奈が動く気配がない。

ちらりと香奈のほうをみるとなにやら考え事をしているような顔をしていた。

「……日向さんって今ドキドキしてます？」

「はいっ!？」

いきなりの質問に声が裏返る。

「なんでいきなり……」

「いいから答えてくださいっ」

「こ、答えなきゃだめなのか？」

「はい」

「ド、ドキドキしてるに決まってんだろ。俺だって男だし」

何の罰ゲームなんだと思いつながら一応素直に言う。

正直恥ずかしさで死ぬそうだ。

「そうです……よね」

まさかたまたまだが俺が胸を見てしまったことに気づき怒っているのだろうか？

ふと頭に浮かび、俺の頭は哀れにも次の瞬間には言い訳を必死に考えようとしていた。

しかしその予想は外れていた。

「あ、あのもし日向さんが……あ、あれをしたいっていうのなら私

は……」

「香奈……？」

この状況でのあれ、というのはいくらいつも鈍感と言われている俺でもなんとなく危険なことだということは察したが、いつもと雰囲気が違う香奈に戸惑う。

「私ずっと思ってたんですけど……日向さんがいなかったら私はジャスティスに連れ去られたときに死んでいたんですよ」

しかしそんな俺を知ってか知らずか、どこか覚悟を決めたような顔をした香奈がゆっくりと言葉を紡いでいく。

「でも私は生きて帰れた……それもこれも全部日向さんのおかげなんです。だからお礼がしたいんです」

「……」

だいたいなにが言うのか予想がつく。

しかしあえて俺は黙って聞く。

「命を助けてくれたんです。だから私は一度死んでいるはずだった私を助けてくれた日向さんのためなら……なんでもします」

「……」

「だから……したいのであれば、いえどんなことでもしたいことがあったら命令してください。日向さんが……あなたが喜ぶことなら、幸せになることなら、なんでも……だから……」

「……」

あの日からずっと抱えてきたのだろうその思い……そして覚悟に俺は何も言わない。

考えているのではない。

言うことは決まっている。

たぶんあの日からずっと抱えてきた思いに返す言葉はたった一つ。

「じゃあ……なんで震えているんだ？」
「……っえ？」

そう香奈は、焰香奈は自分でも気づかないうちに震えていた。自然と震えていた。

「お前、俺にどんな命令をさせられるか本当はおびえているんじゃないのか？」

「そ、そんなことは……」

「誰がお礼が欲しいと言った？」

「っ！」

なんとか言い返そうとしてきた香奈に俺は追いつちをする。

その声には確かな怒りがこもっていた。

そう、俺は怒っている。こんなことを言い出した香奈にでもあるがそれだけではない。そこまで追い詰められるまで香奈の気持ちに気づけなかった自分に、だ。

「仮に俺が命令したとしよう。そしたらどうだ？ それじゃお前はまるで主人に言うことを聞く奴隷じゃねえか」

「で、でも」

「俺はお前を奴隷にするために助けたんじゃない」

これ以上言うとな香奈のことを傷つけるかもしれない。そうわかっていながらも俺の口が止まることはなかった。

「いいか、よく聞け。俺はお前に生きて欲しかったから助けたんだ。それなのに他人の命令を聞くなんて……そんな奴隷のような生き方

は俺は認めない。そんなのは死んでいるも同然だ。……さらに言えば俺がお前を助けたかった理由はもしかしたらただの自己満足かもしれない。か弱いヒロインを助ける、カッコいい主人公になりたかっただけという」

「そんなことありません！ 少なくとも日向さんはそんな人じゃないです」

「……そうか」

自分がどれほど恥ずかしいセリフを言っていることが。

そんなことは百も承知だ。

けどやめる気はない。

今さらやめられない。

たとえ相手を傷つけることになっても。

だからこれだけは、あの日の後から感じていたこれだけは言わなくてはいけない。

「いいか、もし仮にお前が俺に好意を抱いているならばそれはにせものだ」

「っ！」

今にも泣き出しそうな香奈の目を見て、はっきりという。

「なんで、私は！」

「いいや、違う。少し言い方を間違えたな」

泣くのも恥じずになにかを必死に伝えようとしてくる香奈にスト
ップをかける。

「正確には今お前がここでにせものじゃなくて本物だと言っても、俺は信じられない」

「なんで……」

「じゃあお前はなんでも命令を聞くななんて奴隷みたいなことを、生きるのを自分から諦めた言っただやつの言葉が信じられるか？」

「あつ……」

さっきからキザのようなセリフを言っている気がする……頭の中で客観的な俺が引いているのがわかるが今はそれに構ってられない。

「とにかくだ。お前がさっきみたいなことを言わなくなったらそんなときはちゃんと聞くよ……ってかそろそろ時間がないしこんなことしてる場合じゃ」

恥ずかしさに耐えられなくなり適当に話を切り上げようとすると、俺の胸の前で涙を拭いた香奈はクスツと笑った。

「そうですよね……少し考えてみます」

「……おう」

暗闇の中香奈が見せた俺に表情は、泣いたせいで目が少し赤く腫れてたがそれをも感じさせない、最高の笑顔だった。

第二十一話 「い、いいから服をきてくれ！」（後書き）

「スタンモードや香奈、凜華のブレイカーの二種類目の武器について」

最近公募用のほうも改稿しながら書いているのですが、その影響でこっちと公募用に少々ズレがおきました^^；

その例がこの「スタンモード」と香奈、凜華の二種類目の設定です。ですのでこの場で軽く説明します

まずスタンモードというのは簡単に言えば訓練などのときに誤って怪我をしないようにあります。ですので対抗戦も本編では書いてませんがスタンモードでやってます。だから相手を戦闘不能というくらいよい状態にできると言うわけです（もちろん痛みはあります）

次に二種類目の武器設定についてですが、香奈は槍、凜華は双手剣となっています。

これはこの作品の特徴であるブレイカーをもつと使って“変幻自在バトル”をしたいからです。

ちなみに凜華の双手剣は本編のほうでもジャスティス戦で短剣を使ったバトルをしていたので。

香奈の槍は実はまだ保留中で場合によっては鞭などに変わるかもしれません。

ちなみにリアは狙撃に突発している変わりに他が駄目なので狙撃中のみ、日向はブレイカーの特性上刀以外は変えられない（バーサー

カーシステムに対応したデメリット」という設定です。

最終章にしてこんなことになってしまい申し訳ありませんが、どうぞ最後まで「光翼」をよろしく願いますm(_____)m

第二十二話 「あんな……嘘だろ……!？」（前書き）

前回はなぜかラブコメがはいってしまいましたがこれからは本当にシリアスです。

次次話からくらは途中残酷な表現が入るかもしれませんが一応ここで記載しておきます。

ではどうぞお楽しみください

第二十二話 「あんな……嘘だろ……!？」

「ここか、待機所は」

俺は入り口と思われる場所にある『キャンプ場』と書かれた木の看板を見ながら呟く。

ちなみに香奈はまだ着替えるのに時間がかかるそうだったので俺はスタンモードを解除してもらったために、一足先にここに来た。

奥では先にきていた医療科や工武科がテントの中で作業をしている。

他にもすでに強化服に着替え終わった迎撃科のやつらが休んできたり工武科にスタンモードを解除したりなど……島の南に作られ、いつもは人気のないキャンプ場は今、まさしく待機所——後方支援場という本来の姿になっている。

そしてさらにその先には未開拓地という名のところどころに木があること以外は土で埋め尽くされている荒地……これから戦場となる場所が見える。

「迎撃科の諸君、聞こえるか」

しばらく待機所を回り、トオルを探していると、先ほど配布され耳につけてある小型通信機から狼火の声が聞こえた。

「たった今本部から連絡があつた。どうやら本部のリベンジャーがここに到着するまで一時間はかかるそうだ。敵との予測交戦時間はおよそ残り二十分。よって作戦開始は今から十分後だ。まあ簡単に言えばお前らはこの四十分間を耐え切ってくれば作戦は成功となる

る」

今通信機から流れてくる声の張本人、狼火とその他迎撃科教員は通信科と一緒に通信科棟内の大型モニタールームにいる。

モニタールームには何十台ものモニターがあり、そこから俺たちに取り付けてある通信機の内臓カメラなどから状況に合わせリアルタイムで指示を出せるのだ。

「それと成宮聞こえるか？」

「は、はい」

不意に狼火に呼ばれ、通信機越しなのに背筋が自然と伸びる。

「なんですか」

何か言われるようなことをしただろうか、などと考えてると予想外の言葉が飛んできた。

「ああ、お前はバーサーカーシステムがあるから……」

「ちょ、ちょっと！ 何言ってるんですか！」

この前ジャスティス戦の後システムについては『私は絶対に言わない』とかいっておきながら何さらつと言ってたんだこの人！

と今のが他のやつらに聞かれてないかと俺があたふたしていると「ああ、心配するな。これは個人チャンネルだから聞こえるのはお前だけだ」

「な、なんだ……」

最初からそう言えよ、と思うがそこは必死に抑える。

ちなみに個人チャンネルとはさっきまでの共通チャンネルと違って特定の人にのみ通信を繋げられる。

これは主に戦闘が始まった後チームごとに通信を取り合うのに使

う。

「それで、なんです？」

個人チャンネルということもあり、だいぶリラックスして聞く。

「それなんだが今回は一年は待機命令なのだが……お前らAチームは最終防衛ラインとして迎撃戦に参戦してもらう」

「Aチームってことは凜華や香奈も……それも最終防衛ラインだなんて無理ですよ」

香奈も下級だが一応Aチーム扱いなので今はもう狙撃チームのほうで準備を進めているはずだ。

ということは実質三人でやることになる。

素人がみたって結果はわかっているはずなんだが……

「なあに、最終防衛ラインっていつでも前衛のやつらが討ちこぼしたのを片づける、いわば予備のようなものだ」

「しかしだからといって」

「大丈夫だ。お前が守る場所は一番待機所に近く、狙撃の援護も受けやすい。それにお前達の前には何十チームという三、四年が主体のチームがいるんだ。きたとしても一匹か二匹だろう」

「はあ……」

狼火にしては陽気で明るい声の説得に無意識のうちにため息がでる。

（ホント、戦闘前になると途端に機嫌よくなりやがって……）

しかし戦場において指揮官の命令はほぼ絶対。

「そういうことだから他のやつにも伝えておけよ」

「……はい」

それがどんなに無理なことでも断ることはできず、結局俺は頷くしかなかった。

「……さて、早くトオルを探すとするかな」

俺は個人チャネルが切れたことを確認しながら重くなった足を引きづるようにまたトオルを探し始めた。

その後俺はすぐにトオルを見つけることができ、作戦開始の五分前には凜華たちと合流できた。

「さて、ではこれよりそれぞれ配置につけ。やつらが来るまでもう時間はないぞ」

待機所と戦場を仕切るかのような防壁の前にいる俺たち戦闘員に指示が出される。

それと同時に防壁のいちぶでもある扉が、まるで地獄に誘う死神のような荒地を見せびらかすように開かれる。

開かれた扉から吹いてくる静かな風は、時によつては気持ちのよいものだが、今はこれから起こる嵐の前の静けさにしか思えない。

しかしここまできておいて怖気づくわけにもいかない。

俺たちは不安をかき消すように雄たけびを一つ上げてからそれぞれの作戦位置に向かう。

最終防衛ラインを任されている俺たちAチームは事実上最後尾の位置になるため、いち早く到着した。

「日向、ホントに私達もでるの？」

「ああ。聞き間違いのはずがない」

各々得意の武器にブレイカーを起動させながら隣の凜華が不安そうに聞いてきた。

後方援護のためほんの少し後ろに陣取っている香奈も見れば緊張しているようだ。

（でも無理もないか……）

俺も緊張や不安がないかと言えば嘘になる。

しかし、事実俺たち迎撃科生徒がアグレッシンと戦うのは、もっと言えば実際に見るのはこれが初めてなのだ。

いくら口頭で『あれは恐ろしいものだ』『やつらは人の敵だ』などと言われてもそれを体感してない者には、昔の戦争の話を聞くのと一緒にただ単に「恐ろしい敵」としか写らない。

だから今は敵はどれだけ恐ろしいものなのかという不安と、案外たいしたことないかもしれないという期待が入り混じっている、変な気持ちなのだ。

「とにかく狼火の話によれば俺たちのところにはほとんど敵はこないらしい」

「ほんとに？」

「俺に言われても……なあ。狼火がそういつてただけで本当かどうかはそのときになってみないと」

「むう。結局は前衛の先輩方の活躍次第、か」

そんな不安定な気持ちは俺だけではなく凜華も同じでこうしてなにかと無意識に確かな情報を欲しがる。

ちなみに今は通信機を介さずに喋っている。戦闘が始まるまでは別に使うほど雑音はないからな。

「しかしもし仮に私達のところへきたら倒せるのでしょうか……」

香奈は自分の背丈ほどもある大きな弓を携えながら、その堂々たる姿に似合わぬおどした目をこちらに向けてくる。

「それもわからないけど……やるっきゃないっしょ」

「それもそうですよね」

「結局なにもわからないのね……」

（やばいな。二人ともこのまま戦闘したら危ない……）

香奈はともかくあのプライド高き凜華がいまだに落ち着いてないのは正直困る。

その不安や焦りからでてくる微妙な誤差で、いつもはできている連携ができなくなったりすることもある。

（さて、何か二人を落ち着かせることができるいい言葉はないか……）

自分にも焦りが始めていることに気づけていない俺がそんな気の利いた言葉を思いつくこともなく、それでも尚必死に考えようとしたそのとき。

「……おい。なんだあれ……」
いきなり聞きなれない声が耳元でした。

そしてそれが通信機越しの前衛が言ったことだと気づいたときには、すでにその言葉の意味が俺たちにも伝わっていた。

「な、なによ……これは」
隣の凜華も前を見たたん、呆然と立ちすくむ。

「あんな……嘘だろ……!？」
そんな俺の悲痛もしかし、目の前の現実を壊してはくれなかった。
俺たちのところからではかなり遠いはずなのに、はっきりと見える。

そう、それはまるで何千、何万の兵士がそれぞれ束になって襲い掛かってくるかのようで。

それはまるで空から流星群の如く隕石が降ってくるかのようで。

それはまるで人に痺れを切らした神が本気で俺たちを潰そうとしてきているかのようで――

「もしかしてあれが……アグレッシン……？」
後ろで香奈が小さく、でもはっきりと呟く。

「目標接近。交戦まで残り10秒！」

片方の通信機から通信科によるカウントダウンが始まる。

しかしその声すら俺の耳には届かない。

その声を聞こうと思っても、まず目の前のことに頭が追いつかないからだ。

「残り3秒」

「さあ、お前ら！ ついに本来の役目を遂げるときだ！ もうわかっていると思うがあれが人類の敵、アグレッシンだ」

もう片方の通信機からいつも聞きなれている、でもどこか高ぶっている様子の声でそれは確かなものとなった。

「1」

「準備はいいなあ！？」

「0」

カウントダウンの終了と同時に爆音とともに大地が突如揺れる。それがアグレッシンたちの着地の音だとはもちろん後方にいる俺にはわからない。

「さあ！ 迎激戦スタート！！」

興奮した様子の狼火の大声に我を取り戻した前衛が次々とブレイカーを掲げ、叫びを上げながらその化け物と呼ぶにふさわしい生物、アグレッシンへと突っ込む。

そして悲鳴にも似たその叫びはこれから起こる、現実とは思えない光景が、比喻ではなく本当の地獄が、これから始まることを、告げた。

第二十三話 「目標交戦距離に入ります」

「一体、そちらに向かっています」

「了解」

通信機から聞こえるオペレーターの声が、前線が仕留めきれなかったアグレッションがこちらにくることを知らせる。

次々と目標の敵の情報を伝えてくる声に集中すると、どうやらそいつはコアを守る役目をもつ外殻がほぼ破壊されており、恐らく後一撃加えれば倒せるほどだそうだ。

前衛の先輩達もそのことは承知で後は後衛の俺たちに任せ、次の敵に向かったのだろう。

「目標接近、残り500」

オペレーターが距離を伝えるとほぼ同時に、敵を肉眼でどうにか視認できるようになる。

「つげ、また気持ち悪いわね」

「そうですね……せめて虫のような見た目は勘弁してほしいです」

だいぶ場の雰囲気慣れたのか、凜華と香奈の本音が通信機越しに聞こえる（前衛の戦闘は後衛と違って凄まじく、その音は近くで話す俺たちの会話すら直接は聞き取れなくなるほどだ）。

（まあでもそのとおりだよな）

俺自身もだいぶ緊張感がとれたのか、心の中で同意する。

今こちらに向かってきているやつを含め、迎撃戦が開始されてから十分間で三体が最終防衛ラインである俺らAチームのところまで、今のようなコアを剥き出しにした状態で来た。

すぐ横に転がっている死骸——コアを破壊され原型を留めていない二体はどちらも芋虫のような形態をしていた。

そして今こちらに向かってきているやつもまた芋虫のような形態だった。

「残り100。迎撃体制に入ってください」

「了解。……ったく、前線の通信を聞く限り、もっと違う形態のやつもいるらしいが……どうしてこう、芋虫ばかりくるんだよ」

オペレーターの指示通りブレイカーを——アグレッシンの体液で少々汚れた白銀の刀を構える。

「そんなに余裕があるなら今からでも前衛にいけば？」

「っは、冗談を」

同じく両短銃を構えた凜華の言葉に苦笑を零す。

そもそも俺たちが相手しているのは外殻をほとんど壊され、体力も削られたやつら。

言うなれば弱点を剥き出しの、さらに動きが鈍くただの死に損ないに止めを刺しているだけなのだ。

もっとも、アグレッシンたちが姿を現したとき、正直俺たちも傷

一つついてないやつを何十匹も相手にすることになるのかと思っていた。

いや、もしかしたら本当にそうになっていたかもしれない。

戦闘が始まったときはまだ前衛の三、四年ですらパニックが収まっていなかったのだ。

そんな混乱が収まらないままに戦闘が始まり、当然の如くアグレッションに押されはじめた前線が後退を始めたそのとき、さすがにここから最前線まではかなりの距離があるのでぼんやりとしか見えなかったが二人の上級生徒が戦況を変えたことはわかった。

片方の一人がワイヤーのような細い武器を何本も同時に操り、今まさに進行しようとしていたアグレッションたちを上空のやつも含めてその場に拘束した。

なんとその数およそ百体。

これだけでも信じがたいことだが、さらにその隙にもう片方が近接系の武器で手当たり次第に外殻ごとコアを破壊するという圧倒的な実力でアグレッションを圧倒。

そうして何百といった敵戦力は一気に減少。こちらの士気も高まり始めの混乱もどこへやら、普段の連携を生かした戦法も復活。

狙撃隊も攻撃しにくい上空の敵を的確に打ち落とし始め、形成は逆転した。

「今こうして俺らが余裕こいていられるのも全ては先輩方のおかげだつてことだ」

「そうですね。じゃなきゃ今頃ここは見るに耐えない地獄になっていたでしょうね」

「まっ、そういうことだ」

「ちよっと、ぐだぐだ喋ってる暇はもうないわよ」

「んなことはわかってる」

目前にまで迫った敵を見据えながら互いに目を合わせる。

「さっきと同じように香奈はバックアップを」

「はい！」

「凜華も」

「言われなくてもっ！」

「目標交戦距離に入ります。迎撃してください」

「了解！」

オペレーターの指示と同時に俺と凜華は走り出す。

それに気づいたらしい敵も芋虫のような顔から顎を引き裂くように、ずらりと牙が並ぶ口を開く。

そこから超音波のような吠え声をあげ、6mはあるだろう縦長な、まるで芋虫をそのままにかくしたような巨体を蛇のように引きづってこちらに突進してくる。

「これでもくらいなさい！」

その突進を冷静に左右に避け、凜華が敵に向かって銃声をけたた
ましく鳴らす。

そしてその銃弾は的確にアグレッシンの複眼に命中。

「たあああ！」

アグレッシンが痛みにひるんだ隙に凜華は即座にブレイカーを双
短剣に変更。銃の撃った反動を応用して双方とも複眼の一つに突き
刺す。

さらなる追撃に悲鳴を上げるアグレッシンの複眼に刺さった双短
剣は凜華の意思により両短銃に変化。

結果、両短銃の銃口は双短剣の影響で複眼にがちり突き刺さっ
ている。

「この距離なら！」

銃口がしっかりと刺さっていることを確認した凜華はなんの躊躇
もなくトリガーを引きまくる。

そして実質本当のゼロ距離からの両短銃による乱射は確実に複眼
の一つを潰す。

「凜華下がれっ」

その激痛に怒り狂ったアグレッシンが奇怪な吠え声をあげながら
近くにいる凜華を攻撃しようと暴れまわる。

「日向、あとは任せたわよ！」

「おう！ 香奈！」

そのアグレッシンの猛攻を華麗に交わしながら後退していく凜華を確認し、香奈に指示をだす。

「わかりました！」

俺の声を聞くが早いか炎を纏った矢を俺に向けて放つ。

いまだに残っている複眼で凜華を追っていくアグレッシンに向かって走る俺にその矢が当たろうとしたその瞬間^{とき}、香奈の意思により炎は矢を燃やしつくし俺の刀へと矛先を向ける。

しかしその炎が刀を包んでも刀が燃やされることはない。

逆に刀は炎を纏ったことで威力が格段に上がる。

これは香奈が超能力者とわかったときから考えていたことで、つい先日できるようになった新たな連携技だ。

敵の攻撃は短剣で防ぎ、その隙に銃に変えて近距離射撃を当てるという見事なほどにブレイカーの特性を使いこなしていた凜華も、こちらが準備ができたことに気づき旋回するようにしてアグレッシンを誘導する。

距離はすぐに縮まり、俺と凜華が互いに横切る。
「締めはよろしくね」

「任せろ！」

刀の柄を強く握り締め、体制を低く前傾にして突進してくるアグレッシンに突っ込むように走る。

狙うは頭の頂上、人間で言えば脳にあたる部分。

口、複眼の上で剥き出しにされて赤く光っている六角形の物体――コア！

「はあああ！」

狙いを澄まし、雄たけびを上げながら跳躍で一気に距離を詰める。

しかしそれでも動じることなく、逆に跳ね返すとも言わんばかりの巨体が宙に浮いている俺の体に向かって体当たりを仕掛けてくる。

「これで……」

しかし俺はそれを空中で刀を振るった遠心力でドリルのように体を捻り回避。

回転をした俺の体が一回転をし終わるとそこはちょうどアグレッシンの頭の真上。

コアに止めを刺す絶好のチャンス。

これを逃がすはずがない。

まだ残っている回転の余力を使いながら刀を後ろに引き――刹那、捻れた体を戻す反動で刀を思いつきりアグレッシンに向けて振るう。

「終わりだああ！」

直後刀とコアがぶつかり合い、悲鳴のような音が鳴り響き、火花が散る。

しかし炎を纏った刀の火力は伊達ではなく、徐々にコアに亀裂が走る。

「おおおお！」

俺が雄たけびをあげたその瞬間、ガラスが弾けるような音とともにコアが破壊され、俺はそのままアグレッシンを頭から、魚を解体するように綺麗に切り裂いた。

倒した、という手ごたえはアグレッシンの奇妙な吠え声で間違っているのではないことを主張する。

「よし」

「やった！」

自然とハイタッチをする俺と凜華に香奈もホッとした顔を向けている。

どうやら同じ形状の敵は攻撃方法も似ているらしく、三度目ということもあり、だいぶスムーズに倒すことができた。

「だいぶ余裕そうね」

乱れた髪を直す凜華は、ブレイカーを基礎状態に戻しながら一応コアが破壊されていることを確認しに行く。

「まあな。最初よりかはだいぶ連携も上手くいくようになったしな」

凜華に見習うように俺もブレイカーを基礎状態に戻し、ついていく。

ちなみに刀に纏っていた炎は敵を切り裂き終わった後に役目を終えるように消えていった。

「この調子なら私達でも前線にいけるんじゃない？」

「前線とか、そんなの洒落になんねえよ」

ふと見ると凜華が本気とも思えなくもない笑みをしていたので、ほっぺをつまんでいじくる。

「むうう、そんなことわかってるもん」

凜華はぶつぶつ文句を言いながらも、なぜか俺にほっぺをいじくられるのを嫌がらない。

（けどまあ、ホント前線みたいに延々と戦闘が続く場所なんか行きたくもないよな）

そして案外凜華のほっぺは柔らかく、止めてとも言わないのでありがたく俺は右手でその柔らかさを堪能しながら考える。

そもそも一年である俺たちがアグレッションを倒せているのも前述

したとおり前線の、特に例の二人による活躍のおかげなのだ。

それを証明するかのように通信機を共通チャンネルにすれば前線たちの凄まじい戦闘音と叫び声が聞こえる。

オペレーターの声を察するに、恐らく傷一つついてないアグレッシオンたちを何体も、場合によっては同時に相手にしなければならぬ。

そんな状況下に置かれれば、システムがないと弱った敵を倒すのに精一杯な俺じゃ嫌でもバーサーカーシステムを使わざる終えないだろう。

だからこそ今回の配置が一番いい所だと言える。

「作戦予定時間は残り30分……この調子で行けば大丈夫そうだな」
「そうね」

「そうですが……こんなに上手くいっていてよろしいのでしょうか」
「……」

「香奈？」

同意する凜華とは裏腹に、香奈はかなり不安そうな声だった。

「いえ……なんだか迎激戦にしては戦場全体の緊張感が少なすぎる
と言いますか……」

「ちよつと香奈、不気味なことを言わないでよ」

「す、すみません。でもなんだか嫌な予感がするんです」

「嫌な予感、ね……」

確かに過去今までの迎激戦は全て多大な被害を被っている。

負傷者は数百人を越えるらしいが、今回の迎激戦ではまだ負傷者は数十人しかない。

今回はたまたま運がよかったとも言えるが香奈に言われるとなんだかそれも違う気がする。

まあ、俺としてはこのままバーサーカーシステムを使うことなく戦闘が終わるのが一番望ましい限りだが。

（まあ、大丈夫だろう）

香奈が不安性ということもある。

とりあえず悪いことは考えないようにし、目の前のことに集中することにする。

しかし、そうしている間にもアグレッシンとともにやってきた地獄の影は刻々と着実に近づいてきていた――。

そして数分後、香奈が感じていた予感は的中することになる。

第二十四話 —そして地獄が始まる。

三体目となるアグレッシンを倒してから数分がたった。

その間に四体目がくることもなく、特にすることもない俺たちは通信機を共通チャンネルにして前線の情報などに耳を傾けていた。

しばらくそうしていると、戦闘音などの間に少し雑音が入っているのに気づく。

（なんだ……？）

その音を聞き取ろうと通信機の音量を上げると、どうやらそれは通信科のなにかに驚きの声を上げているらしい。

「ま、まさか……」だとか「そんなん」などといった言葉が聞き取れる。

「ねえ日向、なにかあったのかしら」

同じくこの異変に気づいたらしい凜華が不安そうにしている。

少し後ろにいる香奈もどこか落ち着かない様子でこちらをみている。

「俺に言われても……ねえ……」

“そんなこと分らない”

そう言おうとしたそのとき、

「全戦闘員に告ぐ。聞こえるか？」

突如通信機越しに狼火の声がした。

その声は心なしかどこか焦っているようで、そのことに驚きを感じる。

「まず待機している迎撃科は全員今すぐブレイカーを起動して戦場に出ろ！」

「なっ……！？」

待機している迎撃科といえばまだブレイカーにすら慣れていない一年がいる。

なにを考えているんだ狼火は。

頭に浮かんできた至極当然の疑問はしかし次の言葉によって吹き飛ばされる。

「アグレッシンと思われる新たな生命体群を確認！　こちらに向かっ
てきています」

「さらに敵！？」

今戦っている敵の数はおよそ五百体。

今までの迎撃戦の中では確かに少ない数ではあるが戦いの最中に第二波がくるなんて聞いたこともないぞ。

それに今の敵数でも手一杯な状態なのに……後数百体でもきたら一匹か二匹ほど取り逃がすやつがでてしまうかもしれない――。

だがしかし、次に聞こえた悲鳴のようなオペレーターの報告に俺たちは今までの戦闘はまだ余興だったことを思い知らされる。

「敵数捕捉しました！その数――――お、およそ1200……！」

「千ッ……！？」

そして報告と同時に前線のほうからこちらに向かって侵攻してくる、空を覆いつくすかのようなアグレッシンの大群が視えた。

——そして地獄が始まる。

第二十四話 —そして地獄が始まる。(後書き)

これにて第二章 a c t 1 は終わり、引き続き a c t 2 が始まります。
完結まで残すところおよそ6話！ぜひ最後までお付き合いください！
次話投稿は早ければ月曜日です

第二十五話 「って、女!？」

「ま、まじかよ……」

作戦残り時間はおよそ二十分。

後もう少しというところでの第二波。

しかもその数は第一波の二倍以上。

その報告に戦場の者が全員呆然とするのも無理はない。

「ちょ、ちよつと！ 何よあの数!？」

「まさか第二波がくるなんて……！ それもこんな数の……」

青い空を塗り替えるようにどんどん押し寄せてくる黒い空の正体はまぎれもなく、アグレッシブだ。

予想もしていなかった事態に俺たちは戦場にいることも忘れ、ただ見上げる。

「……こりゃ他の一年を待機させていられるほどの余裕はないわけだ」

ただ事実を述べた言葉とともに乾いた笑いが零れる。

……どうやら絶望に陥った人は笑えるというのは本当らしいな。

他の戦場のやつらも呆然と絶望の目で空を見上げる。

そこにはもう青空はない。

「狙撃部隊、何をしている！早く上空の敵を打ち落とせ！」

突如戦闘音が消え去ろうとしていた戦場に、敵の第二波の報告以来何の音沙汰もなかった通信機から怒声が響く。

それは入学してからはじめて聞く狼火のいつもの冗談や飄々さが一切混じっていない、本気の声だった。

そしてその声からしばらくすると後方から狙撃部隊の射撃音が再び鳴りはじめる。

「前線！ 貴様らがボケツとしていてどうする！ そんな暇があるなら敵の一体でも仕留めて見せろ！！」そして今後衛のやつらは直ちに前衛に移れ。最終防衛ラインも待機だったやつらを配置させる。いいな？ 死にたくなけりやさつさと動け！！」

「りよ、了解！」

怒涛の勢いで指示を出し始める狼火に静まり返っていた戦場はまた騒がしくなり始める。

……
つてか怖ええええええ！

こんなに叫び散らす狼火は初めてだが……普段の三倍くらい怖いな。

立ち向かったら口を開く間もなく殺されてしまうかと思うくらいだ。

……まあ狼火のおかげで混乱に陥りそうだった戦場が統一されたのも事実だけだ。

「取り乱したりしてしまい申し訳ございませんでした。サポートを再開します」

不甲斐なくも狼火の怒声にビクビクしていると先ほどまで情報を伝えていたAチーム担当のオペレーターの声がした。

上空のアグレッションが効率よく落とされ、それによって前線の戦闘音がさらに激しくなり始めているあたり他のオペレーターも狼火の一声で我を取り戻したらしい。

それでもいまだに動揺は消えてはおらず、戦場に余韻をのこしたままだ。

「先ほどの狼火先生の指示によりあなた方Aチームも前衛になりました。前線では今までとは違い何体ものアグレッションを同時に相手にしなければならぬので私が伝える周囲の情報を聞き逃さないでください」

前衛か……。

どこか動揺を隠し切れず歯切れ悪く喋るオペレーターの言葉に俺は不安を覚える。

「ではこれより速やかに移動してください。もう第二波との戦闘も始まっています」

「了解」

俺たちはブレイカーを腰ホルダーから取り出し、いつでもアグレッションに対応できるようにして走り始める。

凜華も香奈も俺を追うようについてきている。

作戦残り時間はおよそ十五分。

その十五分を耐え切れれば後は本部のリベンジャーたちがどうにかしてくれるだろうが……

（大丈夫なのか……？）

先ほどとは違い、無傷のアグレッッシンたちを何体も、それも同時に休むことなく戦い続けることになる。

そんな過酷な状況下で凜華や香奈は無事でいられるだろうか。

そして……

俺はバーサーカーシステムを使わずに戦いきれるのか。

その不安は前線に到着するまで拭われることはなかった。

前線に向かい始めてから数分。

途中何体か前線から抜け出てきた無傷のアグレッッシンをみたが、一刻も早く前線に参戦しないとならないため、戦闘はせずにそれらは後衛のやつらに任せることになった。

正直かなりの不安も残るが今は後衛たちを信じるしかない。

そうして走り続けた俺たちが前線の最後尾に到着したとき、そこは地獄だった。

「これが戦場……なのか」

思わずそう感じてしまうほどその光景は酷かった。

何かの叫び声や体のどこかを負傷したと思われる者が呻き声をあげており、そいつらをアグレッシンから庇うように他の者が戦っている。

無論、無傷の者などはいない。

しかしそれでも戦闘続行不能と判断され、使用許可が下りたT-SAに乗った医療科に回収された者達の方までアグレッシンと戦おうとする三、四年の先輩達の実力はハンパじゃない。

個体によっては十数メートルくらいはあるアグレッシンたちを何体も同時に相手にしているその姿はもはやアニメのバトルシーンなのではと思わせるほどだ。

しかしそんな現実離れたこの場において嫌でも一番目に入るものが、唯一現実だという証拠——血だ。

コアを破壊されたアグレッシン、戦場を駆け巡る先輩達、そして負傷が酷く医療科の助けを待っているもの。

それらの周りには常に紅い血が舞っており、生々しく、戦場の至る所に血溜まりがある。

そしてその血の多くは恐らく人の血……。

ええい、周りを見回すのはやめだ。みていると吐き気がする。

「うつ……」

少し遅れて俺の後ろにやってきた香奈が口を押さえて座り込む。凜華も座り込みはしないまでも眉をしかめている。

「お、おい香奈。大丈夫——」

「敵一体高速で接近してきます！」

「っえ？」

座り込んだ香奈立ち寄ろうとした直後だった。

オペレーターの声に振り向いたときにはもう遅かった。

振り返った俺と凜華の目の前には黒い霧のようなもので身を纏った狼の形状のアグレッションが間髪いれずに襲い掛かってきた。

「な！？　しまっ……」

すかさず対応しようと思ったときにはアグレッションの牙が目前。

（避けきれない——！）

直感で感じたその瞬間、まるで時が止まったかのようにアグレッションは牙をこちらに向けたまま空中で固まった

「な、なにが……？」

無防備の獲物を目の前にして止まった？

それもこんな不自然に……いや、違う。

よくみると何かワイヤーのような細いもので拘束されている。

そして周りを見渡すと同じように何体ものアグレッシィンがその場で無理やり固定させられている。

「ワイヤー……固定……！ まさか！」

「ちよつとキミ！ なにボケツとしてんのよ！ 死ぬわよっ！」

そのワイヤーの主から通信機越しに怒鳴られる。

（や、やっぱりこれは序盤で戦況を変えた上級生徒の一人だ）

まさかこんな形で知ることになるとは……まあやっぱりブレイカーでこんなレベルの高い技ができるのは力がある男だよな――

「つて、女！？」

「そうだけどそれがどうしたのよ？」

つい口に出てしまった驚愕の声にワイヤーの主……否、女性は平然と答えた。

第二十五話 「って、女!？」（後書き）

今週テストがあるため次話更新は遅れます

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1722t/>

光翼のリベンジャー『だけど俺は戦闘狂だった』

2011年11月17日00時24分発行